
神の一枝

漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の一枝

【Nコード】

N0300J

【作者名】

漣

【あらすじ】

新田晶貴^{しんでん あき}22歳、一応女。夜空を見ていた筈なのに、突然現れた

光に【最強の盾】と呼ばれ異世界へ。

普通の女とは色々と違う晶貴。彼女を手に入れようとする様々な者たち。そして争い。

そんな中、彼女は何を選び、どう生きていくのか。

第 1 話

待ち人来らず、光り来る（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 1 話 待ち人来らず、光り来る

「ごめんねー！」

「いいよーっ。彼氏によろしくね」

「今度何かおごるから許してー」

「んー。楽しみにしてる」

駅前にある彫像の傍、携帯で会話をしていた女性は通話を切りジヤケットの内ポケットへそれを滑り込ませた。

季節はもう12月。

暖冬予想と言われながらも、肌当たる風は日を追うことに冷ややかなものへと変わってきている。

『寒っ…… やっぱ手袋してくれば良かったかなー』

両手を口元へと寄せ、「はぁー」っと軽く息を吐く。

僅かながらの暖気は冷気にさらされ、あっと言う間に消えてなくなる。

1週間前から約束していた友人との夕食だったが、久しぶりに定時で終業できたという恋人が相手では勝ち目はない。

年末は何処も彼処も気忙しいものだ。

元々、どこかの店を予約していたのではなく、合流して食指にあった店で飲食をするつもりだったので、誰かに迷惑をかけるわけでもない。

問題があるとすれば、外食予定だった彼女にとって、このまま家に戻っても冷蔵庫の中にはろくな食材がなく、調理してから食べるという気力が萎えているという事くらいだった。

何分、現在時刻は8時半を過ぎている。

これから帰宅がてら買い物をして自宅に戻り、それから調理して

食べるとなるとあと1時間以上はこの空腹と戦わないとならない。
途中で弁当を買うのもアリだが、今日は昼食も弁当だったのであ
まり気分が乗らない。

かといって、1人で豪華な食事もしたくない。
他の誰かが一緒だからこそ、そういう食事が楽しいのだから。

『どこかで簡単に済ませますか……』

小さく肩を落として、彼女の足はクリスマスイルミネーションで
輝く街並みへと進む。

よく行く店でパスタを食べ、軽くワインも飲んだ。
店を出、街頭の時計を見上げれば、時刻は9時半を指していた。
辺りを行き交う人々は表情も行動も様々。

ショーウィンドーを眺めるカップル、帰宅を急ぐサラリーマン、
プレゼントの包みを持つ男性や女性。

もうすぐクリスマス、そして年末年始。

この賑やかさは嫌いじゃない。

自分に向けられた優しさではないけれど、それでも何か……ほん
わかった温かい気持ちになれる。

空腹が満たされ、アルコールが身体に入った事で少しだけ寒さが
和らいだのか、彼女の足は帰宅の途である駅ではなく、反対方向に
ある公園へと向けられていた。

木々に囲まれ、遊具もある、さほど大きくもない公園。

企業の建物と建物の間にある公園なのだが、通り抜けは出来ず袋小路な形となっている。

その為、昼は子供たちやその母親で賑わっているけれど、夜ともなると人は殆どいない。

照明はあるが、椅子や地面を照らすように灯りを下部に向けている。

公園へと足を踏み入れた彼女は、その照明の裏手にある木々の中へと向かい空を見上げた。

『ビンゴ。新月はここに限るわー』

見上げた空には星が見える。

建物に街の明かりが遮られているので他の場所よりもはつきりと星が見えるのである。

小さな頃に居た場所をもっと沢山の星を見る事が出来た。

時代の流れもあるのだろうが、都会で一人暮らしを始めて、見える星の少なさに残念さを感じていた。

プラネタリウムも好きだが、やはり本物が一番いい。

飲み会の帰りに偶然見つけたこの場所に、彼女は何度も足を運んでいた。

『これからもずっと疎遠になってくんだよね……多分』

星を見ながら、先ほどの電話の相手の事を考える。

元々、そんなに友人と呼べる者は少なかった。

そして、その少ないながらも居た友人たちは皆、就職や恋人の出

現に伴って次第に交際時間が減少の一途をたどっていた。

遊んだり食事したりという友人が一人減り二人減り、先ほどの彼女が最後の一人。

その彼女にも先月恋人が出来て。

そろそろかな？　と考えていたのでショックはそんなにはない。ただ、一人の時間が増えただけ。

『そのうち……自分にもそういった大事な人が現れるのかねえ？』

ほんの少しだけ、自嘲した笑みが浮かぶ。
と。

視界の端に何かが入った。

『ん？……何だアレ？』

少し離れた奥にある樹の近くに、まるで蛍の様な光が明滅している。

けれど、流石に冬に蛍はあり得ない。

彼女は興味に駆られてそれへと近づいた。

光は、虫や何らかの器物が発光しているのではなく、本当にただ光だけの存在だった。

『わお。あなたの知らない世界、系？』

そんな事を思うが、光は決して恐怖を感じさせるものではなかった。

丁度自分の胸の辺りの高さにあるその光は、まるで街中のイルミ

ネーシヨンのように、色々な色に変化しているが、よくあるLEDのように冷たく刺し込む光ではない。

暖かくて柔らかな雰囲気的光り方で、ゆっくりとゆっくりと色が変わってゆく。

近付いていっても、消える様子も逃げる様子もない。

ただ、そこに浮き、光っている。

『綺麗なひかりね』

目を細め、そう思った瞬間。

【見つけた】

頭の中で声が聞こえた。

『はい？』

自分の耳……というか脳を疑ってしまう出来事に悩む暇はなかった。

【最強の盾、見つけた】

『え？』

そんな声と共に、光が彼女の胸へと飛び込んできた。

光に手が届く辺りにまで近付いていた彼女には、それを避ける事が出来ない。

痛みもなく胸に飛び込んできた光は、そのまま彼女を覆い尽くした。

淡い光が彼女を包み、そして消える。

光が消えた後には何もなかった。

光も、そして彼女の姿も。

目の前が一瞬光に包まれ、眩しいと思う間もなく景色が変わった。
「……」

足に地面がついてない状態というのか、もしかして浮いてるのかという感触。

目の前に見えたのは黒い髪にオレンジの瞳をした人間らしきもの。そして同時に、背中に今まで感じた事のない大きな衝撃を受けた。痛いとかいうレベルじゃなく、死ぬって！　っていう位の衝撃。宙に浮いている感覚だったのが、一瞬で重力に捕まる。

地に足がついた瞬間、先ほど受けた衝撃の強さで意識が朦朧としてきた。

目の前の人らしきものの、そのオレンジの瞳は瞬きも忘れて見開かれている。

『こんな色彩のニンゲン、見た事ないよ』

そう思ったのが最後の記憶。

彼女……新田^{しんでん} 晶貴^{あき}はそのまま意識を失った。

第 1 話

待ち人来らず、光り来る（後書き）

久しぶりに文章を作るので、きちんと連載できるか不安ですが、感想叱咤激励誤字脱字等いただけると嬉しいですよ。

第 2 話

謎多く、寝床は硬く（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 2 話 謎多く、寝床は硬く

じんわりと意識が浮上してくる。

眠りに就いて目覚めるときに感じる感覚と同じものに気づき、晶貴は先ほどまでの記憶を思い出した。

『外食して公園に寄って、不思議な光を見つけて。その光に包まれたと思ったら目の前に不思議な色彩をしている人間らしきものを見て。背中に思い切りバスでもぶつかっただんじやないかと思う位の衝撃を受けて意識喪失……って感じだったよなー』

思い出しつつ、いまだ目蓋は閉じたままにしている。

理由はふたつ。

ひとつは、横になっている自分の背に感じる冷たさと硬さから、ここが決して自分の部屋、もしくはそれに準じるような普通の場合ではないだろうという事が判るから。

もうひとつは、空気のおい。

耐えられなくはないが臭さを伴う空気が周りにある。

人らしき気配も近くからはしない。

目蓋の裏に見える光から、真っ暗でない事は判る。

『じゃあ……まずは確認から、ですかね？』

呼吸は普通にできている。

痛い所は特になし。

ゆっくりと手足をにぎにぎ。筋肉に力を入れてみても痛くない。

頭や胴体を左右に振るのもOK。

どうやら身体はまともに動きそうだ。

辺りの明るさがどの程度なのか判らないので、両手を持ち上げ手のひらで両目を隠す。

ゆっくりと目蓋を開け視線を横へとずらしながら目を慣らす。

この動作は昔、病院で同じような状況で目をそのまま開けて、天井にある照明の光で何日も目から光の残像がとれず苦勞したので、その時からの癖になっている。

瞳孔の収縮率が悪いんだそうで。医者曰く、自分の身体は他にも色々と「特異体質」なんだと説明された。

「……………」

目を開け、辺りをひと通り眺め、晶貴は上半身を起こした。横になっている場所の硬さと冷たさから予想はしていたけれど。

『うつひゃー』

その場合は、どう見ても牢屋だった。

部屋の広さは6畳ほどだろうか。

寝ていた石造りの寢床は壁にぴったりと横付けされている。

小さな窓はあるが、自分の身長の倍くらいの高さにぼつんと一つだけ。

明かりがもれているので多分、現在は夜ではないのだろう。

勿論、この部屋の周りが人工物で人工の照明が窓からもれているとも限らないが。

寢床と平行なかたちで向かい合っているのは壁ではなく檻。

触ってはないのではつきりとはしないが、錆びた鉄っぽい棒の群

れが柵となつて目の前にある。

部屋の中には水道どころかトイレもない。

隅の方に薄汚れた花瓶の様な壺があるところを見ると、それがトイレの代用品なのだろうと想像できる。

遊園地や何かのアミューズメントパーク以外、現代の日本にこういう状態の牢獄があるとは考えにくい。

かといって地球は広い。

西洋の城だつてこういう施設は残っているし、世界のどこかにまだ使用されているこういう施設がないとも言えない。

危険があるかないか。

どうしてもその一点に心配があるが、自分自身が鎖などで拘束されてはいない所を見ると、とりあえず現時点で生命の危険は少なそうだ。

『でもねえ？ ああいう色した人種はいないはず……コスプレとか特殊メイク除いて』

意識が失せる前に見た黒い髪とオレンジの瞳を思い出す。

誘拐や拉致監禁。あるいは新しいドッキリテレビだとかサプライズドキュメント。

自分の置かれている状況はまだ掴めないが、色々と想像だけは広がる。

いい想像も悪い想像も、予想の範疇にしておけばショックは少ないから。

現況を自分の知識と照らし合わせてみれば幾つもの予想パターンが出てくる。

『通常の予想以外にあるものと言えばタイムスリップっていうのも有りか。あとは異世界トリップ……とか有りそうで怖いねえ』

思わず笑みがこぼれてしまったのは仕方がない。

そっちの線が強いのだという事は薄々感じている自分が居る。

身体に違和感があるのだ。

手を見れば、それが自分の手だという認識はある。

けれども何かが違う……と、そう思う。

『幾分か肌の白さが増している気がするんだけど』

身体の他の場所も調べてみたいが、周りに鏡らしきものもないので諦め、異世界だという認識をことさらに強めている存在である発光体を見つめる。

『てか、なんでコレだんだん増えてくるのかな？』

気を失う前に出会ったあのひとつの光が、目覚めた後で部屋の中にひとつふたつ……と、ぱらぱらと湧いて出てきているのだ。

今では数も数える意味がないくらいに増えている。

これが何なのかは今でも判らないけれど、害のないものだという事だけを本能が理解している。

今も自分を気遣うかのように、ほわほわと近付いてくる。

『しっかし石の寝床ってのは冷たいねえ。間に毛布一枚くらい欲しいわ』

そう思った途端、幾つか集まっていた光のひと塊が自分の座っている部分へ飛び込んできた。

「へ？」

一瞬の事で見つめるしか出来なかったが、すぐに感覚で理解する。

『わぁ……あつたかい！』

理屈とかは全く不明だが、触れば石全体が温もっている事がわかる。

「君たちがやってくれたのね、ありがとう」

何となく光って見える石の寝床をすりすりとお撫でると返事のように光が軽く明滅する。

こういう事ができる所を見ると、これらは精霊とか妖精とかの類なのかもしれない。

座っている部分が暖かくなったせいか、再び眠気が襲ってきた。衝撃を受けた背中に痛みは感じない。

『先ほどと同じようにこの光が癒してくれたのかもしれない……』

そんな事を考えながら、晶貴の意識は再び閉じられていった。

第 2 話 謎多く、寝床は硬く（後書き）

主人公、二度寝に入りました。

第 3 話 始まりの 騒動（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 3 話 始まりの騒動

時刻は少し、遡る。

ラグド大陸の西部。

イルフェラム国の首都イルファにある王城内には、平素となんら変わりのない日常があった。

使用人たちは己の仕事をこなし、騎士たち以下軍人も警備や鍛錬に励み、役職を持つ者たちはそれぞれの職務に追われていた。

現在 23 歳となる王太子であるリクサムも、王より任されている色々な決済をこなしていた。

「太子、そろそろお時間になります」

王太子直属の騎士であり側近でもあるダレスが、時刻板を見てリクサムに声をかける。

彼は書きものをしていた手を止め、時刻板を見た。

「もうそんな時刻か」

立ち上がり軽く首元を整え、リクサムは執務室を出る。

向かった先は謁見の間である。

父王と共に王座に座り、手順に従って諸侯や臣たちからの申し立てを受けてゆく。

ひと通り貴族階級が終わったあとは庶民の拝謁である。

通常、庶民からの申し立ては村ならば村長、町ならば町長からそれぞれ領主へと伝わり、内容を吟味裁定されて必要な話だけが王都へと持ち込まれる。

その後、場内で会議が行われ認可が下りれば諸事情に応じて物資や人材が必要な場所へと向かう。

なので普通、庶民は王族には縁がない。

ただ、王族や貴族と懇意になりたい、顔や名を見知ってもらいたいと願っている者は少なくない。

庶民謁見とは、問題が解消されたのち「何々をしていただきありがとうございます」という礼に伴って贈り物を持つてくるという儀礼的なものである。

その役を貰う為に幾ら位かかるのかは知らないが、懇意にしている領主や貴族に金銭などを積み、間を取ってもらう事はままある事。前もって知らされている書面から見ると、本日の庶民謁見は三件らしい。

一件目二件目と何事もなく儀礼拝謁が終わり、最後の一件となった。

「ゴノウイク川への架橋工事、リクサム王太子様の御配慮により無事に完了致しましてございます。ナルマ村、トネイ村双方よりこの度の工事について有り難く御礼を申し上げます。高貴なる御方々にはお目汚しではございますが、これなるお礼の品、お納めいただければ幸せにございます」

リクサムの前方へ置いてある台の上に簡素な箱が置かれる。

後はその奉納物の中身を従者が読み上げ、拝謁者が締め口上を述べるだけとなった、その時。

箱の上方の空間に、突如赤い魔法陣が浮かび上がる。

赤の魔法陣は攻撃性のあるもの。

しかも陣の文字配列は即時攻撃を意味するもので、さらに太子と向き合うように形成されていた。

気づいたリクサム以下、騎士や近衛の者たちが一斉に防壁陣を張ろうとするが、何分この近距離では間に合おう筈もない。

陣が発動し、死をも覚悟した時。

赤色だった陣が突如紫に変じ、それとほぼ同時に陣の前に人間らしきものが湧いて出た。

正面に相対したリクサムと、その人物が見つめ合う。

新たな敵か！？ と、身構えた者たちの視線が次の瞬間、魔法陣に釘づけになる。

宙に浮いた状態のその人物の背で、赤の魔法陣が発動した状態のまま止まっているのだ。

いや、正確には止まっている訳ではない。

発動はしているし、攻撃はすでに成されている最中だ。

その攻撃を、浮いた人物の背側に浮かぶ青い魔法陣が……喰っていた。

光り輝いている青い魔法陣から獣のような顎がせり出して攻撃を全て喰らっていた。

そして赤の魔法陣から生み出された攻撃が終わり、その陣が消える刹那。

赤の魔法陣は凍った。

少なくとも皆の目にはそう映った。

そして陣の赤色が白色へ……変じる。

次の瞬間、白へ変わった陣へ、青の魔法陣から出ていた顎から凄まじい勢いで攻撃が成されていた。

先ほど呑みこんだ攻撃の倍以上の勢いのそれは、白い陣に全て吸収され陣ごと消滅する。

同時に床に足をつけたその人物は開いていた目蓋を閉じ、青の魔

法陣から出ていた顎は陣の内へ潜る様に消え、青の陣は床へと倒れ込む人物を包み込むように拡がり消えてゆく。

それは時間にして僅か十数秒の出来事。

けれど、現場を騒然とさせるには十分なものであった。

当然の成り行きで、まずは品物を持ってきた拝謁者が拘束され、連行されていった。

魔法陣の発生元となった箱は、現場保持の為その場ごと封印される。

問題は床に倒れている人物の方である。

気を失っているらしいその人物の様相は首を傾げざるを得なかった。

もこもことした膨らみを持ち、見た事のない輝きを放つ黒の上着。下部は濃い藍色をした足首まであるパンツと、紐の付いている履物。

どれも見た事のない服飾である。

頭部を見やれば、短く刈り揃えられた髪が、これまた闇夜の様な黒。

黒髪は特に珍しいわけではないが、問題はその瞳の色にあった。

その人物は王座の方を向いていたので実際にそれを目にしたのは王と太子、あとは傍に控えていた騎士兼側近の二人だけなのだが、彼ら四名は……というよりこの人員でまず発言権のあるのは王と太子だけなので騎士二人がまず口をつぐんでしまった。

「どう……思われますか、父上」

口を先に開いたのはリクサムの方だった。

「幻でなければ、そなたの見たものと同じものを儂も見ている……
が、まずは確認であろう?」

王はそう言い王座から立ち、伏している不審人物の元へと赴こうとする。

慌てて止める近従たち。

「陛下! この者は現在、護りの光に包まれております。不用意に触れない方が!」
「む、まことか」

現王陛下は視る方の魔術の力が弱い為、そこまでは確認できておらず、自分よりその能力の高いリクサムの方を見やれば、リクサムも頷いている。

「確かに。薄くではありますが、青の光に包まれたままです。本人の意識も承諾もない今、不用意に触れればどのような攻撃があるか判りません」

皆、先ほどの攻撃力を目の当たりにしているだけに、ぞくりと身体を震わせる。

王は「ふむ」と、その人物を見つめ。少しの間思案した後、発令する。

「文官と神官はすぐに、こちらの神殿から聖天神殿に連絡。中央で変異はないか確認を」

「畏まりました」

「正体不明のこの者は、近衛以下で手を触れずに術を使つての移送を」

「はっ！」

「移送先は牢塔の中層階。手枷足枷はなし、丁寧な扱いを」

「はっ！」

慌ただしく各々が職務に走る。

万が一を考えたのか、術で宙に浮かせている不審者を一分隊が取り囲むようにして運び出された。

王と太子も、まだ危険物の可能性の残る箱から離れるように謁見の間から出、別の部屋へと移る。

「枷もつけずに窓のある牢で大丈夫でしょうか？」

リクサムが王へと問う。

「護りの光は危害に反応する。丁寧に扱えば問題はなかつ」

「確かに。それより問題は先ほどの一連の現象と、あの者の正体だな」

辺りに居た官達が退室していった事で、ようやく王の側近であるルドルフが口をはさんだ。

他の官が居る時はわりと身分に沿った対応をしているが、元々王の乳兄弟でもあるルドルフは王より「言動対等」の許可を得ている為、こういった場面ではすっかりタメ口になる事が多々ある。

「まずは現象。箱から魔力が発せられていたが、こういった贈答品は前もって調べているのに仕掛けられていた術を発見できなかったとすれば、時限発動式なものだったんだろうという事。そして攻撃陣は太子へ正確に向いていた。すなわち狙いは太子一人に絞られていたという事」

現場を思い出しながらルドルフは的確に状況を判じる。

「普通、赤い陣は攻撃、青い陣は守り。赤い陣の後で青い陣が出た事で色が重なり紫に見えていたのは判る。だが、攻撃を喰うような陣とか、青の陣のままそれを吐き出すように攻撃が出来るとか……初めて見たぜ？ おまけに一度組みあがっている赤の陣を一瞬で転送用の白の陣に変化させるとか、有り得ねーよな」

王もリクサムも大きく頷く。

「で、その一連の技をやったのが、多分あの不審人物なんだろうけど。別の考えとしては、誰かがあの人物に技をひっ付けてこの場に転送したというもの。ただ、転送時に有る筈の白の陣はあの時点でどこにも現われてない。赤の陣のまん前に出て来てるんだ。オレ達が見落とす筈もない。となると、あの人物が現出した原因はただひとつに絞られる」

同じ考えのダレスも頷き、口を開く。

「あれは、召喚以外にあり得ない」

ダレスはリクサムに問う。

「今回のあの現象で、あの人物が行った事は、太子の盾となって攻撃を防ぎきったという事になりますが……太子、成人の儀の際に同時に行った召喚の儀は「盾」でございましたよね？」

リクサムは当惑したように言葉を返す。

「確かに俺が召喚の儀で願い奉ったのは「盾」だが。ああいうのはアレだ……普通の道具としての盾の事だぞ？」

この世界は唯一神である聖天、リ・ラ・リリウの創られた世界だと云われている。

その御姿は人間には見る事が出来ないが、力ある存在としてそれを感じ取ることできる神官や巫子たちによってその意思を受け取る事が可能である。

神は万能であるが故、その神の加護を受けたいと請い願うのは、昔から今日まで変わらない。

それが昔から行われている召喚の儀というものである。

神から授かったという様々な物、それらの中には武器や防具というものも多々あり、それには伝説もあるが、現物が残っているものもある。

ただ現物が残っていても、召喚者の居ないそれは神の力を発してはいない。

召喚された品は通常、一人にひと品で一世代限り。

すなわち本人しか使えず、本人が死去した場合は物品は残っていても、物品に付加されている神の能力が消えるのだという事。

神に対して誓願をし、望む品を請い願う。

誓願の内容、本人の資質。

この二つが伴い、神の琴線に触れる事が出来たならば召喚される品々。

その為、召喚の儀は行われても即時何かが召喚されるとは限らない。

召喚後、時をおかず召喚物が現れる事は稀で、良くてひと月。

召喚されるまで数年かかるものも普通にある。

勿論、神の琴線に触れる事がかなわず召喚が成されないものも多々ある。

それでも人は請い願う。

神の力を己の力、己の希望とする為に。

そして。

召喚物が召喚者のすぐ傍に現われるというものではない故に、召喚の儀を行うとその記録が神殿に残る形となる。

何処で召喚の儀が行われようと、神の摂理と云われる現象で聖天神殿の中にある一枚の壁に記録されてゆく。

記録されるのは召喚の儀を行った年代日時、行った者の名や住んでいる場所。

そういつた情報が壁に克明に記されるのである。

そしてそれは記録されて後、何処かへ消える。

次にその情報が現れるのは召喚物が神の地よりこの地に降り立った時。

先に記録されている召喚した者の名や住处、そして召喚物の形態や色などが壁に光り輝いて浮かび上がるのである。

壁を管理している神官たちは壁の文字をすぐさま記録し、召喚物の持ち主に連絡をする。

そして召喚者本人が召喚物を出現した場所まで拝受しに向かうのである。

ちなみに。

召喚物は通常本人しか触れる事が出来ないので盗まれるという危険はないが、召喚者の方にも仕事や家庭内の事情等色々あるので、出来るだけ早くに拝受できる様、召喚者が住处を出、召喚物を拝受し帰宅するまでの費用は神殿持ちとなっている。

現われた不審人物が自身の望んだ「盾」ではないかと問われ少し困惑したが、リクサムはすぐに否定を述べた。

「有り得ないと断言できるのは俺自身、あの人物に対して共感も共震もなかったからだ。召喚者と召喚物は引き合うもの筈、だがあの時そういったものは一切無かった。それに……」

リクサムが一度言葉を切り、大きく息を吐いてかぶりを振った。

「あれは、本当に……人間なのか？ あのような瞳の色は初めて見たぞ？」

返答に困るダレス。

そんな中、王が厳かに口を開く。

「リクサムよ」

「はい」

「あの者が何者にせよ、あの者によってそなたの生命が救われた事は紛う事なき真実である」

「はい」

「自国の民、自国の臣であれば王族の生命を守るは義であり誇りでもある。が、そうでなかった場合は大恩を感じるだけでは済まされぬ事、承知しておるか？」

「王家の誇りにかけて、自身の出来うる限りの加護を、あの者に…です…ね？」

「うむ」

満足気に頷く王。

「あの者については我らだけで判断してよい事柄ではない。まずは明日にでも来るであろう聖天神殿からの使いの神官を待とう。全てはそれから判じればよい」

王の言葉にリクサムも側近二人も賛同の礼をとる。

話し合いも一区切りしたので、王もリクサムもそれぞれの居所に戻ろうとした矢先、扉の外から伝令が入る。

「急ぎ申し上げます！ 聖天神殿より、大神官様お越しでございます！」

先ほどの謁見の間は使用できない状態なので、現在王達の居る部屋へ大神官を案内するように伝える。

と、さほど間をおかずに大神官が入室してきた。

どうやら本気で急いできたらしい。

細身だが頑健なその肩が呼吸に伴い激しく上下している。

「大丈夫ですか？　大神官どの。さ、こちらにてお座りに」

椅子を勧める王の言葉に従い、大神官が腰を下ろす。

大神官は傍らのテーブルにあった水を口にし、大きく息をつくとすぐに居住まいを正した。

「前触れもなく突然の訪問を許されたい」

「神殿へ連絡したのはこちらでございますね。ですが、大神官どのがお越しになるとは……」

大神官の言葉に王は笑みを浮かべ、ゆっくりと応じる。

「何か危急な事がらでございますかな？」

大神官たるものの通常は余程の事がない限り聖天神殿からは離れないものだ。

今回のような内容とて、確認だけなら神官クラスが来るのだろうと考えていただけに驚きである。

先程のあの者は、実は危険人物であったのだろうか、各人そう思案してしまう。

大神官は静かに言う。

「危急となるかどうかはまだ判らぬ。が、まずは性急に確認を成したい」

「……確認とは、何を？」

「イルフェラム国王どのの前に現出したという、かの者の、存在とその姿を」

大神官の厳命で、異例ながら牢塔内へ入るのは先程部屋に居た人員……王と王太子、そして二人の側近のみとなった。

中層階にあるわりと広めの牢内、その石の寢床にその者は横たわっていた。

「……………」

絶句するしかない光景だった。

牢内にひしめく光、光、光。

魔術視力の少ない王ですら見える、それほどまでに濃い光。

それらはこの世界では聖霊と呼ばれる意思あるものたち。

これほど多くの聖霊は大神官でも初めて見るものだった。

眠っているのか、その者の瞳は閉ざされている。

見つめる大神官の喉が、緊張ぎみに鳴った。

「お目覚め下さいませんか」

小さいが、凜とした声音が大神官の喉から出る。

すると、光が大神官の元へ幾体かふわふわと寄ってきた。

目の前に止まり、明滅する光に大神官は声をかける。

「聖天神殿大神官、モノティア・レグルが申し奉る。どうか、お目覚めを許されますよう」

僅かな間。

明滅していた光が大神官の前から牢内へと戻り、他の光がその明滅に合わせて激しく明滅動作する。

そしてびたり、と、明滅が止まる。

動いていた光の動作も停止し、その中から一体だけ光が静かに寝床の上の人物の顔の前に向かう。

目蓋の上をくすぐる様に、くるくるくると動く光。

「……………ん……………」

目覚めたのか身じろぎをし、手を顔の前にあてる。

ゆっくりとその手が顔から外される。

けれど顔はまだ牢の外には向いてなく、大神官は再び声をかけた。

「お目覚めでございますか？」

一瞬びくりと身体を震わせ、その人物はようやくその顔を大神官の方へと向けた。

「……………はい？」

少しだけ首を傾げ返答がかえってきた。
ふるふると大神官の体が震えている。

「……………大神官？」

如何なされた？ という王の言葉は続けられなかった。

大神官がその冷たい床に膝をつき、両手をつき、頭を下げる。頭を下げているその先は牢内の人物。

何事かと思う間もなく、大神官の声が厳かに響く。

「大神官モノティア・レグル、聖天リ・ラ・リリウ様の御心である
「神の一枝」……聖天神殿にて確かに御護り申し上げ奉ります」

「……！！！！」
「……」

大神官の告げた内容に驚愕する王達。

彼らのそんな様子を、ひとりまだ何もわかっていない金色の瞳が見つめていた。

第 4 話 望んだモノが、モノでなく「前篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

今回少しでも下世話な内容があります。
食事中の方などはご注意くださいませ。

第 4 話 望んだモノが、モノでなく「前篇」

寝起きに声をかけられ振り向けば、いきなり何か良く分らない内容を告げられたという晶貴だったが、大神官と呼ばれる50代位の男性が床に叩頭しているのを見て、流石に目が覚めた。

後ろに居た四人の人達も一瞬遅れはしたが、その大神官と同じ様に一斉に叩頭したのだから無理もない。

しかも、そのままの状態が自分感覚で三十秒を過ぎても変化ないという状況に、晶貴は内心冷や汗をかいていた。

『さて、どうするべきか?』

何がどうなっているのかは、まだはつきりとは判らない。

けれども、先程告げられた言葉から判断するに「かみのひとえだ」が何かは知らないが、自分は「せいてんしんでん」という場所で「まもられる」らしい。

相手の言葉が判るという事は、こちらの言葉も相手に伝わると思っ
って良いだろう。

例え、目の前に居る者たちの頭髮や瞳の色が、今まで自分の居た世界では居なかったとしても、だ。

未だに頭を下げた状態が続いている所を見ると、自分が何者と勘違いされているかは知らないが、その自分の許可がないと頭を上げられないという、よくある儀礼的なものなんだろう。

仕方なく晶貴は口を開く。

「あの……頭を上げて下さいませんか?」

晶貴の言葉に、大神官がその頭を上げる。他の四人もそれに倣う。

けれども、それ以外はそのままの状態だ。
仕方なく晶貴は言葉を繋ぐ。

「床は冷えます……どうか、お立ち下さい」

ようやく立ち上がる面々に晶貴は再び云う。

「あと、何がどうなっているのか。説明が欲しいのですが？」

「……承知致しました。ですが、ここはそれには適さない場所にございます。これより早々に御身の移動をさせて頂きたく存じます。御許可、頂けますでしょうか？」

「はい。構いません」

先程この大神官とやらは自分を「まもる」と言明した。

多分、この身に危険が及ぶような状態にはならないだろう。
そう判断しての返答だった。

大神官は後ろに控えている者たちを見もせずに言う。

「牢の封縛を解除後、移動の陣にて参ります。宜しいか」
「うむ」

四人の中の一番年かさ……やはり五十代位だろうか……の男性だけが返答し、後の者は頷くのみだったが、大神官は軽く頷き晶貴に告げる。

「陣にて即時移動を致します。どうか、御目を閉じられますよう」
「はい」

言われた通りに目を閉じる。
目蓋の裏からでも判る明るい光が瞬いて消えた。

「もう御目を開けられても宜しいですよ」

大神官の言葉に目蓋を開いた晶貴は、その場の雰囲気にくらりとした。

『何処の高級ホテルですか？』

つい、そういう思考が浮かぶ。

明るいが落ち着いた色彩の壁、けれどもあちこちに光って見える金銀の飾り。

磨き抜かれた床は余分に光を反射する事もなく、上品な輝きを保っている。

天蓋付きのベッドを始め、紛う事なき立派な調度品の数々。

何より床面積が広い。

三DKのアパートの壁を取り除いたらこのくらいだろうか。

一般庶民の晶貴からすると、本や映像とかでしか見知らない部屋だった。

『すごいな……』

思わず息をついた晶貴に大神官が軽く頭を下げながら言う。

「この様な手狭な部屋で申し訳ございません。正式な御部屋が御用意出来ますまで、どうか御辛抱頂けますようお願い申し上げます」
「……………」

『この部屋で十分広いつての』

そう思いながらも、とりあえず頷いておく。

晶貴の了承に安堵したかのように、大神官が再び言う。

「御説明の前に色々と準備がございます。しばしお時間を宜しいで
しょうか？」

「はい」

「有難うございます。それではこちらにて少しの間お待ち下さいま
せ」

勧められた長椅子に晶貴が腰掛けるのを確認し、大神官と他の四
名は部屋から退出していった。

つい先ほどまで牢屋に居たのが嘘のように思える。

現在、晶貴は貴賓室の豪華な長椅子の上に、ひとりぼつんと座っ
ていた。

部屋の中を見渡す。

先程大神官たちが出て行った扉の他にもあと二つ扉が見える。

薄いカーテンのある部分は窓らしく光が差し込んでいる。

外は朝なのか昼なのかは判らないが明るかった。

あの発光体はまだ幾体もわらわらと辺りに居るが、質量がない為
か特に邪魔に感じない。

再び一人になった事で、現状を色々と考えてみる。

着ている服は自分の見知っている昨夜着ていた服のままで、肌着
等にも特に感触の違いはない。

ポケットに入っている自宅の鍵や携帯電話、財布やハンカチなど
もそのままあった。

つまりは身体検査とかもされずにあの牢に入れられていたという
事だろう。

『何にしても説明を受けないと何が何やら』

先程告げられた「かみのひとえだ」「せいてんしんでん」という言葉の意味すら判らない。

言葉は通じているようだが、その単語に値する漢字や意味が浮かばないのだから無理もない。

室内に幾ヶ所がある、奇妙な飾りに見える部分。

その形に一貫性が垣間見える事から、それが多分文字なんだろうと想像はできるけれど、見た事ない形のものだし勿論読み取れる筈もない。

『異世界設定だという確定が出来そうな状況だわね……』

口元からこぼれ出るのは苦笑。

『何にしても文字や言葉は意思疎通に必要なものだし、早々に覚えるかどうかしないかね』

辺りを飛び回る発光体を見ながら、くすつと笑みがこぼれ出る。

『それとも良くあるそうだった小説の様に、最初から不便なく出来る様だったらいいのにな』

そう思考した直後、発光体が何体か自分に向かって飛び込んで来る。

身体を、頭を通り抜けて行く光達に嫌悪はないが、流石にびつくりする。

「おおう」

直後、晶貴は失笑した。

『いや、マテ。便利すぎるだろ君ら』

奇妙な形に見えていた文字らしきものが、いきなり文章として認識できるようになっていた。

そして先ほど告げられた「かみのひとえだ」「せいてんしんでん」という言葉の羅列が「神の一枝」「聖天神殿」と、意味のあるものへと変換、理解できるようになっている。

先程牢で寝床が温かくなっただのと同じ様に、この光達は自分の望みに反応している様子だった。

『……………元居た世界に帰りたい、つてのはどうなんだろう？』

その意識を光達に向けてみるが、光はくるくると揺れるだけで特に変わった反応がない。

『あー…………なるほど。本気さが足りないの、見抜かれてるってワケね』

現在晶貴の脳裏では、生来持っている好奇心が続々と湧いて出ているのである。

稀なる事なら楽しんでしまえ。

これまでの人生でも色んな事があったけど、何度もその意思で乗り切ってきたのだ。

今更その性格を矯正するなんて出来そうもない。

『所詮、自分は自分でしかないからね』

まだ「神の一枝」と「聖天神殿」が何かは語録が判ったのみで意味は判らない。

けれどもそれは、また後で来るであろう人達に尋ねればいい。自身を納得させた晶貴はひとり頷き、己の好奇心を満足させる為に色々と室内を散策し始める。

出入り口らしき扉は多分廊下とかに繋がっているだろうから、と晶貴は別にある扉の一つを開けてみる。

そこは広さにして畳六畳ほどの部屋だった。洋式便器に良く似た形のもが鎮座してあるが、それには見事な彩色で花の模様が描かれ、立派な背もたれと肘置きまで付いていた。

蓋とかはなく、そのまま座って用を足すのだろうか、それにしても臭いがない。

トイレにしては何か違和感があるので晶貴は暫く首をかしげているが「あ」と、その違和感が何なのかによやく気付いた。

用を足した後で使う「紙」が、どこにも見当たらないのである。

『手で拭く……わきやないか。んー……使用法、判る?』

光に向かって問いかけると、先程の様にすうっと一体の光が頭をすり抜けて行く。

途端に、この場所の使用法が映像つきで脳内に残っているという早業である。

「おー……便利だ」

まるで辞書。いや、百科事典のような便利さに感嘆する晶貴。そして、今知ったばかりのお手洗い使用法も、かなり便利なもの

だった。

自分がこの建物内に飛ばされてどの位経つのかははっきりとはしないが、体感時間とお腹の減り様では大体半日程度だろうと知れる。先程睡眠から目覚めたのが普通の朝と同じ感覚なのだから、尿意を覚えるのも妥当な時間だった。

なので早速使用させてもらおう事にする。

「ふはー……」

『面白れー』

立ち上がり、さくさくと服を着つけながらもう一度その便座を見る。

排出されたものは、すでにそこにはない。

出したものは、下の陶器であるような部分に触れるか否や分解して消えて行く。

そして何か風のようなものが紙の代わりにさらりと当たったかと思うと、もう肌には濡れているという感覚はない。初めて味わう感触だった。

識った知識からすると、便器本体に魔術が組み込まれていて、尿も便も分解する仕組みとか。

使用後、生きている風が局所を清拭して、その後伴っていた臭いごと消し去るのだという。

もっとも、世間一般誰もが使用できるわけではなく、結構な価格がついているらしい。

便利なものが高級品だという事は、何処の世界でもあるものだとつくづく思う。

『こういったモノがあるとなると、もうここは異世界で決定だわね』

魔法なんておとぎ話でしかないという自分の居た世界とはまるで異なる、どこかの世界。

認めてしまおうとすんなりくるが、少しだけ郷愁を感じてしまう。

トイレの部屋が広いのは、先程脳内に投影された映像の様に、御付きとかの人が一緒に入って衣装の着脱を手伝う為らしい。

そのトイレの横と奥の壁に一つずつ扉。

奥を開けてみると、そこはまたかなり広い浴室となっていた。

『湯船だけで十畳以上あるって、どうよ？』

湯は現在張られてはいないが、温泉とかでもない限り湯は総入れ替え式に見える。

恐らくは先程のトイレの様に魔術で湯が出たり片づけたりするのだろうが、それにしても広い。

『……………ここでも多分、御付きが一緒なんだろうなあ』

金持ちというか上流社会というか、そういった自分とは縁のないものを想像し、少しげんなりしながら晶貴は浴室にもう一つある扉を開く。

予想通り脱衣所である。

脱衣所内から見て扉は三つ。

という事は、先程までの位置関係を関連付けると、正面の扉は先程案内された部屋となる。

脱衣所と浴室、どちらからでもトイレに行けるという構造になっ

ている様だ。

『使い易そうな構造してるね』

元居た部屋へ戻り、再び長椅子に腰かけ晶貴は考える。

魔術というものの存在がこの世界でどれ程の重さを得ているのかはまだ判らない。

誰でも使えるのか、それとも扱える者は希少なのか。それによっても判断が変わる。

そして、どの部屋も立派な調度だった。

垣間見た魔術というものを差し引いても、これだけのものが製作できるならそれ相応の文化、文明であるだろう。

自分の居た世界、時代背景からするに中世から先くらいか。

何より。様式美と機能美。

そのどちらも兼ね備えているこの部屋を、あの大神官は「手狭」と言っただけだ。

庶民としての自分の感覚が間違っただけならば、つまりここは貴族階級以上の屋敷という事になる。

晶貴にとってはその辺りが一番気にかかっていた。

『あんまりやっかいな内容だったら嫌だなあ』

これから聞くであろう説明に少しだけ不安を覚える。
と、そこへ扉をノックする音が。

「大神官でございます。入っても宜しいですか？」

「はい、どうぞ」

扉が開かれ、先程と同じ人物等が入ってくる。
晶貴は気を引き締めた。

第 4 話 望んだモノが、モノでなく「前篇」(後書き)

長くなりそうなので一旦ここでぷちりと切ってみる。
次は王様たちサイドからの視点になるかなw

第 5 話 望んだモノが、モノでなく「中篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 5 話 望んだモノが、モノでなく「中篇」

牢塔内に入り、その身にかかる圧力に大神官は気を引き締めた。
大神官だけではない。

王達四人もそれを感じていた。

自分たちを値踏みするかのように窺い飛ぶ発光体。

聖霊と呼ばれているそれらが、中層階へ近付くほどに増えてゆく。

牢の内外は圧巻だった。

渦巻く光の群れは寢床の上の人物を護るかのように舞い踊っている。

王達は聖霊の圧力に気圧されそうになるのをかろうじて押しとどめていた。

見れば彼の人の目蓋は閉ざされている。

深い眠りか浅い眠りかは判らないが、目覚めて貰わないとならない。

聖天神殿の壁の反応、そして聖樹の発現。

壁は神物の召喚を司り、聖樹は神の一枝の現出を司る。

これが同時に起こる有り得なさに戸惑うが、神事に有り得ないというものは無いというのもこれまた事実。

神の一枝。

今回降臨された方が、和魂にぎみたまを持つ方なのか、荒魂あらみたまを持つ方なのか。それすらもまだ判らないが、目覚めを促す事で不興をかう事を恐れていては何もすすまない。

何より、本物だった場合早々にこの場から居所を変えなければならぬ。

彼の人が持っているであろう神気。

そして意思を現す瞳……神眼。

大神官はその確認をする為、修行によって得た神気を喉へと集中させる。

「お目覚め下さいませんか」

小さいが、聖霊の圧力に負けないだけの凜とした声音が出る。

すると、光が大神官の元へ幾体かふわふわと寄ってきた。

目の前に止まり、明滅する光。

自身に神気を負わせている為、その聖霊の行動が、かの人に害があるものなのか、ないものなのか、確認されているのだと理解できる。

聖霊は神の吐いた吐息。

どれだけ儚く美しく見えても、宿る力は人間以上だ。

大神官は再度、正式な申し立てを行う。

「聖天神殿大神官、モノティア・レグルが申し奉る。どうか、お目覚めを許されますよう」

僅かな間の後、光が動く。

他の光と協議するかのような明滅の後、一体の光が寢床へと向かう。

彼の人の目蓋の上を、くるくると動く光。

それに刺激されたのか、彼の人の喉が軽く鳴らされた。

「……………ん……………」

身じろぎ、手を顔の前にあてた後、ゆっくりとその手が顔から外されるが、彼の人は上半身を起こしたままの姿で壁の方を向いていた。

緊張しつつ、大神官は口を開く。

「お目覚めでございますか？」

一瞬びくりと身体を震わせ、彼の人はようやくその顔を大神官の方へと向ける。

「……………はい」

男性にしては高すぎ、女性にしては低く感じる声音。

だが、透き通るような響きを持ち、短くも神気を感じさせる一言だった。

降臨後、すぐにこのような悪い環境に置かれ、さぞかし憤慨しているだろうと思っていた大神官にとっては予想外に落ち着いた返答。そして彼の人の持つ意思ある瞳。

神書に伝わっている通りに金色に輝くその瞳は、彼の人の今の心情を現すかのように虹彩を僅かに青色に波打たせている。

怒りなどない、安定した虹彩の輝き。

信じられないほどの清々しい神気を放つ彼の人物に、大神官の身体は自然に震えが走っていた。

『間違い等、ありえる筈もない……………神の一枝』

「……大神官？」

後方から漏れ聞こえた王の言葉に、大神官は急ぎ牢内の神の一枝に向かい、叩頭礼を成す。

何よりもまず、こなさなくてはならない儀礼がある。

細かい説明は後々でも良い。

王達への説明なら自分の発する言葉で足りる。

理解すればすぐに、己のしなくてはならない行動に気づくであろうから。

「大神官モノティア・レグル、聖天リ・ラ・リリウ様の御心である
「神の一枝」……聖天神殿にて確かに御護り申し上げ奉ります」
「……！！！！」

大神官の告げた内容に驚愕するが、王達はすぐに大神官に倣って叩頭礼を成した。

召喚なんて軽い状況ではなかった。

降臨された尊い方を、本来ならば最初から優待するべきなのに、怪しいからとこのような場所へ放置してしまった自分たちの責に、四人共々叩頭して沙汰を待つ。

大神官や王とて只人。

神の一枝とは比べるべくもない。

すぐさま殺されても、誰も文句など出せない。

それほどに尊い存在なのだと伝え聞いている。

神気に怒りは感じないが、まだ何も返答を頂けないのは自分たちを見分しているのだろうと判断する。

「頭を上げて下さいませんか」

静かな声の上から降ってきた。

『もつたいない』

命令口調ではない、その言葉に恐れ入りながら大神官たちは頭を上げる。

彼の方は立ち上がった状態で、自分たちを見定める様に金色の瞳を向け、再び口を開く。

「床は冷えます……どうか、お立ち下さい」

それは、ここが牢だという事、冷たい場所だという事。

自分がそういう場所に居るのだと、はっきりと認識しているから言える言葉。

それでも、その事を咎めるわけでもなく、まずは身体を厭えと、只人の身を案じて下さるその優しさと度量に感激しながら大神官たちは立ち上がった。

「あと、何がどうなっているのか。説明が欲しいのですが」

こちらが立ち上がるのを確認すると、すぐに言葉が発せられる。

否といえる筈もない。

非は全てこちらにあるのだから。

言葉を慎重に選び、大神官は返答する。

「承知致しました。ですが、ここはそれには適さない場所にございます。これより早々に御身の移動をさせて頂きたく存じます。御許可、頂けますでしょうか？」

「はい。構いません」

疑問の言葉すらない即答だった。

思えば、彼の人自身が「ここを出る」と意思を向けるだけで、この程度の牢の封縛を解除するなど呼吸するより楽に出来るだろうに。それでも、そのような事をしていなかった意味に気付き、大神官は再度感激に打ち震えていた。

『神の僕たる我らが迎えに来ると。信じて、待っていて下さったのか……っ！』

金色の瞳は、真っ直ぐに自分を見つめている。

「牢の封縛を解除後、移動の陣にて参ります。宜しいか」「うむ」

後ろに居る王たちを見もせず告げるが、納得の返答を得て大神官は軽く頷き、目の前で静かに立っている彼の人へ必要な事だけを告げる。

「陣にて即時移動を致します。どうか、御目を閉じられますよう」「はい」

了承の返答を貰い彼の人を目蓋が閉じられると、大神官は即座に牢の封縛を解除し、王を含む自分たち五人と彼の人とを繋いだ形で移動の陣を組み上げ動作させた。

光の粒子が辺りに舞う。

空間移動は速やかに行われた。

移動先はとして陣に組み込んだ座標は、現在使用可能な貴賓室にしていた。

移動後、術ですぐに室内に明かりを灯し室温を調整する。

「もう御目を開けられても宜しいですよ」

自分の言葉にぱちりと目蓋を開いた彼の人、すぐに辺りをさらっと見渡し軽く息をついた。

恐らく貧相すぎるこの室内に呆れたのだろう。

大神官はそんな彼の人に、軽く頭を下げながら言う。

「この様な手狭な部屋で申し訳ございません。正式な御部屋が御用意出来ますまで、どうか御辛抱頂けますようお願い申し上げます」
「……………」

返答はなかったが頷きは帰ってきたので、とりあえずは我慢して貰える様子だ。

これから急いで色々な物事を用意しないとならない。

「御説明の前に色々と準備がございます。しばしお時間を宜しいでしょうか？」

「はい」

「有難うございます。それではこちらにて少しの間お待ち下さいませ」

尊いこの方を一人でこの場に残す事にかなり悩んだが、それでもまずは周りを動かす事をおかないと何も出来ない。

勧めた長椅子に彼の人、腰掛けるのを確認し、大神官と他の四名は部屋から退出する。

「ルドルフ、ダレス。ここの警護を任せる」

「承知。ですが、我らがここに残ると王と太子の警護がカラに」

「構わぬ。何事があつても大神官どのがおる。何より、現在こちらの部屋に居られる方以上に尊い方は神以外にないのだ、心して警護にあたれ」

「は」

礼をして扉の前に立つ二人を後に、大神官と王、太子は王の執務室へと急ぐ。

「細かい説明は彼の方の前で同時に行うので後に。……早急に神の一枝を迎え入れねば。こちらの神殿と聖天神殿へも連絡を」

「臣を招集。当座必要な人員、物品を即座に揃えよ」

「書類関係は後回しで構わん、認証は全て我らを通せ」

「神の一枝、降臨」

その言葉と共に、慌ただしく城内が動き出した。

時間にして1タラン。(約1時間)

ようやく少しずつ準備が整い始めた。

十分というにはほど遠いが、説明も何もなく、尊い方をこれ以上待たせるわけにはいかない。

城内総出で様々な用意を行わせつつ、大神官と王、そして太子は再び貴賓室へと足を運ぶ。

扉の外で警護をしている二人は、室内から時折感じる神気の増減に内心驚きながらも真剣に職務を全うしていた。

王達の姿を認め、礼を成す。

「これよりは我らがこちらを」

「判った」

「外の警護は？」

「は、既に手配済みでございます」

王達に付いていた騎士達が扉の警護を交代する。

ルドルフとダレスは再び王と太子の警護についた。

先程の簡易正装と違い、王も太子も神事に使用する正装に着替えている。

その姿に改めて気を引き締め、状況を報告する。

「幾度か神気が増減されましたが、穏やかにお過ごしのご様子かと
「そうか」

返答する王に、大神官が言う。

「宜しいですか？ 参りますぞ」

言葉なく頷きを返す面々を見やり、大神官は自らの手で扉を叩いた。

「大神官でございます。入っても宜しいですか？」

「はい、どうぞ」

返答はすぐに寄越された。

扉を開けると中からこぼれるかのように聖霊たちが飛び出てくる。
新しく扉の警護に付いた者がびしり、と一瞬固まった。

神気にあてられたのだ。

だが流石に王族の親衛騎士、すぐに動ける状態に戻っている。
それを確認し、大神官達は室内へと足を踏み入れて行く。

尊き人は長椅子にゆったりと腰かけ、こちらの様子をじっと見つめていた。

第 5 話

望んだモノが、モノでなく「中篇」(後書き)

見る視点が変わると、それぞれの受け止め方の相違が w
人って、自分の見たいものしか見えないし、自分の聞きたい事しか
聞こえないもんです。

さて、ようやく次で神の一枝の説明に入れる……

毎日覗いて下さってる皆様、お気に入りに登録して下さいる皆様、
ありがとうございます！ 励みになります。

第 6 話 望んだモノが、モノでなく「後篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 6 話 望んだモノが、モノでなく「後篇」

扉を閉め、ルドルフとダレスはその場に直立不動で待機する。
あとは王や大神官の成すべき事だ。

長椅子の前までくると、大神官と王、そして太子は晶貴に向かい
一斉に頭を下げた。

「大変お待たせを致しました」

大神官はすつ、と顔を上げる。

真っ白な髪は短く刈られていて瞳は若葉の様な新緑の色。

着ている物は薄く青みがかった白い長衣。

首から下げられている幾つかの飾りは見た事のない意匠だが、
とても調和がとれている様に見える。

「改めまして御挨拶を申し上げます。私めは、聖天神殿にて大神官の任に就いておりますモノティア・レグルと申します。質疑等多々ございますですが、今しばらく御付き合いますませ」

こくり、と晶貴は頷いた。

晶貴の了承に大神官が動く。

身体を少し移動し右手側の場を空けると、そこへ壮年の男性が進み出た。

髪の色は茶で真っ直ぐな長髪。瞳の色は朱色に近い赤色。

多分背の中ほど位まではあるだろうその髪は首の後ろ辺りで纏められている。

服は先程の大神官と同じ様に薄い青色だが、こちらの方が刺繍な

ど色々と飾りが多い。

何より際立つものが、頭に嵌っている。

『どう見ても、王冠、よねえ』

手にしている杖っぽいものの先にも宝石だろうか、大きな石が付いている。

王様っぽい威厳も垣間見える。

その男性が膝をつき、杖を床へと置く。

「イルフェラム国王、ナカラ・トリリユース・イルフェラムと申します。御方様現出に居合わせました事、真に光栄に存じます」

驚く間もなく、次に控えていた自分と同じくらいの歳の青年が同じ様に剣を腰から外し、膝をつく。

黒くて長い髪は先程の国王と同じく首の後ろで纏められ、服装も国王と良く似た造りだ。

明るいオレンジ色の瞳が晶貴を見つめる。

どうやら、晶貴が一番最初に見た人物らしかった。

「イルフェラム国王ナカラ・トリリユース・イルフェラムの第一子、王太子リクサム・マディシン・イルフェラムと申します。御方様現出、真に感無量にございます」

『……太子って事は王子さまでしたか』

何だか高級そうだとは思っていたが、予想以上の顔ぶれに晶貴は内心で苦笑する。

『一国の王に膝をつかれる状態かあ……うーん。救世主とか勇者とかいわれて、何かを退治とかしないとならないってのはイヤだなあ』

そんな事を考えていると、周りに居る光達がぐわっとその光を強くする。

神気を高めたのだ。

晶貴は神気そのものなので何も感じないが、周りに居るものにはかなりの圧力がかかる事になる。

ぐっ、と唸る様な声でしたのでそちらを見ると、国王の顔が少しかめられていた。

大神官が圧力に耐えながら口を開く。

「……御怒りもありましょうが、今少し御気を静めては下さりませんでしょうか」

「……………」

『いや、別に怒ってはないけど……あ、もしかしてこの光達が何かしたの？』

光をみれば明滅と共に微かな声を感じ取る事が出来た。

【主上、不快？】

【原因、どれ】

【罰、アタエル？】

『……………あちゃあー』

この可愛い光達は、自分の内心の想いを汲み取って何かしでかしてくれたらしい。

目の前で辛そうにしている国王たちが流石に気の毒になった。

『この程度の私の思考に乗っかつちゃダメ。私が指示してない攻撃はもったダメ』

そう考えると、伝わったのか光が弱まる。

ほっとした顔の大神官の姿に、自分では良く分らない悪い状態から解放されたのだと感じる。

「ありがとうございます……」

頭を下げ礼をし、大神官は続けて言う。

「差し支えなければ、御方様の御名を御教え頂けないでしょうか」

晶貴は頷いた。

「私の名は、新田晶貴。新田は姓、晶貴が名です。こちらの呼び方だと、アキ・シンデンですかね」

名を告げた途端、大神官だけでなく国王も太子も目を見開いた。

「ラキ……シンデン……………」

呟き漏れる言葉は何だか少し違う言葉に聞こえる。

「いえ。アキ・シンデン、です」

「ラキ・シンディン様」

何度か説明したが、どうもこちらの発音が相手に正確に伝わっていない様子だった。

相手の言葉は晶貴には無理なくほぼ正確に聞こえている様に思っただが、何分違う世界の事だし色々齟齬があっても仕方のない事だと諦める事にした。

「シンデイン様」

改めて呼び掛けられる晶貴。

「シンデイン様に、幾つか御尋ね申し上げます。宜しいでしょうか？」

「はい」

「まずはこの、周りに居る聖霊についてなのですが。彼らの声は聞こえますか？」

「はい」

「では、彼らはシンデイン様を、どう、呼ばれましたか？」

「どう、って………あ、一番最初に言ってた言葉の事かな？」

「恐らくはそれだと」

「【最強の盾、見つけた】って、何の事でしょう？」

「……やはりそうでしたか。ようやく納得できました」

うんうんと一人頷く大神官。

「次にお尋ねしたいのはシンデイン様御自身のお考えです。シンデイン様は今、この状況を何処まで把握なさっておいのですか？」

「率直に言っても？」

「はい」

思考をまとめる為、少しだけ感情を消し、これまでの事を思い出す。

端的に、自分にも相手にも判り易く。

しかも自分の意見を優位に運んでゆく。
これまでプレゼンや接待で培った技能。

日頃仕事で集中する時によくある、業務用モードに入り込んだ晶貴の瞳の色はじわりと紫を帯びる。

「ここは、私のこれまで生きてきた場所とは違う。イルフェラムという国もなければ、この周りに居る聖霊とかも居ない。瞬間に別の場所に移動できるあんな術などない。文化も歴史も技術も、全てが異なっているように感じられる。時代が違つかいいうものでもない…… 多分ここは異世界なんだろう？」

静かな声で淡々と言う晶貴。

「知りたい事は山ほどある。ただ、今一番知っておきたい事は一つだけだ」

紫に揺れる瞳が大神官を射抜く。

「私は、元居た世界へ戻れるのか？」

暫しの沈黙が辺りを包む。

大神官の顔に、すでに笑みはない。

それだけで結果が判るようなものだった。

「神の一枝さまの降臨は、神のなせる技。私ども只人は他世界へ移動する様な方法など存じません。過去から伝えられる事実だけを申し上げますなら、これまでに降臨された神の一枝さま方の誰一人、元の世界へ戻られた方は居られません」

晶貴の瞳の金色が一瞬だけ、瞳孔と区別のつかぬほど闇の様に黒

く染まり、次の瞬間には元の金色へと戻る。

一度、瞳が閉じられる。

長い時間ではないが、それでも一呼吸はゆうに過ぎる。

再び開かれた瞳に先程の様な闇はない。

けれども、何か空気が変わった。

「戻れないのだと、一応理解した。説明の続きを」

瞳の色は紫を帯びたまま。

晶貴の言葉に大神官は頷いた。

「畏まりました。それでは」

大神官の口から、この世界が聖天と呼ばれる唯一神、リ・ラ・リウが創造したラグドリユウスという世界なのだという事。

聖天神殿が神の意思を受け取る窓口の様なものなのだという事。

神の加護を受けるため、召喚という儀式があるのだという事。

「つまり召喚は物品に限られるという事？」

「左様でございます」

ひと通り説明を聞いた晶貴は疑問を投げる。

「じゃあ、私の聞いた【最強の盾】っていつのは？……一応、私は人間のつもりなんだけど」

大神官はそこで、聖天神殿に起こった出来事を告げる。

「聖天神殿には、先程御話した「神の壁」とは別に「神の樹」というものがございます。神の樹……聖樹と申しますものが「神の一

枝」という名の由来となります。壁が光れば神物の召喚。聖樹に光る枝が生えると神の一枝さまの降臨を意味します」

大神官はそこで、国王を見る。

「イルフェラム国にも関わる話となります。心して聞かれますよう」
「うむ」

再び晶貴に視線を戻し、大神官は続ける。

「今申しました壁と樹が、この度同時に発光を現し我ら神官も驚愕しました。通常金色の聖樹に新しく生えた大枝には緑の葉が芽吹いていましたので、神の一枝さまがこのイルフェラム国……神気を辿れば場所もすぐに感知出来ますので、ここイルフェラム城内部に御降臨されたのだとすぐに解りました。そして壁に光り描かれた名はラグドル・ティータル・イルフェラム」
「何ですと!？」

思わず国王の口から驚愕の叫びが漏れていた。

「……失礼いたし申した」

対話の途中口を挟んでしまった自身の失態に頭を下げる国王。

大神官が晶貴を見る。

恐らくは晶貴の許可という意味が重要なのだろう。

「構いません。続きを」

あっさりと返答し、大神官が頷く。

「イルフェラム国王どのが驚かれるのも無理はございません。壁に描かれた神物の召喚者、ラグドル・ティータル・イルフェラムというのは、十九代前……およそ千年前の初代イルフェラム国王なのですから」

「召喚者が死亡した後に神物が召喚される事も、あるの？」

「はい。ごく稀にですが」

説明によると、召喚者の望みが自分個人に対してでない場合……

例えば「あの人が、こうなっただけほしい」だの「あの人、為になる物を」などである場合……は、ごく稀に召喚者死亡後に神物が召喚される事もあるのだそうだ。

その場合、壁の光は召喚者の名と共に新たなる受け取り手である召喚者の名も記されるので、神殿はそれを元に新たなる神物の持ち主に連絡を取るのだという事だった。

「記録によりますと、初代イルフェラム国王の望みは【最強の盾】でございました」

大神官が厳かに言う。

「けれども、時はまだ戦乱時。世界のあちこちで争乱の只中、人も大地も、疲弊枯渇しているその中で、初代イルフェラム国王が望んだものは自身の使う盾ではなく【この世界を、人を護る、最強の盾】を望まれていたのです」

大神官はゆっくりと晶貴に向かい膝をつく。

「神の一枝、ラキ・シンデイン様。唯一神リ・ラ・リリウ聖天の御心により、初代イルフェラム国王の望みとしてラグド大陸イルフェラム国首都イルファに降臨なされる僥倖に立ち会い、誠に恐悦至極

にございます」

晶貴の瞳を真っ直ぐに見つめ、告げる。

「壁に光り出た、初代国王の名、望みと共に、浮き出た新たな名は「シンディン」……古代語で「シン」は「ひとつ」を「ディン」は「枝」を現します。ラキ・シンディン様、あなた様の主人は、あなた様ご自身。何者にも縛られない神の一枝にございます」

口上を述べ、ゆっくりと頭を下げる。

国王も、太子も。扉の傍で警護をしていた二人も揃って低頭している。

晶貴の口元には溜息と、苦笑い。

『大体の事情は呑み込めたけど………自由なら、いつか』

何かに縛られるのはまっぴらごめんだと思っていただけに、少しでも心が軽くなる。

けれども確認だけはしないとならない。

「神の一枝が成さねばならない職務は？」

「儀礼ごとが幾つかはございますが、それ以外は何もございません」

低頭したまま大神官から返答がくる。

「神の一枝さまは、神の一部。神の体現にございます。神の一枝さまの動向は神の御心と同じ。神の一枝さまが喜ぶ事は神の喜ぶ事。神の一枝さまの怒りは神の怒りでございます」

「つまり、私の意思が、神の意思という事が」

ふむ、と晶貴は考える。

『神とはいえ、他者依存系質高そうだなこの世界……』

そんな考えが脳裏をよぎる。

自分の意思が神の意思。

となれば、そんな自分を欲得で利用してやろうと画策する者も多々あるだろう。

その辺りの対策は後で色々考えないとならない。

晶貴は自分の立場を最大限に使う覚悟を決める。

『人生、楽しまないと意味がない……神の体現とやら、やれるだけやってみますか』

口元に浮かぶ笑みに、もう苦味はない。

「皆さん、顔を上げて貰えます？」

晶貴の言葉に皆が顔を上げる。

「神に次ぐ存在が神の一枝で、どうやら私がその神の一枝というものらしいけど。一国の重鎮たる人達の膝を床につけさせ自分は椅子に座ってる、この状況は好きじゃあない」

意思を、きちんと光に向けて言葉を繋ぐ。

自分の存在が本当に神の体現で、この光達がそれに連なるものなのだというなら、この方法で間違いない筈。

どこからその確信がくるのかは判らないが、晶貴の心の奥にある何かが、それを後押しする。

「彼らに、椅子を」

言葉が終るか否か。

光がその光量を増し、大神官たちの後方に白い魔法陣が浮かぶ。次の瞬間その場に、晶貴の座っている様な長椅子が湧いて出た。人数も把握しているのか、ご丁寧にも三脚分ある。

驚愕している面持ちに、晶貴は右の掌を上に向け「どうぞ？」と促した。

三人は一度顔を見合わせ、長椅子へと腰を下ろす。

「で、大神官さんに、さらに確認なんですが」

「はい、何でございましょう」

「やっぱり私、大神官さんや国王さんより立場、上なんですか？」

「勿論でございます。神と同等扱いと言っても過言ではないでしょう」

「では、その私が希望、もしくは命を下す事は誰に対しても可能な事ですか？」

「それこそが我ら只人の望みにございます」

「ならば結構。……あー、その扉の傍の二人も、ちょっとこっちへ来て」

「「!?!?……はっ!」」

驚愕と怪訝。

そんな表情を浮かべ、二人は王達の近くへと急ぎ歩み寄った。跪こうとした瞬間、晶貴の言葉が飛ぶ。

「立礼のみでよし」

「「は!」」

「名乗りを許す」

淡々と馴れた物言い。

何がそうさせているのか、口からは自然に言葉が紡がれる。

この場合はこう、と。相手の立場に合わせるかのように。

「イルフェラム国、王族親衛騎士にして現イルフェラム国王側近、
ルドルフ・スタイン・コートラス 準男爵と申します。御目通りの
榮譽、恐悦至極」

「イルフェラム国、王族親衛騎士にして現イルフェラム王太子側近、
ダレス・ワイマート・ガレダン準男爵と申します。拝謁を賜り、至
福にございます」

二人の名乗りにも、晶貴はゆっくりと頷いた。

この世界へ来て感覚が鋭くなっているのか、晶貴はずっと、きり
きりとした緊張を感じている。

これは自分の持つ緊張感ではない、他者の感じている緊張感だ。
そんな中で、これ以上対話をしたくはない。

晶貴は、目の前の五人を一度、見渡す。

「私がこの世界で会話をしたのは、この聖霊と呼ばれるもの達その他
には貴公ら五人のみ。それでも、お互いの意思の疎通に擦れ違いが
ないとも限らない」

光に意思を乗せ、言葉を力に変えてゆく。

「それで。……………ぶっちゃけ、緊張解いて。お互い素の状態で話
しません？」

空気が、とろけた。

第 6 話

望んだモノが、モノでなく「後篇」(後書き)

会話が固いと肩、凝りませんか？
実際やると、舌噛みそうだしw

第 7 話 望まれて ここに在る「前篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 7 話 望まれて ここに在る「前篇」

張りつめていた空気が消える。

「固い口調でも話せない事はないけど、どうもしっくりこないし。敬語を使う事はあっても、あそこまで敬語を使われるのは馴れてないしね」

ここまで言うと、晶貴は視線をルドルフとダレスに向けた。

「王様たちと違って椅子無しで悪いね。あなた達の職務、多分護衛だろうから座ってたんじゃ何かあった時に対処できないだろうと思って。そっちの立場を優先させてもらった」

笑顔で言う晶貴に返答しようとするが、上手いかない。
先に気づいたのはルドルフの方だった。

「勿体ない、までは言える。が、そのあとの言葉が出せん……聖天樹閣下、言霊操りましたね？」

苦笑しながら聞くルドルフ。

「普段使っている言葉でどうぞ？ 何しやがったコノヤロー、とかでも大丈夫だから」

晶貴もくすくす笑っている。

「大神官も王様も。もう少し砕けてもらえると、私も楽になります」

大神官が笑みをこぼした。

「承知しました。ですが、私は元々こういう口調なのであまり変わ
りませんよ?」

「申し奉る、とかが無ければいいです。王様も太子も、出来るだけ
敬語外しちゃって下さい」

「むう、分った。ふむ……ルドルフが喋る様にすれば問題ないのか」
「オレ、見本?」

笑顔で言うルドルフに国王がぼそりという。

「いや、お主はかなり口が悪いので儂の様な真面目な者には到底真
似は出来ぬ。真似などしたら御先祖様からどんなお叱りを受けるか
判らんし、大臣たちの心象も悪くなる。要は肉親と同じ様に喋れば
良いだけであろう?」

「太子ーっ。リユーが虐める」

「懐かないで下さい!……父上もスタンで遊ばないで下さい。被害
受けるの俺なんですよ?」

からかわれたルドルフに擦り寄られ、抵抗しながら父王に抗議す
るリクサム。

そんな姿を見て嘆息しつつ、ダレスが晶貴に言う。

「騒がしくて申し訳ありません」

「いつも、ああなんですか?」

「おおよそは」

「楽しそうでいいと思うけど」

軽い会話の後、大神官が口を開く。

「はいはい、御三方とも。まだシンディン様とのお話の途中ですが、お忘れですか？」

ぴたりと止まる会話。

三人とも顔を見合わせ、自分たちの今を振り返る。

そして何かに気づき、視線を大神官に向けた。

大神官はその意味する所を理解し、言う。

「今のが、神の体現。「神の試練」とも呼ばれているものの、ほんの瑣末なものです。ご理解いただけましたか？」

「今のが……瑣末？」

「ええ。私などは見慣れています、あなた方が日頃、公な状態でそこまで碎けない事は良く知っています。何処に人の目耳があるか判りませんからね。しかも今は神の一枝さまの御前で……それを忘れになる程には碎けていたと、ようやく今、自覚したでしょう？ シンディン様は先程の言葉と意思だけで、この部屋に結界張って外部に音漏れしない様にして、その上で言霊で使用言語を限定ついでにあなた方が緊張を解いた事で、シンディン様自身もほっとした……ただ、それだけの感情に動かされてしまったんですよ」

晶貴は大神官の言葉に首をかしげていた。

「神の試練って、何？」

「先程も言いましたが、神の一枝というのは神の体現……少し碎けて言う【神の力を持つ者を貸してあげる。きちんと持て成しすれば持て成しただけ返ってくるよ】という事なんです」

「という事は逆もアリという事だね。機嫌損ねたら何が起こるか判らないって感じで」

「その様ですね。過去には一つの国を丸々消滅させてしまった神の一枝さまもいらっしやっただろうです。この度降臨された方がそう

「いう荒い気性の方だったらどうしようかと、本当に心配したんですが」

「どんな危険物と思われるんですか、私」

くすくす笑う晶貴。

「じゃあ、先刻の状態は私のほつとした気分にあてられて、思わずくつろいで家族団欒してしまった……と、いう事なのかな？」

「そんな感じです」

「あくびの連鎖みたいなものか……」

ぼそりと呟く晶貴の口元からは笑みが消えない。

「じゃあさ、先刻言ってた国ひとつ滅ぼした神の一枝に対しての他の人間の反応はどうなの？ やっぱり『こんなヤツ要らないからどっか行ってくれ』とか『早く死んでくれ』とかあるんじゃないの？」

そう。それが普通の反応の筈。

いくら大きな力を持っているからといっても、自分達に害を成すものを人間はそうそう許容しない。

「そういう人達も居たと思いますよ」

大神官があつさりと言う。

「実際、神の一枝さまを傷つける者も居たそうですし、中には殺した者も居たらしいですから」

「おや、出来るんだ？ そういう事」

「神の代理人ではありますが、神の一枝さまのお身体は人間に近いですからね。不死というわけではないらしいです。本人が特に拒絶

しない限り、怪我や病氣も当たり前にすると書にありました」

「……その言い方だと、不老はあるとか？」

「あるらしいです。生き方も生き様も、その心持ちも、神の一枝さま方それぞれによって異なるんですよ。記録によるとこちらに降臨なされた時、齢五歳の方もいらっしゃったとか」

「うわー……可哀そうに」

「でも、その御方様、百年以上生きられたそうですよ？」

「という事は、本人はそこそ幸せだったというワケね」

幸せでなければ、長く生きていようなとは思わない筈だから。

全てが自分の意思で決められるのなら、無病息災で生きる事も出来る。

長く長く生きる事も、逆に早くに死を選ぶ事も出来る。

でも、神の一枝の意思が神の体现であるのだとすれば、相応の報いがあるはず。

「その、神を傷つけた人や殺した人ってのは、その後？」

「自刃して果てた人も居ますし、寿命が来るまで何十年も生きた方も居ます」

「んー……天罰とかではなく全て神の一枝の意思によって変わるのか」

自分を傷つけても良い、むしろ傷つけてくれ、と。

自分を殺して良い、とつとと殺せ、と。

傷つき、死を望む場合は、そういう思いを抱けばいいだけらしい。不老不死みたいなものだったらどうしようかと思っていた晶貴は、ほっと息をついた。

「ですが、神の一枝さまに対して、そういう感情を持つのはほんの

一部の者に限られます」

大神官が少し真面目に言う。

「先程の国ひとつ滅ぼした神の一枝さまに対する大部分の人間はこう思ったそうです『余程、神の不興を買ったのだな』『逆鱗に触れてしまったのだろっ』と」

「何で？」

「よく考えてみて下さい。神の一枝さまの意思を尊重し、神の一枝さまの望む事をする事というのは、やりようによつては簡単に出来る事なのですよ」

「……………あー、そっか。閉じ込めちゃえばいいんだ」

望むものの全てを揃えた箱庭に、限られた人間とだけ触れあわせ、余計な知恵を付けさせず。

ただ、真綿にくるまれた無垢な雛の様に。

外界の事は何も教えずに、幸せだけを満喫してもらえばいい。

そうすれば国も安泰、人々も幸せ。

自分でも考え付いたその案を、過去に考えた者が居ない筈はない。

「正解です。ですが、それすらも聖天さまはお見通しになられる。例えば遠い山の奥、年に一度、一晩しか咲かぬ花があったとして、神の一枝さまが『この花が欲しい』と言った時、只人はどうするでしょう？」

「山奥に分け入って花を取ってく……………あ、ダメだ。危険な場所かもしれないし、花が咲くの年に一度でそれも一晩だけじゃ取って戻るまでに花が枯れる。根ごと取ってきてても環境が変われば多分枯れる」

晶貴はぐるぐる考えて言葉を繋ぐ。

「一番妥当なのは、『花が欲しい』という意見をそのまま通さずに、まずは神の一枝に『花を枯らしても良いのか?』と説明をして、それでも欲しいと言うならさらにまた話し合いだな。花の希少価値によっても判断はかわるだろうけど、妥協案でいけそうなのは、神の一枝を花の咲く場所に連れて行き、その場で『咲いている花』を見せる、ってところかな」

どうよ? と晶貴に視線を向けられ、大神官は大きく息を吐く。

「シンディン様は推論に長けてらっしゃる。今シンディン様が考えられたそれが、神の……聖天の思考です。ですが、只人はなかなかそこまでは辿りつけない。恐らくは途中で他の方法を取るでしょうね」

「ああ……『枯らさない努力をして持つて戻る』って事?」

「大方その辺りになるでしょう。『神の一枝さまの意思を曲げてはならない』という考えが、ある意味不文律の様なものになっていきますから」

「おいおい」

呆れる晶貴。

「いくら神の体現とか代理人とかいっても知識や感情は人間そのまんまなんだから。物事に対して良い事なのか悪い事なのか、正しいのか間違ってるのか、判断基準は人と同じなんだ。この世界にはこの世界の決まり事もあるだろうけど、互いに話し合わないと何も解り合えないだろうに」

「至極、ごもつとも」

大神官は頷く。

「ですから「神の試練」があるのです。先程私もが受けたシンデイン様の感情の余波は、神の一枝さまの、その御心の裏まで、全てを感じ取れ、という事。それが我ら只人の成すべき「神からの試練」となるのです」

「感情の余波の流出を止める事は？」

「神の一枝さま御自身で幾らかは調整できると聞き及んでおります。ですが、あまりにも強い感情だと御自身で制御していてもかなりの神気が流出するとの事です。巻き込まれた只人は大変でしょうね」

「どんな風に？ 私が何か可笑しくて大笑いしたら、周りも楽しい気分になるとか。何か怒り心頭みたいな状態だったら、むっとした気分になるとかじゃないの？」

「感情の強さが軽い状態であればそうでしょうが、強くなりすぎると神の一枝さまから発せられるのは神気のみとなりますから……神気の圧力で失神昏倒ものです」

苦笑する大神官。

そこでようやく晶貴は、先程自分が『イヤだなあ』と考えただけで辛そうに唸っていた国王達を思い出した。

あの後すぐに光達に自分の思考に乗るなと指示したのが、どうも調整するという事になるらしい。

「おや」

不意に大神官が顔を上げる。

視線の先の壁には、何やら文字盤がある。

光達の協力によつてすでにその文字が読み取れる様になっていた晶貴に、その文字は数字に見える。

縦に楕円になっている板の中、上から順に右回りで一から二十五までの数字が楕円に沿うように等間隔に並び、他の数字が全て黒色

の中、現在十六の数字がひとつだけ赤い色になっていた。そして楕円の右横にもう一つ、同じ大きさの縦の楕円が並んでいる。

楕円の中は、点と数字。

天頂に六十、あとは右回りに十、二十、三十、四十、五十の数字。数字と数字の間にある点は数字に合わせて十刻みになっていて、数字を含めこれも黒一色。

その中で四十の文字から見て左に三つの点が赤色になっていた。

『時計かな、これ』

光に意識を向け尋ねると時間に対する映像がさくさくと脳裏に刻まれてゆく。

それによると、この世界は一日二十五時間との事。

時刻の呼び方は流石に違うが、時間感覚的には元居た世界とほぼ変わらない様子だ。

一分が一テシ。六十テシで一タラン……つまり一時間位。

先程の時計の板の読み方は簡単で、色が変わっている部分を見ればいいだけらしい。

『となると、現在十六タラン四十さ……四テシに変わるし！』

読んでいる最中、三つ目の隣の色が赤色になるのを見た晶貴は、心の中で時計板に自ツツコミを入れつつ時刻を確認する。

大神官は晶貴に向き直り言う。

「まだこの地に降臨されて間もないので、本日は顔合わせの御挨拶と御名をお聞きするのみと思っていましたのに、思わず話し込んでしまいました。申し訳ございません」

ゆっくりと首を垂れる。

「いえ、気になさらずに。こちら知りたい事は山ほどありますが、皆さん他にもそれぞれ職務があるでしょうし……」

「お気づかい、ありがとうございます。ですが、神に連なる方を御持て成しする以上の職務はない事も覚え置き下されます様」

「上に立つ人たちが元々の仕事をしないと、下の者が苦労しますよ？」

「いえいえ。良い鍛錬でしょうとも」

笑みこぼれる晶貴を見、大神官は続けた。

「もう暫くすると日も暮れます。夕餉の用意はさせていますので、暫しお待ち下さいませ」

「有り難い。そろそろお腹空いてたんだ……あ、豪勢なのとか特にしないでいいからって……もう遅い？」

「どの辺りまでがシンディン様の言われる豪勢さかは存じませんが、あの扉を挟み、向かいのお部屋にて準備をさせている最中です」

「んー。兵とかが使う食堂とかでも良かったのに」

「無茶言わんで下さい。兵が卒倒します」

晶貴の言葉にルドルフが会話に乱入し、唸る。

「ある程度以上の力量……あー、神気に対する耐性がないと、今の状態の聖天樹閣下の神気にあてられて兵舎に甚大な被害が出そうです」

「そうなの？ 先刻から神気神気って言うけど、そういうの自分では全く感じないんだよね」

「可視する事もできますが、そういったお話はまた後でもいいのでは？」

大神官が話を元へと戻す。

「夕餉の場所として向かいの部屋を用意させた理由はふたつ。一つ目は、降臨されて間もないので、今現在シンデイン様が見知っている人間が私どもだけだという事。そしてもう一つは、その私どもを信頼、信用に足るものかどうかを量って頂く為です」

「……………食事に伴い、毒見を兼ねて食材の説明をする、で合ってる？」

「御意。……よくお判りになりましたね」

「誰かの手から与えられたものを口にするのは、その相手を信用しているからだというのは、昔からよく伝わってるものだし。食べ方が判らなくても相手の食べ方を見れば真似出来る。よく行われる接待法のひとつだからな」

晶貴は柔らかに微笑む。

「何にせよ、一人きりでない食事は、いいものだ」

温かな思いが、周りの人間にも伝わる。

第 7 話 望まれて ここに在る「前篇」(後書き)

次はごはん！

昨日のアクセス数が飛びぬけてて、びっくりしました。
皆さん色んな時間に見てらっしゃるんですねえ……

……そろそろ感想とか意見とかないかなー？（おねだりしてみたり
w）

第 8 話 望まれて ここに在る「中篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 8 話 望まれて ここに在る「中篇」

「夕餉の支度、整いましてございます」

扉の外からの声に、晶貴達は廊下を挟んで向かいの部屋へと移動する。

あまりにも近い距離の為、晶貴が陣での移動を拒み、徒歩で移動することとなる。

扉の前で警備をしていた二人は、晶貴達が廊下を移動する間、彼らに背を向ける形で左右を護衛していた。

廊下のかなり端にちらつと人影が見えたことから、神の一枝たる晶貴の姿をまだ他の誰にも見せない為なのだろうと判る。

さほど離れているわけではないので、移動は短時間だ。

警護していた者たちの手で扉が閉められると、大神官は右手を扉に向け、そのまま天井へと振り上げた。

指先から光の様なものが音もなく出、部屋全体へと広がってゆく。朝露を浴びた蜘蛛の巣の網目の様に見えるそれを眺めていると、大神官が「おや」と、声をかけてくる。

「シンデイン様はこうした結界まで見えなさるのか」

「あ、これ結界なんですか。綺麗な網目ですねー」

「お褒め頂きありがとうございます。さ、こちらへ」

誘われ振り向けば、そこには想像通りというか、それ以上の御馳走が大きなテーブルの上に所狭しと並べられていた。

『……何十人分て量に見えるんだけどなー』

騎士の二人も貴族階級。

国王や太子、大神官まで居るのだから、ある程度は予測していたが、どうやら神の一枝という存在はこの世界でかなりの重さがあるようだ。

想像するに、この目の前の現状は、神の一枝として降臨した者が、どのような嗜好をしているか判らないからと、厨房が腕をふるって必要以上に作りあげてしまった結果なのだろう。

上座へと歩み、椅子に座る前に晶貴は一步引き、止まる。
きよろきよろと辺りを見渡し「ふむ」と一言。

「どうか、なされましたか？」

大神官が心配げに問いかけると、晶貴は笑みを返してきた。

「いや、流石にこのままで食事はしにくくてね」

そう言つと、首元へ手をやり何かをつまむ動作の後、すつ、と一直線にその手を下げる。

ぱちつ、と小さな音の後、晶貴は着ていた黒の上着を脱いだ。
そして自分が座る椅子の背に、それを掛ける。

「あつちの部屋で上着脱いでくれば良かったんだけど……埃を立てる様で申し訳ない」

苦笑しながらの軽い謝罪を、国王達は耳から耳へと素通りさせてしまつ。

上着を脱いだ事で、晶貴の姿がより鮮明に映る事となる。

背はリクサムより少し低めだが、すらりとした細身の身体なので決して低くは見えない。

藍色のパンツとよく合う、目の細かい生地で作られた薄い青色の着衣。

青色の着衣の下にももう一枚着込んでるようで、ボタンを外している首元にも黒い生地が見える。

それら全てが短く刈り込まれた黒髪や金の瞳と合わさって、ひとつの美をかもし出していた。

顔立ちは整ってはいるが、決して際立った美しさではない。

けれども、惹きつけられる甘美な何かに、若い太子や騎士だけでなく、壮年である騎士や国王、果ては神職である者までも、呑み込まれそうになる。

晶貴は王達のそんな視線を感じないまま、椅子へと座った。

上座が埋まった事で国王達も座る。

ダレスとルドルフは立ったままだった。

ダレスが言う。

「本日は他に人手がありませんから、私たちは給仕に回らせて頂きます」

「一緒に食べないの？」

「……給仕の合間に食べる許可を頂けましたら」

苦笑しながら言うダレスに晶貴は吹き出す。

決まり事とは言え、料理がこんなにいい香りを漂わせている中、それを食べられずに給仕だけでは苦行だろう。

「全く、面倒な仕組みだ。……許可するから、しっかり食べて下さ

い

「「ありがとうございます」」

夕餉が始まる。

正式な晚餐とかではないので、挨拶や乾杯などはしないとの事だった。

「こちらが水、こちらがカリデという甘味を帯びた果物を絞った飲み物です。シンデイン様、お酒は？」

「あまり強くないものならイケる」

「そうですか。では見繕って……」

脇に置いてあるワゴンの様な入れ物の中を探すダレス。その間にルドルフが晶貴に聞く。

「聖天樹閣下、肉と魚、どちらにしましょう？」

「あまり辛くないのはどっち？」

「本日の中ではバルア肉の……野菜がけですかね」

「じゃあそれで」

まずは晶貴の意見を聞き、料理や酒が数品選り出される。そしてルドルフは同じものを少量、国王の前に用意した。

国王はナイフとフォークで器用に口元へ料理を運び、咀嚼し嚥下する。

そして、少し間をおいて水や酒を口にする。

食事に使う道具類が、元居た世界と殆ど同じなのは、同じ人間の姿をしている以上、この世界でも今に至るまで似た様な生態系が進化退化を繰り返し、それに伴って近い形の文化と歴史があるという事だろう。

ただ、必ず口に合うとは限らない。

人間と聖霊、この二種類以外、まだこの世界の生き物を見た事がないのだ。

水に住む魚と言っても、自分の見知っている魚ではないかもしれない。

鳥だと言う呼び名が同じでも、その姿かたちが同じとは限らない。

けれども。

人体に害なく、滋養があり美味なるものこそ、食用として愛でられるものの筈だから。

きっと、美味しいに違いない。

晶貴は自分の内のドキドキを楽しみながら、待つ。

「よかるう」

国王の一言で晶貴の前に酒と料理が並べられた。

「いい香り」

一言そう言い、晶貴は胸の前で両の掌を合わせる。

「いただきます」

まずは酒。

透明だった器に注がれた酒は、全体的に透明な色合い、けれどもほのかに緑がかっている。

澱はない。けれども酒本来の濃度の所為か、器の底が少しだけ濃く見えるのが美しい。

香りをかぎ、少しだけ舌の上で転がし飲み下す。

「香りは重い。でも、すっきりとした味。甘さはあるけど、果物の甘さに感じない。穀物か何かのお酒？」

味は日本酒に近いけれど、香りが泡盛の様な香りだった。でもワインの様に呑みやすく、美味しい。

「レマという穀物から造られている酒です。若い方は好んで飲む種類なんです……如何ですか？」

ダレスの説明に晶貴は笑顔を向ける。

「美味しいです。で、この酒はこれに合うのかな？」

晶貴はバルア肉の野菜がけという料理に、さくりとナイフを入れる。

表面はこんがりと焼き色があるが、中は白みがかった桃色の肉。その肉に黄色いソースであえられた色とりどりの野菜がからめられている。

まずは肉。そして次は野菜のソースをからめて口に入れる。

「うん。美味しい」

使われている独特の香辛料のせいか、食が進む。

バジルやコリアンダー、ナツメグを混ぜた様な、そんな香り。

「あっさりしてるから鳥の肉かな？ 野菜の方は果菜や根菜を混ぜてる感じ。味付けは違うけど、似たような料理を食べた事があるよ」

自分の好みとしては、これに少量のパセリの風味があれば一番。そう思いつつ、合間にレマ酒をぐいっと呑む。

酒と料理、相性も悪くない。

「それは、一般の家庭でも良く飼われてるバルア鳥の胸肉です。もっと酸味が欲しい場合は、このソランという果実を絞ったものを掛け足す」

果実を示し、その傍にある入れ物の汁を指すルドルフ。

「へー、そうなんだ。今度、この料理があつたらやってみよう」

楽しそうに料理を口へと運ぶ晶貴の姿に、大神官たちは安堵の息をついた。

酒が入っているとはいえ、何品か食すと、もうお腹いっぱいにな

った。

料理はまだまだ残っているが、辺りを見れば国王も太子も、もう殆ど食事に手をつけていない。

ルドルフとダレスも、給仕の合間に手際よくしつかりと食べている様子だった。

主賓が終わらないと食事が終われないのは、多分この世界でも同じなのだろう。

「美味しかったです。御馳走様でした」

晶貴は両手を合わせて食事の終了を示すと、国王達も口々に食事を終了してゆく。

全員が食事の終了を述べた所で、大神官が「本来こういう事はしないのですが」と前置きして、椅子以外の品々……皆の食べた後の食器類や、残った料理の乗ったテーブルごと、移動の白の陣で消し去った。

そして消えたと見たその直後、別のテーブルがその場に転移されてくる。

新しいテーブルの上には焼き菓子のようなものと果物、そして茶器らしいものが置かれていた。

ルドルフとダレスが手際よく茶を淹れ、皆へと配る。

紅茶に似た良い香り。

けれども、まだ熱そうなので暫く香りだけを愉しむことにした。

「普通は宴席場を二手に分けて設えるものなのですが、こちらの部屋ですと少し狭く、設えた別室へと移動するしかありませんでしたので、急遽こういう方法を取りました」

「移動してもよかったのに」

ぽつりと漏らす晶貴に大神官は苦笑を伴いつつ、言う。

「まだ、神の一枝さま降臨のお披露目すら済んでおりませんから、あまり衆目に晒す事はしたくないのです……つまるところ、色々あるんですよ、手順が」

「良く分らないけど、明日、聖天神殿に行くんだったよね？」

食事中に聞いた内容を確認する晶貴。

「ええ、そうです。明日、聖天神殿で聖樹に触れて貰うのが最初という決まり事となっております」

「神の一枝として正式に認められるのがその時だ、って言うてただ。何か、変わるの？」

「それはまだ、申せません」

笑みの中に真剣さを潜め、大神官は告げる。

「神の一枝さまは、触れれば『理解する』のだそうです。記録にはありませんでしたが、過去、どの神の一枝さまも『聖樹に触れ、理解し、目覚める』とあります」

「……触れるのは分る。理解するってのは良く分らないけど……もつと判らないのが目覚めるってヤツだな」

「うーむ」と唸る晶貴は色々と想像してみる。

「新しい能力に目覚めるとか、何かを間違えてて正しさに目覚めるとか……想像するといろいろ出てくるけど。これまでの記憶が消えて新しい人格になる、とかだったら絶対に嫌なんだけど」

これまでの人生、色々な事があった。
決して人並みとは言えないだろうそれを、晶貴は消したいとは思
わない。

生まれ落ち、生きる。

簡単な言葉だけれども、人間^{ひと}として生き抜こうとすると、そう簡
単ではない言葉。

これまでの人生が自分の中で消えてしまおうと言う事は、これまで
行ってきた自分の生き方や努力が全て水の泡……無駄になってしま
うという事。

記憶を無くしてしまえば関係ないのだろうが、それでも晶貴にと
っては重要なものの一つだった。

世界の中で、国によって違う倫理観の中、わりとまともらしいと
感じる国に生を受け。

その中でもごく平均的な一般家庭に生まれ落ちた。

これまで色々。

本当に色々な事があったけれど。

それを消したいとは、決して思わない。

晶貴の言葉に大神官は言う。

「これまで降臨なされた神の一枝さまの誰一人、それまでの記憶を喪つたり改ざんされた方は居ないと思いますよ」

有り得ない、と。思っているからこそその真つ直ぐな言葉。

「聖天神殿には聖天様から賜わった神書以外にも、沢山の書がございます。その中に、これまで降臨なされた神の一枝さま直筆の書も多々あるのです。その直筆の書を読まれた後代の神の一枝さまの説明では、記憶の改ざんなどはなく皆さま御自身の意思で神の一枝たる存在を納得されたのだと」

「直筆……？」

怪訝な顔をした晶貴が、次の瞬間眼を見開く。

「それって、もしかして……この世界の人じゃ読めない文字で、って事？」

「はい、御察しの通りです。伝え聞いておりますに、各々さま方の生国の文字らしいです」

「………らしい、という事は、この世界の人は誰もその言葉を読み解いてないって事？」

「過去の神の一枝さまの書を読み解いた者は存在しません。ただ、誰も読めなかったのか？ という事になると、そうでもないのです。歴代の神の一枝さまから直接文字を教わった方も居ましたから、その者たちはそれを読み解く事が可能でした。けれどもそれらは『次代へは』伝わらないのです」

「伝わらない？………何で？」

「忘れてしまうのです」

「は？」

首を傾げる晶貴に、大神官は言う。

「神の一枝さまが御逝去なされた後、関わった人々から、余剰な記憶が消えてしまうのです」

「余剰な記憶？」

「そうですね……神の一枝さまの性格や雰囲気とか、日常生活などは皆の記憶に根付き、しっかりと残ります。ですが、先程お伝えした神の一枝さまの生国の言語の知識ですとか、その姿かたちや色彩とかが主に記憶から消えてしまうのです」

大神官は静かに言う。

「何か書物として記録しようとしても、神の一枝さまに関わるそういったものだけが文字に残せません。口伝で残そうとしても、喉から声が出せません」

「理不尽な」

晶貴が大神官の言葉を遮る様に呟く。

「神と呼ばれる存在があり、その体現……代理のような神の一枝を存在させている。ならば、その存在を流布し続ける事こそ大切だろうに。記憶まで改ざんする必要性があるとは思えない」

人の人生において、その記憶は人生そのものと言ってもいいだろう。

その記憶を部分的とはいえ、自分自身の都合ではなく、他者に改ざんされる。

それが、神と呼ばれる者の成す事とはいえ、とてもまともとは思

えない。

そう思つての晶貴の意見に、大神官はうつすらと笑みを浮かべ応じる。

「シンデイン様は本当に聡明でいらつしやる。神の御心に相對して真つ直ぐに意見を述べる事が出来るだけの御自身の氣概をお持ちだ。けれども、先程の……只人の記憶の改ざんこそ、神の、聖天様の優しさなのです」

大神官は穏やかに語る。

「貴方様がこの世界に降臨されて。それが、その場で神の一枝さまだと……そう皆が理解できるだけの知識があつたとしたら。先程の様な場所に移送されると御考えなさりますか？」

その言葉に晶貴は暫く思案する。

神の一枝が神の代理人たる存在なのだと知っている者たちが、晶貴をそれと知らずに牢へと入れたという事実。

それが何を意味するものなのか、考えてみる。

食事の間に聞いた、もうひとつの話。

それは、自分がこの世界へと降り立った時の話。

民間人との謁見の最中、予測もしなかつた魔法攻撃が太子へと向けられた。

その時、突如として攻撃と太子の間へ人が現出した。

その人物は背中に浮き出た魔法陣で攻撃を全て呑み込むように受け止め、さらにその攻撃を倍返しにして相手の魔法陣へと叩き返し

たのだという。

自分はすぐに気を失ってしまい、記憶は僅かしかかった為、その話は非常に興味をひくものだった。

現出してきた人物によって、周囲への被害もなく、失われた生命もない。

あるのは多大なる感謝くらいのものだろう。

けれども、立場を逆転して考えれば、これほど怪しい人物も居ない。

どのような術かは判らないが、初めて見る術。

助けてやったんだから感謝しろ、と言わんばかりの局面。
恩を売った後、何かしでかすのではないかという疑念。

だが本当に疑念が深ければ、枷など付けずに置いておかれるなど有り得ない。

その人物の人となりと正体はつきりするまで牢へ置く、と。
国王と太子がとった牢への移送は、真に妥当だと思える。

では。

その現出した人物が、最初から神の一枝だと一目で判っていたとしたら。

初めて見る術だとしても。

「神の一枝さまだから、そういった事が出来ても不思議ではなからう」と、納得してしまう。

国王太子以下、皆の生命が助けられた事に対しても。

「この国はそれほどまでに聖天様に愛されている国なのだ」と、歪んだ解釈がまかり通る事となる。

神の一枝という存在が、只人よりも遥か上に置かれるこの世界で、神の一枝の意思に沿わぬものは、全て排除しかねないその中で、そういった想いと感情が引き起こすもの。

晶貴はゆつくりと口を開く。

「もし、最初から神の一枝だと認識されていたら。品物を持つてきた民間の拝謁者は取り調べされる暇もなく瞬殺されていた可能性が高いな。……例えば後で本来の犯人と違うと判つても『神の一枝さまを傷つける様な原因を持つてきた者なのだから、殺されて当然』と、名誉回復もされない筈だ」

視線を大神官へと向ける。

「聖天の優しさとは、厳しさの事。考える事を放棄するな、という教えか？」

「その通りにございます」

大神官は晶貴に頭を下げ礼を成す。

「聖天様は我ら只人に常に前進を望まれておられます。慈悲深き聖天様の体現である神の一枝さまをお迎えするのは只人にとって至上の喜び。けれども、神の一枝さまに縋り甘えるだけでは……只人は皆、赤子の様に脆い存在となってしまうでしょう」

「だからこそその記憶の改ざん、か。なるほど」

理解した晶貴は軽く息をつく。

「で、確認しておきたいんだけど。皆の記憶から神の一枝の姿かたちや色彩とかが消える。そんな中で、貴方はどうやって私を神の一枝だと認識できたんだ？」

大神官がその頭を上げる。

その瞳に憂いは無い。

「聖天様より授かりしものに、神書というものがございます。聖天神殿に務める神官の中でも、高位神官のみが神書を読む事が可能なのですが、神書には聖天様の御心の内や我ら只人への想い等、様々な事が書かれており、水に落としても濡れず、火にくべても燃えません。神本人が書かれたという書なものですから、我ら只人はその書に文字一つ書き加える事すら不可能なのです。その中に、神の一枝さまについての記述もございます。神書に書かれている神の一枝さまの大きな特徴として、神気と神眼がございます。聖樹と同じ性質の神気は、計り知れないほどの壮大さを持ち、神の吐息たる聖霊の力は神の一枝さまに追従する。そして神の一枝さまの持つ金の神眼は、その感情を現し様々に色彩を変化させる。……神書にはそうあります」

真っ直ぐ晶貴を見つめる大神官。

「そのどちらも兼ね備えておられるシンディン様は、確かに神の一枝さまに相違ないと存じます」

晶貴は大神官の話を脳内でまとめようとして「ん？」とその両眼を見開いた。

「……神眼というのは、金眼、なの？」

「はい。今現在シンディン様の双眼にて光り輝く金色でございます」

「金色か………へー」

どうやら肌の白さに拍車が係っただけでなく、瞳の色まで変わっている様子に、晶貴は苦笑する。

「神の一枝の特徴が金眼だというのなら、この世界の人々に金色の瞳は生まれ出無い、という事かな？」

「金色の瞳は神の一枝さま特有のもの。それ故、只人がその色で生まれ落ちる事はございません」

「……………了解した」

先程一度あったように、晶貴の瞳が一瞬だけ黒に染まり、金に戻る。

会話の終了を告げる代わりに、晶貴はそつと茶器に口をつけた。すっかり冷めてしまっただけだが、薄甘く、飲みやすい味だ。

「只今湯あみと寝台の用意をさせております。支度が出来次第、先程の部屋へと戻りますので、宜しければ就寝前に奥の間にあります湯殿で湯をお使い下さい」

ダレスが晶貴にそう告げると、晶貴は思い出した様に訊いた。

「そういえばあの部屋、鏡が一枚も無い様に思えたけど……鏡ってある？」

この世界の文化様式がまだ今いち良く分らないが、これまで居た世界と近くみえるのだから、水鏡に始まり銅鏡に銀鏡と変化してゆく道具の中、近いものがある筈だと晶貴は考えていた。

ダレスは頷く。

「御客様の中には鏡を嫌う方もおられますので、部屋に常には置いてないのです。御必要であれば設えますが」

「室内に手鏡と置き鏡。あれば、脱衣所に大鏡。湯殿にも置き鏡が一つ欲しい」

「承知いたしました。すぐに手配させます」

ダレスは一礼し、部屋から出て行く。

暫くして湯殿と寝台の用意が整ったと連絡が入ったので、晶貴達は再び元の貴賓室へと戻る。

つい先程までこの部屋に人が居たのだという気配が、仄かな温かさとして残っている。

壁を見れば置き鏡が、寝台の近くのチェストには手鏡が用意されていた。

昨夜は結局入浴などでできずに寝た形になるので、少し肌着が気持ち悪い。

晶貴は湯を使いたいという事を告げると。

「まだ、シンディン様付きの者が決まっておりますので、私どもが湯あみの介添えをしたいと思います」

と、ダレスとルドルフが足を踏み出しつつ申し出た。
晶貴はくすくすと笑う。

「や、一人で入れるから大丈夫。考えたい事もあるしね」

『流石に、それはちょっと、ご遠慮申し上げたい』

内心でも苦笑いが止まらない。

そんな笑みの晶貴に、大神官が言う。

「では、シンディン様が湯をお使いになられる間、こちらの部屋にて私どもは控えさせていただきます。何用があればお呼び付け下さい」

「是非、そうして下さい」

ハダカのお付き合いに至るまでは、まだ越えねばならない関門があるのだ。

晶貴はダレスに脱衣所へと案内され、トイレや湯殿の位置関係や各場所の説明を受ける。

「お脱ぎになられた着衣はこちらへお願いします」

「脱いだ服を勝手に持っていったり、水洗いとかしないで欲しいんだけど」

「承知しました。では、後ほどシンディン様の御前で水なしにて洗淨致しましょう」

「へー、そんな事できるんだ」

「聖霊を扱う方法ですので、シンディン様もお出来になれると思いますよ？」

「そうなの？ 後でやり方ゆつくり見せて貰おう」

新しい事ばかりで好奇心が尽きる暇もない。

楽しそうに晶貴は微笑む。

「御身体を洗う為の織布や手布、濡れた御身体を拭く浴布類はこちらに。あと、こちらに、勝手ながら新しき肌着と夜着とを御用意させていただきました。寸法も何種類か御用意いたしましたが、何か御不自由があれば、何なりとおっしゃられて下さい」

「うん。ありがとう」

一礼をして脱衣所から出て行くダレス。

晶貴は再度、脱衣所の中を見分した。

今説明して貰った物の置き場を再確認し、設置されている大鏡を見る。

『ほおお――』

溜息と共にもう一度、じっくりと鏡に近付き見つめる。

『うわー、ほんとに金色だよ！ 何かガラスと金属の中間みたいな色あいだねえ……おお！ 虹彩がビミョーに色変わりするのかわかるほど。これが先刻言ってた感情で変わるといふ事か』

ひとしきり眺めた後、晶貴は服を脱ぎ、いつものように自分の身体を上から下まで見る。

『何か白っぽいと思ったら、火傷の痕とかシミとか小さなほくろとか全部無くなってるし！』

異世界へ移動するにあたって、どのような等価交換があったのかは知らないが、大した美白効果である。

『身体は……いつも通り。髪の色は黒のままなのか』

ひと通り確認して満足したのか、晶貴は浴室へと向かう。

湯船にはたつぷりの湯が張られていた。

一つだと思っていた湯船は横にもう一つあり、先程見落としたらしいその深さは足首が浸るくらい。その上の方に何か動物を模った彫像がありそこから湯が吹き出ている。

自由落下で下方へと落ちる湯は、シャワーの代わりなのだろう。

晶貴はそちらへ足を踏み出し、丁度良い温度の湯を頭から浴びた。軽く全身を湯で流し、深い方の湯船へと身体を沈める。

こちらの湯加減も丁度良い。

湯船の深さは、立ち湯も出来る深さから腰下の深さまでと、何段かに分かれているものだった。

一度、肩の辺りまでつかった後、腰の深さの部分へと移動して足をのびし、半身浴の形を取る。

温まったら身体を洗おう、と。そう思った時。

「シンデイン様、申し訳ございません。少々、入っても宜しいでしょうか」

脱衣所の扉の奥からダレスの声が聞こえる。

「御身体を洗う石鹸の置き場をお伝えするのを失念しておりました」

「どの辺り？」

「それが、口頭で説明するのが難しいものなので」

口ごもるダレスに、晶貴は溜息をついた。

幸い、浴室は湯気だらけで視界が良くない。

半身浴状態でもあるし、はつきりと全身が見える事もないだろう。万が一の時は湯に沈めばいい。

晶貴はそう考え、応じた。

「どうぞ」

晶貴の了承に、ダレスが入ってくる。

視線を晶貴の居る湯船には向けずに、湯船の向かいの壁へと向けていた。

「こちらの壁にある、この模様がお分かりいただけますか？」

「んー、どれ？」

「私の指先にある、花の様な輪郭と、何かの顔の様な模様がある部分です」

ダレスの指し示す場所が、湯気とダレス本人の身体で隠れ、少しばかり見づらい。

晶貴は少し自分の場所を移動した。

「この模様の、花の様な輪郭の中の突端を触ると下の部分が開き、固形の石鹼が出ます」

見れば、ひまわりの花弁のように見える一箇所だけが飛び出ている。

確かに何も言われなければ、ただの飾り彫りにしか見えない場所だった。

ダレスはその突端へ触れ、かぱりと開いた壁から石鹼を取り出す。石鹼が取り出された後も壁はその一部分だけが開いたままだった。

「使用後、もう一度この場に石鹼を置くと再び壁が閉じます。ゆっくりとした閉じ方なので大丈夫だとは思いますが、御手を挟まれませんか、お気を付け下さい」

そう言うと、ダレスは再び石鹼を取り出した場へ置く。言われたようにゆっくりと壁が閉じられてゆく。

「石鹸は出したままでも構いませんが、湯に溶けやすいものなので濡れた床に直に置きますと無くなりますし、何より床が滑って危ないです。もし一つの石鹸が無くなりましても、壁には何箇所かこの仕組みがありますから、そちらをお使いになって下さい」

確かに言われないと判らないものだったので感謝しつつ、晶貴は声をかける。

「わかった、ありがとう」

「いえ、こちらの不手際にございま」

説明の為下げていた頭を上げながらの、ダレスの言葉が途切れた。

「？　どうかした？」

「っ……ああああああ！！　し、失礼しましたっっ！！！」

入ってきた時の静かさとは逆に、叫び声を上げつつ猛スピードで浴室から出てゆくダレス。

「？……………あ」

晶貴はようやく気がついた。

先程の石鹸の取り出し口のある少し上に、少し大きめの置き鏡が見える。

鏡は湯気の立ち上る中、少しも曇らずに辺りの景色を映し込んでいる。

角度から考えると、移動した晶貴の姿は頭を上げたダレスにも、鏡を通して十分に見える位置だった。

晶貴もその鏡に映った自分の姿……小さくも形よく膨らむ双胸を見て、不思議そうに「ありや？」と首をかしげ、何かを納得して苦笑した。

『こういう場合、叫び声を上げるのは私の方だと思うんだけど……ま、とりあえず。説明は入浴後まで待ってもらおう』

人差指で頬をかりかりと掻きながら、晶貴は身体を洗う為に湯船から出る。

第 8 話 望まれて ここに在る「中篇」(後書き)

やっぱり長くなっちゃった(´・ω・´)

こんな所で切るな！ とかわれそうだけど、これ以上長いと読みにくくなりそうなので、ぷちり。

後編では、晶貴さんの落ち着きの理由を。

第 9 話 望まれてここに在る「後篇」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

今回はまた、性に関する内容が少々ございます。

えちちな内容ではございませんが、性関係が苦手な方は特にご注意ください。

この作品はファンタジーで、フィクションです。

第 9 話 望まれてここに在る「後篇」

湯殿へ晶貴を送り出した後、ダレスは大神官たちの居る部屋へと戻った。

「御一人で平気だと言われておったが、大丈夫ですか」

国王が不安げに呟く。

「幼い方ではありませんので、あまり心配は要らないと思いますが」

大神官がふと、思案顔になり、ダレスへと問う。

「側近どの、説明はひと通りされましたか？」

「はい。手布や浴布の場所、新しい肌着や夜着の場所も致しました」

「……湯殿内の石鹸の出し入れの仕方は？」

「あ！」

どうやら表情を見るに、ある程度以上の浴室には民間でも必ず設置されている仕組みなので、つい説明し忘れた様子だ。

「説明に行つてまいります！」

そう言い、湯殿に向かったダレスが、暫くして悲鳴を上げながら戻ってきた。

長椅子に座っていた面々は、皆何事かと立ち上がる。

「如何なされた」

大神官にそう訊かれたダレスは、その顔を紅潮させていた。
余程慌てたのか、興奮がなかなか治まらずにいるようだ。

それでもダレスは幾度か深呼吸をし、ゆっくりと言葉を吐き出した。

「王族親衛騎士としてあるまじき失態、どう償えばよいのか……」

真剣な顔で言うダレスに大神官は再度訊く。

「どのような失態をしたというのです」

「御許可もなく、シンデイン様の、ら……裸体を拝してしまいました！」

再び真っ赤になるダレスに、国王が言う。

「確かに許可なくすべきことではないが、神の一枝さまの裸体を拝したとて、それほど恐縮するものでもあるまい？」

「シンデイン様からお叱りでも受けたのなら別だが、そういった声は聞こえなかったぞ？」

太子も国王に言葉を足す。

ルドルフも二人の意見に頷きながら言う。

「何より、本当に失態を犯して聖天樹閣下の不興を買ったのだとしたら、聖霊たちが黙って見過ごす筈もなかつた」

そうなのだ。

部屋の中にはたくさんの聖霊たちが居る。

勿論、湯殿にも沢山居るだろう。

神の吐息である聖霊にとって、神の一枝の存在は神自身と同等。

恐怖や嫌悪、そういった負の感情を神の一枝が持てば、即座に反応するだろう。

けれども現在この部屋の中の聖霊たちは、自分達を観察しているだけのように感じる。

そう思つてのルドルフの言葉に、ダレスは辺りの聖霊たちの姿を垣間見る。

自分がこの部屋を出た時と何ら変わりのない聖霊たちの雰囲気に一瞬安堵しかけたが、ダレスはその頭を左右にぶんぶん振り回す。

「いえ！ いえ！！ やはりダメです！ 許可もなく、女性の裸体を拝するなど、騎士のする事ではございません！！」

「……！！」

ダレスの言葉に国王と太子、ルドルフは一瞬、息を詰まらす。

一番早くに立ち直ったのは国王だった。

「ダレス……ダレス・ワイマート・ガレダン。……今、何と申した？」

国王に向かい、厳かに言うダレス。

「私が拝してしまったのは、神の一枝さまの、シンディン様の……女性の上半身でございます」

沈黙が室内に流れる。

神の一枝たる晶貴と対面し、色々な会話はあった。

だが、まだ年齢や性別すら尋ねていない事に気付き、自分達の失態に眉をしかめる。

すらりとした肢体と短髪、利発な語り。

男性によく有り気なその様相に勘違いを起こしていた

雰囲気や声、立ち居振る舞いや言葉遣いも中庸だった晶貴を、つい男性として見、扱っていた事に国王達は気づいてしまった。

各々が「ううむ」と唸る中、大神官は告げる。

「皆様それぞれのお考えはともかくも。まずは、シンディン様御自身のお気持ちを汲んで差し上げるのが宜しいかと存じますが……如何なものでしょうか？」

大神官の提案に皆が頷く。

晶貴は湯殿で寛いでいるのか、まだ脱衣所の扉から出てくる気配はない。

皆は長椅子に座り、静かに出てくるのを待つことにした。

湯殿や脱衣所には時刻板らしきものが無かった為、自分の体内時間でしか測れないが、着替えも含めて大体一時間くらいは過ぎたのだろうと思う。

晶貴にとっては平均的な入浴時間だ。

用意された肌着は生成りの長袖のシャツの様な上肌着と、同じく生成りのトランクスの膝上長けの様な下ばきだった。

下ばきはひもでウエストを調節するタイプだったので簡単に調節がきいた。

薄青い夜着も上は長袖。下は足首まであるズボンで動きやすい。

夜着の上に着けるのだろうガウンらしきものもあったが、さほど寒さを感じないので夜着のまま、乾いた浴布で濡れた髪を拭きつつ大神官たちの待つ部屋へと戻る。

自分の姿を認めるや否や、大神官を除く全ての者が片膝を床へつけ、頭をたれる。

晶貴はその様子を眺め、立っている大神官を見つめた。

大神官は………微笑んでいる。

その姿に、晶貴も笑みを浮かべる。

彼らの自分を扱う雰囲気から男性に間違えられているのだろうとは思っていた。

唯一その判断をつけた様子を見せずに晶貴と対話をしていたのは大神官のみ。

そこへあの、騎士ダレスの悲鳴である。

大神官以外は自分の事を「男」と思っていたとみて間違いないだろう。

ただ、今気にかかるのはひとつ。

他の者が跪いている中、笑顔で立っている大神官についてである。

神と人との間に立つ職務、神職。

神事が関わらぬ限り、各国の政治的な事には一切手を出さない者達。

普通の神官は国王等一国の主に対等にものを言う権利を持ち、大神官は国王よりも立場が上となる。

それが、聖霊たちに訊いた神官というものだった。

なので、国王が跪き大神官が立っているという構造は特に不思議ではない。

問題はその笑顔にあった。

大神官が晶貴を女として最初から見ていたとしたら、それを国王達に告げていない筈はない。

男と女、その身体の構造が違うのは誰とて見知っているものである。

壁近い棚にある石で作られた女性の彫像はドレス姿である。

テーブルの上の織物や寝台の上掛け、天蓋にも手の込んだレースや刺繍が施されていた。

そういう技術がある中で、男女の肌着が同じであろう筈もないのだから。

今回とて湯を使わせる段階で必ず着替えの問題があるだろう。

肌着上着含め、あの着衣には女性の胸の膨らみを考慮した仕立てになってはいなかった。

神の一枝に対して、あれほど真摯に礼を成す人物がそういった事を見逃す筈はない。

つまりは女として見てなかったから、何も進言しなかったのだと判る。

では、男として見ていたのだとしたら、どうか。
これも答えは否だ。

もしそうなら、他の者同様、今あの場で笑顔でなど居られないだろうから。

牢で初めて対面してから以降、男だとか女だとかいう性別に関係なく晶貴に接していた大神官。

叶う限り、神の一枝の意思に添いたいと思慮行動する者。

彼は、晶貴に男女の確認すらしなかった。

となると、考えられる事は限られてくる。

『最初から知ってたのか、それとも神の一枝が皆そうなのか。或いは聖天とやらがそうなのか……という辺りか？』

晶貴は自分を見つめ、未だ笑顔でいる大神官を見る。

彼は他の者が跪いている中、自分が言葉を発するのを待っている。
晶貴の瞳の金色が橙色を流した様に揺れ動く。

『このオヤジ……イイ性格してやがる』

そんな思いに、口角が自然に上がる。

「とりあえず、皆さん立ちませんか？ 椅子に座って話しましょう」

晶貴はそう言い、自ら椅子へと座る。

その言葉で大神官はすぐに移動をする。

国王と太子は互いの顔を見合わせ、立ち上がり同じく椅子へと腰かける。

ルドルフは、ちらとダレスを見やり国王達に幾ばくか遅れて立ち上がった。

方向こそ晶貴の方へと変わっていたが、ダレスはまだ頭を下げたままである。

「騎士さんも、まずは立って」

晶貴が促すと、ダレスは恐縮した声で告げる。

「申し訳ございません！　ひとりの男として、騎士として、恥ずべき行為を行いました事、この場で死を賜っても文句はございません」

生真面目実直の見本の様な言動に晶貴は苦笑し、指でこめかみを数回掻く。

面倒だが、こういうのは命令して動かすに限る。

「えー。ダレス……ワイマート・ガレダン、だったよね。……顔を上げて立て」

「はっ！」

流石に命令口調だとさっくり動いてくれた。

その場に立ち、次の言葉を待つダレスに晶貴は言う。

「多分、私の裸を見た事でそういう考えになってるんだろうけど。不可抗力だし、不問って事で」

「そ……」

「私が、そう決めた。何か不満でも？」

「い、いえ……………ですが」

「騎士が二の句を継ぐな」

笑みを浮かべて静かに言う晶貴。

「裸を見られる事は慣れてる。だから、あまり気にするな」

「……………はい。御厚情に感謝致します」

礼を成したダレスから、晶貴は大神官へと向き直る。

「で。大神官にも訊きたい……………聖天の性別は何だ？」

「聖天様に性別はございません。無性でございます」

予測していた問いなのか、大神官は笑みを崩さない。

なるほど、と思い頷き、晶貴はもう一つの質問をする。

「では、歴代の神の一枝の性別に、決まりは？」

「神の一枝さまの性別は、二種類でございます」

「ここまで来て「男性」と「女性」だったら怒るぞ」

勿体ぶった語りに晶貴が軽く釘を刺す。

大神官は平然と言う。

「歴代の神の一枝さまの中には、性をお隠しになられた方もございますので。まずはシンディン様の御意向を伺いたく存じまして」

なまじ大神官と言う大層な職に就いているだけあって、なるほど立派な狸である。

国王達が神の一枝に対し、男性の様な扱いをしている事を敢えて咎めず。

しかも裸体を見させる様な事を幾度か示唆し、罨に嵌った騎士によつて性を周囲に判らさせた。

この状態で神の一枝が激昂する様なならば、性の事には触れない形でこの場を収めたのだらう。

例え、一人の騎士の生命が喪われようとも。

そんな大神官の意図に気づいてしまった晶貴は溜息をつく。

「私はこの、自分の身体を好いても嫌ってもいない。けれど、身体と心が揃つてこそその自分自身だし、この身体でなければ今の自分はない。だから、隠さない」

晶貴のその言葉に大神官は頭を下げ、礼を成す。

「承知いたしました。では、各国の王への告示にも記載いたします。宜しいですか？」

「構わない。そうでないと後々死人の山ができそうだ」

肩を軽く上げ、笑みを浮かべる晶貴に大神官は言う。

「ご意向が判りましたので、先程の問いの返答を致しましょう。…その前に他の皆様へ申し上げます…本来なら後日正式な告示がイルフェラム国に着いて初めて知らされる事なのですが、先程のシンデイン様の御允許いんきょがありますので降臨地に置ける特赦扱いとして、告示まで口を閉ざすのを条件とし、この場に居る者全てに聞く事を許可いたします」

長い前置きの後、大神官は晶貴に告げる。

「歴代の、神の一枝さま方の性別は先程申しましたように二種類ございます。ひとつは聖天様と同じくどちらの性も持たない「無性」……もうひとつは、どちらの性も兼ね備えている「両性」でございます。……拝見するに、シンデイン様は「両性」のご様子ですが」

返答を求められた晶貴は落ち着いた声で言う。

「確かに私は両性具有と呼ばれる身体を持っている。ただ、まあ……期待されても困るので最初に言っておくけど、子を作る事は出来ないからな」

「その辺りも了承しております」

大神官は言う。

「歴代の神の一枝さま方の中で子を成された方は御一人として居られません」

「ま、無性や両性じゃ無理もないか」

晶貴が僅かに微笑む。

そして、驚いている様相の国王達に向かって言う。

「驚かせて申し訳ない。母国の役所には「女」として登録されているけど、私は身体の中の仕組みが色々、普通の人とは違ってね。この世界の学問……医学がどの程度かは判らないけど……私は両性具有といって、男女両方の持ち物を持っている。簡単に言うと、男性と交わるのも可能だし、女性と交わるのも可能だって事。でも男性としての種は無い。女としての畑も無いので、子を成す事は出来な

い……それが私の身体だ」

淡々と語る晶貴。

「私の場合、身体の中の内分泌……あー難くなるか。まあ、性別を司る力が常に男女両方に揺れるんだ。だから胸が男の様に平らな時もあるし、女のように膨らむ事もある。実際、先刻食事をしている時や湯に入る前まで、胸はぺたんこだったからな。湯に入って身体が温まって少し気を許したんで、胸が膨らんだんだと思う。これまで、ここまで急に膨らんだりする事は無かったんだけど、こつちの世界へ来てから多少身体の造りが変わったみたいだから、その所為かもしれない。何にせよハダ力を見たとき騒がれてしまった件については、不問。……この身体が特殊だって事で、昔から散々ハダ力に剥かれ、沢山の人間に見られてきた……視線には慣れているから今更だ」

特に面食いではない晶貴だが、審美眼が無いわけではない。

この場に居る男性達の顔の造作は皆、整っている。

若いという事もあるが、太子やダレスなどは既に美系の部類に入るだろう。

自分の傍らにそういう者が居る。

ただそれだけでも、夢想は働くものだ。

それが女性化の引き金になってしまった可能性は十分にある。

苦笑しながら晶貴はダレスに言う。

「どっちかっていうと……ある程度膨らみはするが、恐縮されるほ

どの胸でもない。つまらないものを見せて申し訳ないのはこっちの方なんだよね」

「そんな……！」

「いやいや、無理しなくていいって。女の感情が強くなれば胸は膨らむし、男の欲望が強くなったら勃起だってする。そんな困った身体なもんで、感情を制御するよう心がけては居るんだけどなあ……」

くす、と漏れる小さな笑い声。

相手が男であろうと女であろうと、自分のこの身体全てを許容する者はこれまで居なかった。

肉体関係を持った後などは特にそうだった。

大抵の者はどちらか片方の性にするよう手術を勧めてくる。

男の心、女の心。男の身体、女の身体。どちらも自分なのに理解して貰えない。

何度、住処を変えたらう。

幾度、性格を変えてみたらう。

人間は、自分と異なるものを排除したがる癖がある。

このままの自分を認めて貰いたいけれど、なかなかそう上手くはいかない。

いつしか心に仮面をつける事を覚え、当たり障りのない対応を取る様になった。

感情に揺れ過ぎると碌な事はない。

晶貴はずっと、そうやって生きてきた。

「あと、言葉づかいが荒くて申し訳ない。出来なくはないが、このナリで普通の女言葉を使っているとどうしてもオカマかニューハーフ……あー、身体は男性なんだけど心が女性とか、男だった身体を手術で女性に変えた人達とかと混同されてしまうんで、ついついこういう喋りになってしまっていて……実は地の喋りはもっと荒い時もある」

笑顔のままそう言う晶貴に、大神官が言う。

「聖天様の意思でこの世界へと降臨なされたシンデイン様はこの世界で至高の存在となります。我ら只人は全て貴方様の僕と同じ。主上の言葉遣いがどのようなものであれ、我らはその言葉を拝するのみ。主上の持つ自分らしさに苦言を言う者などおりますまい……何、位の高い者でも結構口調の荒い者ごろ居ります。先程の『何しやがったコノヤロー』などは可愛いものでございますよ」

楽しそうに語る、その瞳に嘘は無い。

晶貴は軽く頷く。

「そうか、安心した。自分らしくあればいい、か」

「ええ。あと、夜間のお世話なのですが。御必要であれば男女どちらでもご用立てしますので、お気軽に申し付け下さいませ」

「ぶっ……………ははははははははは！！！！」

晶貴は盛大に吹き出した。

辻褄の合わない部分があるので、大神官の嘘はすぐに見抜けた。

「なに？　まだお披露目前だから人目に触れさせちゃいけないんじゃないかってなかつたわけ？」

「良い記憶力でございますね。確かに今は、ほんの冗談に過ぎません。ですが、先程のシンディン様のお話を聞くにあたり、これだけは申し上げておきたいと存じます」

大神官は静かに、けれども真面目な目を向ける。

「シンディン様の御身体を両性だと公示する事で、それを異端と考える様な馬鹿はこの世界にはおらず、『神の一枝さまとは、そういうものなのだろう』と認識されるだけに過ぎません。ですのでシンディン様はその御身体が持つ欲を我慢する必要性はございません」
「……子孫とか出来ないのに、勝手に『お手付き』とか言われて後宮とか出来たりするのはご免こうむりたいんだが」

男であれ女であれ、権力のある者につきものの一つがそうした妾、側室の類。

至高の存在と聞かされて、まず浮かんだのがそういうものだった。自分の事を本当に好いてくれてそういう関係になるのであればまだいいのだが、自身の持つ立場を考えると、どうしても何かの策略や政治に関わる可能性が高くなる。

自身の性経験の最初を思い出し、少しばかりげんなりしている晶貴に大神官は言う。

「シンディン様が望む事がなければ後宮などは出来ません。お手付き云々は多少はあるでしょうが、その辺りはシンディン様ご本人が相手を選べば良いだけの事でしょう？　性生活についてもシンディン様の自由恋愛でお願いします。……何も、のべつ幕無しに色欲魔人になれと言ってるのではありませんよ？」

大神官は苦笑しつつ、続ける。

「シンディン様は先程、ご自分の感情を制御しているとおっしゃられた。これまで生活なされていた世界がどのようなものは存じませんが、お話から察するに男女という性の括りが一番の多数で、それ以外の性は排他されているような感を受けました。ですので、シンディン様はご自身の感情を抑えなければ、生きて行けなかったのだらうと、そう見受けられました」

一度頭を下げ、礼をとる。

「私の考えが間違いや間違いであれば謝罪申し上げます。けれど、もし、そうでないのなら。神の枝さまは、その自由な御心があるが故、聖天の体現と呼ばれているのです……理性と言うのも人それぞれの範囲がございまずでしょうが、過度の抑圧だけは……感情を無理に押し殺す事だけはして下さいません様にお問い合わせ申し上げます……これは、神官としてではなく、私モノティア・レグル個人の意見にございます」

晶貴は少しだけ目を細めた。

神と人とを繋ぐ神職にある人間が放つ、個人としての言葉の、その意味の深さを考えて。

本来「個」という感性を捨て去る者が多数を占めるのがこういう神職だ。

その中でも最高峰である大神官の位にありながら。

その彼が、「個人」として自分に「願う」という。

それは、本心からでないと告げられない言葉だから。

「……自分の事を心配してくれる者が居るといのは、嬉しいものだ」

晶貴の心にほんわかとした温かさが灯る。

裏切られる事には慣れている。

傷つきたくなければ、過度に期待を持たなければいい。

けれども、この久しぶりに差し出された想いを、受け止めないでいる方が苦痛だった。

「随分と長い事こういう生活をしてきたから、急に変われと言われても難しい……が」

目を細めたまま、晶貴は大神官へ心からの笑みを見せる。

「努力はしてみよう」

言葉と共に、晶貴の感情が漏れ出る。

その感情を受けた聖霊たちが部屋中に向けて力を放つ。

激しいものではない。

怒りや嫌悪でもない。

その温かな想いによる力は、晶貴の身体を少しだけ輝かせる。

神々しさと、色香を伴う甘美なる輝きに、その場の人間は一瞬理性を手放しそうになった。

力が放たれたのは、時間にしてもほんの数秒だろうが、感じた色香に惑わされてしまった者達の頬は、ほんのりと紅く染め上げられていた。

第 9 話 望まれてここに在る「後篇」（後書き）

色々な形の性があります。

カミングアウトする方も少ないし、認知度もそんなに高くない。でも、確かに居るんですよね。

まえがきにも書きましたが、この作品はファンタジーでフィクションです。
ですが。

決して、こういった性というものを面白おかしく書き、冒読するような意図のものではございません。
ご承知おき下さいます様、切に願います。

そして、まだまだ続きます。

聖天神殿が遠い……何でだ？――――。

幕間 〱 リクサム 〱 (前書き)

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

幕間　　リクサム　　

「それでは、おやすみなさいませ」

紅潮した頬のまま、必要な事柄だけを述べ大神官たちは貴賓室を出る。

「朝までしっかりと護衛を頼みますぞ」

「は。お任せを」

「何人たりと……例え私や国王どのが来たとしても、朝の七タラン迄は扉を開ける事、一切まかりならん」

「承知致しました」

扉前の護衛二人は、引き締めていた心持ちをさらに引き締めた。その様子を見て頷き、大神官は国王へと言う。

「時間が惜しい。残りの話を執務室で詰めましょう」
「うむ」

手配をしなくてはならない事は多岐多様にある。今夜はきっと、仮眠程度しかとれないだろう。

明日、彼の人は聖天神殿へと赴き儀式をこなす。神殿に滞在するのは三日程度らしい。

らしい、というのは神の一枝である彼の人滞在の延長を望むかどうかで、多少の延期もあるからなのだという。

何にせよ神殿での用向きが終われば、彼人はこのイルフェラム国へと再度来訪するのだ。

神の一枝が降臨した地所は祝福を受けたとして聖地になるなどは当たり前。

今回はそれがこのイルフェラム国の城内であつたのだから、宰相含め大騒ぎとなった。

通例として、神の一枝は降臨後神殿に赴き、その後まずは降臨した国へと赴き暫く生活するのが常となっている。

その為、各国の王城には元々神の一枝用の離宮がそれぞれ用意されている。

歴代の神の一枝の中にはそれ以外の場所で寝食していた神の一枝も居たそうだが、普通各国にあるこの離宮を常の在所とする事が多い。

そしてその離宮は、神の一枝逝去の後、何者も入り込めない様に封印される。

神の一枝の降臨はそう度々あるものではない。

今回の降臨にしても、実に百五十年ぶりのものである。

夕餉の前に大神官が離宮の封印を解いて後、その場を設える為の人員が急ぎ手配されていた。

神の一枝を正式に迎え入れるまでの猶予は最短で三日。

その間に離宮内外の清掃や新しい家具などの設置、そして神の一枝の世話をする人員たちの選抜をしなくてはならない。

執務室で国王と共に職務に励むリクサムは、これからのそういった流れを聞き、少しだけ胸をなでおろした。

自身の生命を救って貰った恩人でもある神の一枝。
まだ出会ってさほど会話もしていないので、相手の本当の気性などは判らない。

けれども、リクサムは彼の人の事を好ましい、と感じた。

自分が、突然今のこの世界から別の世界へと移送され、尚且つその場が牢であったとして。

果たして、あの様に落ち着いていられるだろうか。

冷静で沈着。

思慮深くも、それを誇る様子すらない。

何より相手を思いやる事の出来る優しさに心惹かれた。

視線が、勝手に相手の拳動を追う。

目が、離せない。

彼の人は男性の筈なのに、神の一枝と呼ばれる至高の存在なのに、心が高まるこの気持ちは何だ？

自身の内部にある感情に気づいて驚愕したのは、他ならぬ自身自身。

『そうか……………これが惚れる、という事なのか』

リクサムは、一目惚れというものを初めて知った。

父親である現国王とて正妃であるリクサムの母をとて愛してはいたが、最初は政治がらみでお互いぎくしゃくとしていたと聞く。さらに、国王としての職務として側室も二人ほどいる。

一国の国主として、子作りは義務だ。

そういった思惑の中、どこまでが愛情でどこまでが責務なのか。リクサムはまだ、そういうものに疎かった。

立派に成人男性であるリクサムだが、まだ妻帯はしておらず側室も居ない。

性欲処理だけは専門の者を使つてはいるが、その者に対して愛情は持つていないし相手もそうだ。

立太子を拝受している以上、いずれ妻を娶るだろうが、それに政治が絡まない筈もない。

夕餉に相伴し、僅かながらも彼の人の人となりに触れる。

目の前に居る者は彼の人よりも格下の只人のみ。

上着の着脱など、本来ならこちらが気付き世話をすべきなのに咎める事もせず御自身で行い、しかも適した場所が無い為、それを椅子に掛けさせてしまうという不手際の後、さらに給仕に回る者の食事の心配までさせてしまっている。

気配りというものの見本を体現され、恐縮してしまう。

王が味見と毒見を確認後、彼の人へと出された料理。

それを、彼の人は疑いも躊躇もなく「いただきます」と口へ運んだ。

酒の器を持つ滑らかな動き、馴れた仕草。

ナイフやフォークの使い方も迷わずこなしている姿に、普通の貴族と晩餐をしている心持ちになる。

味への評論は簡潔でそつがない。

何より、美味しそうに食べ進むその顔には笑顔が絶えない。

見ているこちらまで幸せになる……そんな笑みだった。

食事の最中、色々と会話はあった。

けれど、どうしても大神官や国王との会話が中心で、太子であるリクサムは話題が回るまで聞き役に徹するしかなかった。

ようやく語れた幾ばくかの会話。

降臨した時に生命を救ってもらい感謝している事。

知らずとはいえ牢へと移送してしまった事への謝罪。

そして、生命を救ってもらった恩へ対しての言葉。

「王家の誇りにかけて、私自身が出来うる限りの加護をシンディン様へ」

その言葉に彼の人はにこやかに微笑み、言う。

「ありがとう。気持ち嬉しいけど、王家の職務は国民の為にあるものだから、国民優先でね」

至極正論が返され、リクサムは驚嘆する。

平民であれ貴族であれ、王族の加護がつけば誰でも一目置く存在となる。

加護を受けたいが為、様々に画策する者たちの多い中、神職が相手の場合はともかく、王族の加護をこういう形で他者に返されたのは初めてだった。

これが、神の一枝と呼ばれる方々の思慮なのかと心酔してしまう。

食後、再開した大神官との対談で、彼の人には聖天へ意見を言っていた。

絶対神である聖天に間違い等ないと敬神している者が大半なこの世界では、そういう事は思っても口にしないものだ。

不幸な事があったとしても、普通それを聖天の所為にはしない。

それでも、どうしてもやりきれない時は『どうしても聖天様は守り下さらなかったのか』と、心の中でだけは嘆く事をするが、決して口に上らせるような事はしない。

そのような事は聖天に対して不敬だと、皆そう思っているから。

聖天を疑ってはならない。

それが小さな頃から教えられる、この世界の理だから。

それを打ち破る様な口上の数々に、リクサムの上に尊崇が生まれる。

彼の人湯を使う為に自分の視線から消える。

たかがそれだけの事なのに、心が空になる。

リクサムの上の視線も心も、既に彼の人の膚となっていた。

自分の側近であるダレスが、彼の人が女性であると告げ、その裸体を見てしまったと告げた時。

リクサムの中に戦慄が走る。

それは、今まで何不自由なく暮らしていたリクサムの、初めての嫉妬だった。

感情が揺れてしまい、口からは現状を説明する言葉しか出てこない。

もし、この側近に極刑が命じられたなら、喜んで自分が執行してやろうとさえ思ってしまう。

そんな自分の浅ましき感情さえ聖天に見抜かれていたのか、彼の人はその件を不問にする。

己の心のやましさに恥ずかしくなり、一言も話せない。

その後、彼の人の口からその不思議な身体を説明され、男女どちらとも交わる事が可能だという事実を知り、歓喜に震えた。

神々しさと聖性と、そしてその色香に、男としての欲望が疼く。耐えるだけで精いっぱいだった。

律せぬ事が出来ぬ以上、自身の心も身体もまだ未熟。
そんな自分等、彼の人の目に止まらなくて当然だろう。
それでも。

『また、お逢い出来る。今は、それだけでも十分だ』

リクサムは数日後再来国する彼の人に不自由のない様、てきばきと手配を始めた。

幕間 〵 リクサム 〵 (後書き)

主人公、神殿に早く行かせたいんだけど。

太子が「出番少ない!」とごねました(笑)

こうして見ると、なだれ込むように堕ちてるなあ……

第 10 話 天頂の夢 こいねがう」 1 」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 10 話 天頂の夢 こいねがう」 1」

部屋から大神官達が退出した後、晶貴は「あ」と小さく声を上げる。

『しまったな……先刻の騒ぎで忘れてた』

湯から上がった後で、それまで着ていた服を洗淨して貰う約束になっていたが、ごたごたとしていてつい忘れてしまっていた。

『ま、いつか。今日はもう着ないんだし』

晶貴は天蓋つきのベッドの上へごろりと転がり、おさらいの様にこれまでであった色々な事を思い出す。

突然投げ込まれた別の世界。

まずは驚いた。

小説や漫画じゃあるまいし、まさか自分にそういう経験が降って湧くとは思ってなかったから。

何だか安心する、この聖霊といわれるふわふわとした光球たちが居なければ、不安で押しつぶされていたかもしれない。

寝て、起きて。

初めて見るこの世界の人達に色々と説明を受けた。

もう、元の世界には戻れないのだと知った。

この世界で、生きるしかないのだと覚悟した。
けれど。

晶貴は、ぼそりと呟く。

「いつまでも、ついてまわるか、この孤独」

つい五七五の韻を踏んでしまった事も含め、自嘲する。

生まれてどの位経って、こういう身体だと知ったのだろうか。

晶貴は生後半年程で実親から捨てられた。

本当は、両性具有という身体の所為で捨てられたのではないのか
もしれない。

若すぎて、とか。お金がなくて、とか。自信がなくて、とか。
探そうと思えば理由は幾つでもあるから。

役所前に毛布でくるまれ放置されていたその赤子には、ただの一
筆も添えられてなかったという。

着けている服は全てが古着。

その中のズボンに書いてあった名が晶貴。

上着に書いてあった名が新田。

それが、今持っている晶貴の姓名の元だ。

中学の頃に聞いた話では、特徴のある身体をしているので……と。
当時の役所が病院へ確認依頼したのだが「新田晶貴」らしい新生児
は存在しなかったのだという。

その為、もしかすると病院など使わずに、個人で出産したのかも
しれないとさえ言われた。

もしも、要らない子だったとしても、墮胎などせず生んでくれた
事には感謝している。

捨てられた事にしても、生後すぐというわけではなく暫く経ってか
らの事なので、なんらかの事情があったのかもしれない、と。そう
思いたい。

けれど。

名すらつけて貰えてなかったのかもしれない、という現実が晶貴
を苛む。

その後、勿論施設へと入れられた。

普通、物心など付かない赤子は養子縁組されやすい。

けれども、この身体の事を承知で養子に迎えようという奇特な人
物は現れなかった。

男女の別がとれない身体を不憫ととらえたのか、戸籍登録は女と
なっている。

成長すれば学校の授業、団体生活などで裸になる事は良くある事。
少しでも肌の露出が少ない方にと、誰かが考えてくれたのだろう
とは思う。

四歳の頃、引き取り手が現れた。
養子縁組されたわけではない。

特異体質の為、保護と健康観察をするという名目で、とある病院へと引き取られた。

観察と称して、色々な事があつた。

恥ずかしくて辛くて、それでも逃げる場所などなくて。義務教育が終わり、その卒業後に病院を逃げ出した。

中卒ではなかなか良い職などない。

性の問題も、どこにでもついて回る。

色々な職を転々とし、色々な街を転々とした。

資格が欲しいので夜学にも通った。

手当たり次第に知識を呑み込み、ようやくいい会社に就職できた。

これから自分の道をゆつくりと探そうと、そう思っていた矢先、この世界へ投げ込まれた。

元の世界で。

何の神に嫌われたのか、一般ではない身体に生まれ落ちた。

人からも世間からも、排他され異端視された。

そして、この世界へと運ばれ。

とうとう、それまで居た世界からも排他されたのか……と、そう思うしかなかった。

だがまだ、期待はあった。

異世界だと知って、もしかするとこの世界ではこういう身体がごく当たり前にあって、自分も普通に生活できるかも知れない……と、甘い夢を見た。

夢は、夢でしかなかった。

至高の存在、金色の瞳を持つ神の一枝。

現在この世界に居る神の一枝は自分ただ一人だと教えられた。

それでも、晶貴は思う。

『諦めて……たまるか！』

金の瞳に宿る、細い赤。

強い強い、意志の力。

『これまでだつて諦めずに進んだから何とかなった。過去の全てが今の自分の肥やし。どんな事にでも小さな幸せや希望がある。それを積み重ねてきたから今のこの自分があるんだ。どれが欠けても今の自分には成り得ない。私は私だ！ 胸を張れ！ そして……人生の最期には、必ず満足して死ぬんだ！』

むん、と。自分に覇気を入れ、晶貴は頷く。

時刻板を見れば、もう二十五の部分に色がついている。

何は無くとも身体が資本。

晶貴はゆっくりと深呼吸し、心をなだらかにする。

ベッドの布団はふかふかだ。

きつと良い夢が見られるだろう。

「おやすみなさい」

辺りに漂う聖霊たちに眩き、晶貴は就寝した。

前日にしっかりと寝ていた所為か、起床したのはまだ六タランを少し回った頃合いだった。

二度寝をする程眠くないので、眠気を飛ばす為に晶貴は朝風呂へと向かう。

脱衣所の籠の中には脱いだ服が昨夜のまま、ある。

用意されていた肌着にも沢山の予備がある。

それを確認し、湯殿を覗く。

いつでも使えるようにしておいてほしいという晶貴の希望で、湯は掛け流し状態になっている。

聞けばこの仕組みは何かの機械とかではなく、やはり魔術によるものだとなった。

色々と覚える事が多そうだ。

晶貴はそれらを楽しみとしながら湯を使う。

「はー……気持ちいいー」

身体を温め、顔も洗い、すっきりとした晶貴は新しい肌着をつけ、もう一度夜着を着た。

部屋の方へと戻り時刻板を見れば、あと少しで約束の七タランになる。

丁度良い頃合いだった。

時刻板より正確なんじゃないかというタイミングで扉が叩かれる。

「シンデイン様、お起きでございますか？」

大神官の声だ。

「はい。どうぞ」

晶貴の言葉に昨夜と同じ顔ぶれが揃う。

「お早うございます。よく御休みになれましたか？」

「たっぷり寝たよ」

明るく笑う晶貴からは、石鹼のよい香りがする。

「昨夜お話致しました通り、御支度が出来次第この部屋から転移の陣にて、この国の神殿内へ参ります。その後、神殿内の移送陣を使い聖天神殿へと参ります。朝餉はそれからとなりますが、宜しいでしょうか？」

話の内容は昨夜聞いた通りだったので晶貴は頷く。

「では、御支度なのですが」

大神官が言葉を発している途中で晶貴が声を上げる。

「あー、そうそう！ 騎士のダレス」

「はい！」

突然呼ばれ、背筋を正すダレス。

晶貴は笑顔のまま言う。

「昨夜、湯を使う前に言ってたアレ。見せて」

「……あ」

どうやらダレスの方も、昨夜は気が動転していてすっかり忘れていたらしかった。

「何の事だ？ ダレス」

リクサムが怪訝な顔で尋ねる。

ダレスは神妙な顔で答えた。

「シンディン様のお召し物を水術にて洗浄する約束をしておりました」

晶貴がダレスの言葉を追うように言う。

「場所も丁度いい事に脱衣所だ。すぐに着替えないといけないからな。頼める？ ダレス」

「はい！」

快活な返答の後、ダレスと晶貴は脱衣所へと向かった。
少しばかりリクサムが不満顔でいた事を、大神官だけが気付いていた。

「何か、ございましたか？」

そう声をかけられ、振り向いたリクサムが平時の顔へと戻る。

「いや。少し……考え事をしていた」

「それは、私がお手伝いできる内容ですか？」

「個人的なものだからな。手伝いは無用だ……」

そこまで言つて、ふと視線を大神官へと正すリクサム。

「大神官どのにお訊きたい」

「何ですか？ お答えできるものであれば良いのですが」

「私は召喚の儀で【盾】を欲した。……【大切なものを護れる盾】を」

「存じております」

リクサムが召喚の儀で望んだのは【盾】。

けれども、心の中でさえはつきりとはカタチになっていない【盾】だった。

リクサムにはまだ、護りたい物も護りたい者もない。

太子という位に居る為、大抵の物は手に入る。

おまけに大抵の者は自分より下の位なので、逆らう者の方が少ない。

国を治める者として。

物品も人も、おのれ一人が占めて良いものではない事を小さな頃

から教えられてきた。

そんな中、自分個人が大切なものとは何なのか、と問われると判らない。

現国王の様に、いづれは妻となる者が大切になるのかもしれない。或いはこの自国が大切な物になるのかもしれない。

そんな曖昧な想いは、これまで固まる事はなかった。その心が、たったひとりの存在で変わろうとしている。

「召喚されるものは物品。だが、必要な付加によって様々な形態を取る為、召喚時に望んだ想像とは違う形のも物が貸与される場合もある……と聞いていたが、合ってるか？」

以前自分が行った召喚の儀での説明を、もう一度確認するリクサムに大神官は頷く。

「左様ですな。過去にも【剣】を望んだ者が【杖】を。【工具】を望んだ者が【石】を賜るなどという事が多々ございます」

リクサムは軽く頷き、視線を脱衣所の方へと向ける。

「大神官どの」

「はい」

「彼の人は、この世界と人々を護る【盾】なのだ……そんな彼の人の【盾】に、私はなれるだろうか？」

リクサムの言葉に少しだけ目を見開いた大神官だったが、すぐにそれは優しい眼差しへと変わる。

「聖天様の御心に適えば……それも可能でしょう。精進なさいませ」
「そうか……そうだな」

リクサムと大神官の会話を傍で聞いていた国王の目も、優しく細められていた。

小さな頃から利発で、学にも武にも真面目に打ち込んでいたこの息子は、立太子後もその真面目さを崩さずにいた。

ある意味理想の後継者ではあったが、ひとつだけ不足がちに見えるたのが色恋への関心。

肉親への愛情は親としてひしひしと感じるものがあるし、臣下たちへの対応にもきちんと感情を使い分けている様子に見られる。

ただ、それら全てに男女の別がなかった。

武に長ける女性も居れば、経理に長ける女性も居る。

針仕事に秀でた男性も居れば、育児に長けた男性も居る。

その事実を我がイルフェラム国では重用する。

それ故に、男女の別なく才のある者が上に立つという事を許すわが国では要職に女性も多い。

そんな中で、息子は相手を異性として見ているのかどうか、定かではない。

とりあえず性的欲求はあるようなので、専門の者の中でも見目麗しい者を選び与えた。

だが、その職務の者に問い正しても「こちらを色目で見た事などございません。行為が終われば「退出してよし」ですから」との事。

「好きな女子はいないのか？」と、太子本人に訊いてみた事もある。

が、返ってきた返答は「今現在取り立てて好きと言える様な女性はありません」というもの。

おまけに質問の意図を別に解釈したのか「后候補でも決まりましたか？」ときた。

「父上の期待に適う様であればどなたでも構いません。ああ……ですが、あまりお小さい方とか、極端に年齢の離れている方は少しご遠慮願いたいです」

とどめにそう、はにかむように言われ、頷くしかなかった。

何が息子をそうさせているのかも判らぬまま、今日まできた。

それが、神の一枝さまが降臨されて、変わった。

何が、どう。とは上手く言えない。

強いて言えば、空気が変わった……とでも言おうか。

神の一枝さまを見つめる息子の瞳に、常とは違う感情が浮かんでいる事に気付いた。

まだ、燃え上っても居ない、火種の様な炎。

『だが、許せ……息子よ』

国王は、口元に浮かべている笑みとは逆に、憂いを帯びたその瞳を一度閉じる。

色恋に疎かった息子が、本当に愛する人を見つけたのなら、相手の身分はさておいても傍に置いてやるつもりだった。

相手のひととなりが良いければ、後見を買って出てくれる者もあるう。

身分を上げる方法など、幾らでもある。

確かに王族として子作りは義務だ。

種を持つ男はひとりなのだから、胎内でそれを育む相手は多いに

越したことはない。
けれども。

『王族とはいえ、我らは只人。……分を超え過ぎているその想いに……儂は応えてやれぬ』

過去の歴史を紐といても、只人と神の一枝さまとの恋愛は色々な形で残されている。

相手も様々で、一人の武人にのみ愛を示した方もあれば、数え切れないほどの愛妾を作られた方も居る。

そして、常に在居する場所が王宮内の離宮な所為なのか、それとも子を成す事の出来ない御仁であればこそそのものなのか、王族とそういう関係を成した方も多々あるのだ。

過去に実例があるのだから良いだろうと、そう考えるのは容易いけれども。

過去の実例があるからこそ、素直に賛同できない。

それが国王、ナカラ・トリリユース・イルフェラムの素直な想いであつた。

何故なら。

神の一枝さまと肉体関係を持つに至った王族の治める国と、神の一枝さまに選ばれなかった王族の治める国とで、どうしても争いが起こるのだから。

勿論、神の体現である神の一枝さまに選ばれるというそれそのものが、神の意思なのだということは皆、理解している。

だから、神の一枝さまが健勝である時には多少の小競り合い程度で済む。

けれども、神の一枝さまが逝去された後、それまでの憤りが吹き出してしまふ場合の何と多い事か。

それは今日までの歴史が物語っている事。

ここ百年は大きな戦もなく、国家間の力関係は均衡を保っている。他国間の争いに巻き込まれるというのであれば、まだ仕方のない事と諦めもつく。

だが、自国が火種を作る……自国の、それも王族が火種になるなど許されない。

複雑な国王の胸中をおもんばかってか、それとも彼も同じ考えだったのか。

ルドルフが国王にだけ聞こえる程度の声で呟く。

「いくら恋に免疫が少なかったとはいえ、かつとびすぎだろう……分をわきまえない想いは、その身を傷つけるだけだろうに……」

国王の乳兄弟として、ルドルフはいつも国王の傍らに居た。

リクサムが王妃のお腹に居る頃から、大切にずっと見守っているのだ。

幸せに、なつてほしい。

なつて欲しいのに……どうして、選んではいけない相手を選ぶ。溜息まじりの言葉には、実親と同じ程の想いが詰まっていた。

リクサムはそんな二人の胸中など考える事もなく、脱衣所の扉を

見つめている。

と。

突然、聖霊たちの動きが活発になった。

室内に居た聖霊の約半数が壁を突き抜けて湯殿方面へと向かっていったのだ。

何事か、と思う間もなく湯殿から神気を感じる。

そしてほぼ、その神気と同時に脱衣所の扉が開かれ、ダレスと晶貴が出てくる。

扉を開け、晶貴がその横を通る間、ダレスの視線はずっと湯殿の方を凝視していた。

「手早くしたつもりだったけど、待たせたかな？」

この世界へ来た時の姿へと着替えた晶貴が、訝しい顔をしている大神官達に訊く。

大神官は、聖霊たちの動きに害意がない事を感じ、落ち着いて言う。

「何か、不都合でもございましたか？」

「ん？ ああ、こつちの子たちも動いちゃったのか」

くすつと笑う晶貴。

「大した事じゃあない。ダレスから聖霊を使う洗浄というのを説明付きで見せて貰って、あらかた理屈が判ったんで、その応用をしてみただけだ」

ダレスの説明した水術というものは実にシンプルなものだった。方法は、水質系の聖霊を呼び集め、それらに活動させる範囲と活動内容を指定する、というもの。

範囲は籠に入れた晶貴の服全部と言う事だった為「水にぬれると困るものの中にあるんだが？」と聞けば、一応それを取り出し、出て欲しいとの事。

取り出したのは財布とポケットティッシュ、あと自宅の鍵と携帯電話。

聞けば、見知っている物品であれば、服から取り出さずそのままでも、活動除外という指定で術を行使できるのだとか。

ともかくもその後、すぐに術は施行され、その実態を見た晶貴は「ふむ」と顎に手を添える。

聖霊が服を通り抜けながらそれに付着している汚れや臭いを自身へと付着させ、その後瞬時に汚れと臭いを分解して清涼なものへと変えるている。

『まるで洗濯洗剤のアレだな。汚れを浮かして取る、とかいう……後の分解のあの雰囲気とこの独特の二オイは……オゾンみたいなものか。なるほどなるほど』

納得し、その後洗淨の終わった服へと着替えながら晶貴はダレスへと訊く。

ダレスは失礼のない様、晶貴に背を向けたままで応えた。

聞いた話で分かったのは、この手の術で一番難しいのは「必要な

種類の聖霊をどれくらい集める事が出来るか」という事。

次いで難しいのが「聖霊をどの程度制御できるか」という事らしい。

行使する術の内容に応じて、必要なだけの聖霊。

そして、それらに正確な指示が出せるだけの能力……神気の制御というものが必要なのだと。

晶貴はそれらを、何となくだけでも理解した。

一番難しいと言われている聖霊を集める力というものを、すでに自分は持っているらしい。

いや、これだけ周囲にわらわらと居る状態でそれを疑っても仕方がない。

制御にしても同じだ。

自分の感情に対してだけでもあれほど正確に動くのだから、目的がある場合、指示を明確にすればいいだけだろう。

そう考え、晶貴は自分の意思でそれを聖霊に命じてみたのである。

「結構な数の聖霊が動きましたからな。何を成されたのか知りたいものです」

大神官の言葉に晶貴は苦笑する。

「範囲が少し広がったとはいえ、ちょっと集め過ぎたかもしれない……お、戻ってきた戻ってきた。仕事早いねえ、御苦労さま」

窓の方や湯殿の方からふわふわと室内へ戻ってきた聖霊を労う晶貴。

そして、内容を口にする。

「清掃をする者の仕事を取って悪いとは思ったけど。湯殿の清掃と浄化を命じた。……湯船の湯も、使用した石鹸も、外部へ流された排水も含めて全てを浄化させてもらった」

にこやかに笑ってはいるが、瞳の奥にきちんと思惑が垣間見える。それに気付いた大神官は再び訊く。

「何故、そのような事をされようと思われましたのか、お教え願えますかな？」

自分が使用した後、自分で清掃するという感性は間違っていない。

けれども、清掃した範囲が広すぎる事に違和感を感じる。

その質問は国王達も尋ねたいと思っていた事だった。

晶貴は皆の顔を一巡し、答える。

「この世界は唯一神聖天を信奉している。貴方方から聞いた話で、それが歴史も長く人の心にも深い影響を与えている信仰である事を感じた。そんな神の体現と呼ばれる神の一枝……というのが私の事らしい。その神の一枝が使った……浸かった湯、だ」

軽く笑みを強め、ふふ、と声を漏らす。

「どの世界にも、変わった趣味をしている者は居る。有り難い、希少価値のある物品として……ましてや「神の一枝の聖水」として販売するものが居ないとも限らない。それを阻止させてもらった」

啞然とする国王達。

「いや、そんな顔するけど。聖遺物の収集家とか、当たり前になりそうだからさ。死んだ後の事だったらまだしも、生きてる間に自分の煮汁が売買されるのはちょっと御免こうむりたい」

国王やりクサム、ダレスは考えもしなかった事だが、ルドルフと大神官は、ああ、と納得した。

「確かに、居ますねえ……そういうヘンな趣味もってる方々」

「左様ですな。妄信ともいえる収集家が、存在している事は確かです」

「だろ？ おまけにまだ、今現在の私は完全に神の一枝として告示されてもいない。そんな中で告示前にそういうものが外部に出回れば、この国に対して迷惑にも成り得る」

はっ、とする国王。

言われて初めて気がついた。

確かにそうだ。

もし、神の一枝さま降臨の告示前に、そのようなものが出回ったとしたら。

いくら降臨地が城内であったと後日知れても、様々な醜聞をされるのは必然。

本来であれば国主である自分が気付かねばならぬ事を、あっさりと、至極当然の様にしてのけた晶貴に心の中で再度陳謝しつつ、その聡明さと気遣いにさらに心酔してしまう。

国王は、ゆっくりとその頭を下げる。

「お心遣いに、心の奥より感謝申し上げまする」

「や、自分が嫌だったからしただけだから、感謝とかなくていいって」

晶貴はそう言つと神官に言つ。

「時間とか、いいの？」

「……シンディン様が宜しいのであれば、いつでも」

「うん。着替えたし、もう何時でもいいよ」

晶貴に軽く頭を下げ、国王達に視線を流す。

国王達は無言で頷いた。

「それでは、イルフェラム国の主神殿へ転移致します。シンディン様、御目を」

「ん。わかった」

昨日の様に目蓋を閉じる晶貴。

それを確認し、大神官は転移の陣を作動させた。
白の光が皆を包む。

「到着にございます」

大神官の声に目蓋を開く。

大理石の様になだらかな模様のある石で作られている広間だった。高い天井には窓がある様で、外の光が壁に反射し、床へと優しく映しこまれている。

大神官の案内で、その広間から出て回廊沿いに少しばかり歩く。こういう場所での決まり事なのか、国王たちも大神官も無言だったので、晶貴も何も言わなかった。

金色の模様のある大きな扉の前に着いた。

扉の左右に二人、頭を下けている者たちが居た。けれど無言だけでなく、頭からすっぽりと隠れるローブ身につけている為、性別すら判らない。

「参る」

大神官の一言で、内から扉が開かれる。

中は先程よりもまだ広い、大広間だった。

大広間の中央に数段高い場所がある。

どうやらそれが、聖天神殿への専用移送陣らしい。

大神官と晶貴の二人だけがその陣の上に立つ。

国王達は陣に抵触しない様、少し離れた場所で見送るようだ。

「これより聖天神殿へと参ります。よろしいですか？」
「……」

晶貴は大神官に訊かれ、見送りの国王達を再度見る。
につこりとした笑顔を彼らへと向ける。

「食事、楽しかったです。……また、来ます」

晶貴の言葉に、国王以下それぞれが頭を下げる。

「いつなりと、御歓待申し上げます」

この国の代表たる者の言葉を聞き、晶貴は大神官へ視線を戻す。
こくり、と軽い頷きを見、大神官も頷く。

「では、参ります」
「はい」

聞こえたのは、このふた言だけ。
陣が白く輝きその勢いをすぐに消す。

頭を上げた国王達の前に、すでに二人の姿はない。
大きく息を吐いたのはルドルフだった。

「さて、これからが本番。頑張りましょー」

その軽い言い方に国王が呆れる。

「そなたは樂觀しすぎだ」

時間としては短いが、出会って語らい、晶貴の人柄に少しだけ触れた。

それから掴める事もある。

彼の方はきつと、必要のない言葉は口にしないだろう。

国王はそう感じていた。

晶貴は先程「また来ます」と口にした。

であれば、神殿での用向きが終わればすぐに来国する可能性が高い。

最短の方向で進めてはいるが、もっと早めにした方が安心かもしれない。

「急ぎ、神の一枝さま御来国に備えるぞ」

「はい!」「」

国王は姿勢を正し、リクサム達に告げ。
リクサム達もそれに応じる。

大広間より立ち去る前、ほんの一瞬だけリクサムが移送陣を振り返る。

晶貴から声をかけられたのは国王のみであった為、リクサムにこの場での発言権はなかった。

『来国。心より、お待ち申し上げます』

伝える事の出来なかった、その言葉を、心の中で申し立てる。
頭を下げる代わりの、僅かな瞑目。
歩みは止めず、国王の後を追う。

金色の模様の扉は、音もなく閉じられた。

第 10 話

天頂の夢 こいねがう」

1 「（後書き）

ようやく聖天神殿へ出発してくれた……

第 11 話 天頂の夢 こいねがう」 2 」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 11 話 天頂の夢 こいねがう」 2」

目蓋の外にあった白い光が、その輝きを失う。
晶貴は静かに目蓋を開く。

そこは、つい先程まで居たイルフェラム国主神殿の移送陣がある
大広間より、ふた周りは広い場所だった。

第一印象は「広い」というもの。

そして……次に受けた印象は「白」だった。

壁や柱だけではなく床や天井も、僅かに他の色を含んでいるが白
が基調となっている。

そして、その白をさらに強調するかのような白たちが、居た。

「ようこそ、聖天神殿へ」

大神官と同じ様な仕立ての青白い服。

「いらせられませ、神の一枝さま」

大神官と同じ様な、白っぽい髪。

「初めまして、聖天樹閣下。どうぞこちらへ」

「上着はわたくしめが御預かりしましょう」

よく見ればその、白い髪に個々人で違う色が垣間見える。

「少し段差がございます。お気を付け下さいませ」

ああ、そうだ。

大神官の髪も、銀色っぽい髪が交ざっているのに先刻気付いたばかりだった。

「お待ち申しておりました、ささ、こちらの席に」

柔らかな雰囲気に取り込まれそうになるのを、晶貴は寸前で抑えた。

目の前にあるのは軽食が並べられている食卓。

その周りで、かいがいしく世話を焼く白い者たちが、六人。

何かが、変だ。

何故、指示されるままに身体が動く？

自分は、こんなに頭の回転が鈍かったろうか？

そしてこの、身体に纏わりつく甘ったるいモノは何なのだろう？

周囲はこんなに白で溢れているのに、何故黒い圧迫感がある？

優しげなのに、身体の内まで浸食されそうな、そんな感触。

我慢は出来るけれど、物凄く気持ちが悪い。

何となく判った。

これは……聖霊達と同じモノ。

けれども、乗せられている感情が違う。

何かに媚びる様な、毒々しく穢れたモノ。

気付けば、これ以上の我慢は要らない。

晶貴は勧められた椅子に座る前に、この甘ったるさに染まった様な神気を自身の神気で弾く。

大広間に充滿していた粘っこい神気は跡形もなく散り、清涼な神気が辺りを染め直す。

途端に、六人の白い者たちは沈黙した。

にこやかな表情で、一斉に大神官を見つめている。

晶貴も、後ろに立つ大神官を振り返り、見た。

大神官は……指先で眉間のあたりを押さえていた。

「大神官？」

晶貴の語り掛けに視線を晶貴へ向け、少しだけ苦笑した大神官の口が開く。

「申し訳ございませんシンディン様。この者達にはあとできつく仕置きを致しますので、どうか御気分を害されませぬ様」

大神官のその言葉に、あの甘ったる気な神気が、この六人の作り出していたものなのだと知る。

仕置きをするという事であるなら、あの仕業は大神官の指示ではないという事だろう。

眉間を抑え、苦笑していた大神官の姿。

そして、こういう状況なのに笑みを浮かべている当事者達。

それら全てを整理し、晶貴は「なるほど」と頷いた。

「何をかは判らないが……何かを試したかった……いや、何かを確認したかったのかな？ 貴方方は」

晶貴の言葉に、六人ともが腰を折り礼と成す。

「昔より伝わっている習わしにございます」

歳は五十くらいだろうか、肩までしかない白い髪に少しだけ赤毛が交じっている者が言う。

先程、一番最初に声を掛けてきた女性だ。

「詳しくは後で説明を致します故。まずは朝餉をお召し上がりくださいませ」

大神官を見れば、頷きが返された。

その様子に、先程の様な事はこの場では起きないのだろうと判断して、晶貴はようやく椅子へと座る。

目の前に並んでいる食べ物、自分の見知っている食物の様相にとても近かった。

ドイツパンやロールパン、クロワッサンのようなもの。

スクランブルエッグに目玉焼き、入れ物に盛られているのはゆで卵のようだ。

生野菜のサラダと温野菜らしきもの。

バターやチーズ、ジャムらしきものもある。

果物もたくさん盛られていた。

それらを不思議そうに眺めていると、金色の交じる長い白髪の男性が声を掛けてくる。

先程の女性と比べると若い。

イルフェラム国に居た騎士のドレスより少し上くらいだろうか。

二番目に挨拶してきた者だったので、晶貴は先程の挨拶は年齢順だったのだろうかと思案する。

「記録にある朝餉の中でも「一番一般的」とされている食事を用意させて頂きましたが……如何でしょうか？ ご存じのものがあれば良いのですが……」

「記録？」

「はい。過去の神の一枝さま方の記録でございます」

晶貴の問いに頷きながら彼は言う。

「歴代の神の一枝さま方は、こことは生活も文化も異なる別の世界から降臨された方ばかりでございます。それ故、特に食物に関して、それまで食されていたものを懐かしがられる方も多く。こちらの世界で似た食材を使い、あるいは食材を開発し、それらに近い料理を作り上げた次第にございます。例えば……こちらは「ぶろつと」というものだそうで、こちらは「くらそん」というものでございます」

指し示したものはドイツパンとクロワッサンである。

確かにドイツ語でパンはブロートだし、クロワッサンは日本語読みなので、英語的に言えばクレッソンというのが近い発音になる。

『歴代の神の一枝たちが残した、遺産のようなものか……』

昨夜の夕餉で出されたものが、この世界での料理なのだろう。

この世界の一般人に食されているかどうかはともかく、確かに美味しい料理だった。

勿論、身分の高いもの達が食べるものだから、食材の質や料理人の腕は上だろう。

だが食材の呼び名も味も、自分には見知らぬものだった。

こうして、元の世界の料理を見て初めて理解できた。

郷愁。

生まれた地から、遠く離れてしまって感じるそれを、今ようやく晶貴は感じていた。

「いただきます」

挨拶の後、晶貴はゆっくりとクロワッサンへ手を伸ばす。

指でちぎり、ひとくち口へ入れ、噛む。

よく知ったバターの香りと焼けた生地の特徴の触感と甘さが、口腔を満たす。

たったそれだけの事なのに、涙が出そうになる。

『過去の、神の一枝たちに感謝する……次代へ遺せるものも、ある

んだな……」

前の世界と同じ物が食べたい…… たったそれだけの事。

けれども、そんな事すら、こちらの世界では簡単には出来なかっただろう。

そういった知識や経験が豊富な神の一枝であれば、本人が作り、その味を模す事も可能だ。

けれども昨夜聞いた五歳くらいの子供に、それが出来るとは思えない。

食材も違えば調理も違う。

そんな中「あんなのが食べたい！ こんなのが食べたい！」とその表現だけで、果たして同じ物が作れるのかどうか。

「記録」とやらにある、ただの料理レシピが料理人の手助けをし、神の一枝の心を慰める手助けになっていたのだらうと、容易に想像できる。

「……美味しい、な」

軽く笑みを浮かべる晶貴の金の瞳は、銀色の波を含ませながら輝き揺れる。

その様子に、皆がほっとした表情を見せた。

時折、食品の呼び名を確認しつつ食べすすみ、コーヒーに近い飲み物を飲み終え、晶貴はカップを置いた。

「ごちそうさまでした」

食事を終え、一息つく。

そして改めて周囲を見た。

未だ、観察に近い視線で見つめている彼らに新鮮さを感じる。

先程まで居たイルフェラム国の城内で出会ったのは、大神官を除けば六人。

そのうち警備担当の者が二人ほど居たが、彼らとは語っていないので除くとして、実際に関連があったのは四人と言う事になる。

大神官は、晶貴を神の一枝という存在として認識し、それ相応の言動を取っていたように思える。

応対としては、突然の現象で躊躇しているこちらの心理を考慮しつつ、自身の言動を決めている感じに見えた。

あとの四人から感じたのは、尊崇と畏怖というのが一番近いだろう。

神の一枝という存在が常在しているものでない所為か、彼らからは、かなりの戸惑いが見受けられた。

だが、この目の前の者たちの視線は、その双方のどちらとも違う。珍しいものを面白がっている様な雰囲気もない。

ただ、何かを観察しているように感じる。

そんな彼らにかけ言葉を探していると、大神官が先に口を開いた。

「お前達。いい加減に分析を止めなさい」

言われた六人はにこにこしながら大神官に言う。

「だって、なあ？」

「一生に一度、お目にかかれるかどうかの御方でしょう？」

「大神官様は直視の権利を持ってらっしゃるから、解らないんですよ」

「試行と分析は、わたくしどもの権利でございましょう？」

「あの場での試行を通過されたからには、分析も当然ではないかと」
「それこそが、我らの職務では？」

口々に返ってくる返答を聞き、大神官は再度溜息をつく。

現状を観察し楽しんでいるのは晶貴も同じだったが、さすがに意味不明の部分は少なくしたので口を挟む事にした。

「とりあえず、説明を求める。まず、先刻のあの粘っこいモノは何の為だ？……まさか、ああいうモノで神の一枝とやらを呑み込んで懐柔し、都合のいい操り人形の様に仕立て上げるつもりじゃあないよな？」

そう。

気になったのは、あの一種独特の感覚。

自分の周りに絡まる様にしなり、自分の思考を鈍らせたそれに、晶貴は嫌な想像を脳裏に浮かべる。

過去に居たという五歳の神の一枝。

そんな幼い者が、あの神気に対抗できるだろうか？

疑惑の眼差しを向けられた六人は、自分達に向けられた神気が警戒を帯びている事を感じ、少しだけ焦った。

「質疑、ごもつともでございます……が。あの習わし……」「試行」は、神の一枝さまであれば必ず消せるものにございます」

「過去に居たという、五歳の幼子でも……か？」

「はい。勿論でございます！」

力強く説明される。

「先程の粘り気を帯びた神気は、神の一枝さまの感情を揺さぶる為のもの。先程おっしゃられた齡五歳の神の一枝さまは、僅か半テシにも満たぬ早さで神気を散らせたそうでございます」

半テシといえば、約三十秒程。

では、この場に着くまで数分をかけた自分は鈍いのだろうか？と、考えていると別の声上がる。

「本物の神の一枝さまは神気の塊と同じ。感情の殆どを力に変える事が出来ます。ですから、齡五歳の幼い神の一枝さまは、あの「試行」をすぐに「嫌」という感情で散らせたんです」

さらに別からも説明が入る。

「我らは聖天様から「試行」という術を使う事を許されています。ですが、我らにはそれが実際にどのようなものか、この身では感じられないのです。「記録」に記されている神の一枝さまからの説明は、それが「気持ち悪いモノ」なのだという事のみ」

確かに、気持ちの悪いものだった。

「その「気持ち悪さ」というものに抵抗できる時間が長い神の一枝さま程、そのお力も強いのだというのがこれまでの「記録」にもございます。そして歴代の神の一枝さまの中で、この席に辿り着くまでの「試行」を散らさずに来れたのは、ほんの数人だとも聞き及んでおります」

説明を聞き、晶貴は少しだけ思考の海に沈む。

神の一枝は神の体現。そう言われていると聞いた。

神殿に居る神官という職務は神の意思を聞き、神の意思を伝える

者たちだと理解している。

そんな者達が「神を試す」事の意味は？

力を測るだけの目的で、ああいう試しをするものだろうか？

その事を考え、思った事を口にする晶貴。

「現われた神の一枝に対し、まずは大神官がその人物の様相や性分を確認する事が「直視」……そして、その「直視」が過誤でないと再確認する為に行われるのが「試行」なのだと判断したが。それを確定するには確認がひとつある」

周りに居る者達は、じつと晶貴の言葉を聞いている。

「ここまでしないと相手が神の一枝だという確信に至らないという事は……過去に、ニセモノの神の一枝というものが存在したという事か？」

大神官含め、皆の目が見開かれる。

「先程の説明の中での「本物の神の一枝は神気の塊と同じ」という言葉を聞いていなかったら、まだ迷う内容のものだったが。その顔では「居た」な？」

「……恐れ入りました」

七人全員の頭が下げられ、腰が折られる。

晶貴は嘆息しつつ訊く。

「ニセモノが居たのであれば、一応訊いておきたい。その人は、どうなった？」

問いに応えたのは大神官だった。

「相応の罰が与えられたとの事です」

「相応、とは？」

「何かの策略で使役されただけの者は、それよりの生涯を神への奉仕にて償ったのだと。そして、自身の傲慢なる想いから、望んで神を謀ろうとした者は聖天様より死を賜ったと。そう聞き及んでおります」

「きちんと調べた上で処罰しているって事？」

「調べる事も必ず致しますが、その殆どは聖天様が既決なさっておりますので。過去に一度、我ら只人によって死が妥当と判じた者が、聖天様の加護で死を免れたという記録もございます」

「なるほど」

いち生物として、人は集団生活を行うものが圧倒的多数となる。衣食住すべて、己一人で賄える人間はそうそういないものだ。

集団生活を行う以上、守らねばならぬ制約や規律は必ず必要なものとなる。

その中でどの集団でも一番問題になるのが、人の生死を人が担うというものだろう。

罪の為に殺される者も居れば、戦争などで罪もなく殺される者も

居る。

そもそも、罪の軽重など個人によって違う。

個人の価値観は、その個人にしか判らないものだ。

花を一本手折って、その生命を奪ったと嘆く者も居れば、何十人何百人の人間を殺しても、その辺りの砂粒ほどの価値を見出さない者も居る。

それら全ての人の心の機微を、同じく人である者達が理解する事が出来るとは、とても思えない。

『「考える」という行動が、どれだけ大切かを問われているようなものだ……』

この世界の神は、人の成長を望むという。

その神の在り方としては、十分に考えられる思考だった。

判断は人に委ねる。

けれども、大きな間違いには少しだけ手を貸す。

『多分。その、手を貸す部分の一部が神の一枝というものの……って事が』

自分の中で整理がついた事で、一応の納得としておく。

「理解はした。だが、まだ疑問がいくらか残る」

晶貴は再び問う。

「貴方方は、この「試行」という術を感じ取れないのだという。だったら、一般人もこの「試行」を受けた場合、何も感じないという事ではないのか？ また、それとは別にこの「試行」までをも通過したニセモノは、居るのか？」

そう。

「直視」であろうと「試行」であろうと、行うのは人間だ。

この世界には不思議な術があちこちに存在している。

だから、それらの術をすり抜ける様な術と言うものがあっても、別段おかしくはない。

晶貴の問いに神官の一人が答える。

「まず最初の問いですが。術を行使している者が何も感じないというのは、術を行使する者が身に着ける特殊な結界があるからです」

指し示された青白い服を見れば、確かに何かキラキラとしたものが全体にある。

言われなければ、ただの装飾に見える。

「この結界は私も神官長にしか使えませんし、聖天様にお仕えす

る我ら神官が聖天様を裏切る行為なども出来ません。そんな事を万が一にでも行えば、即座に聖天様から神官の力を剥奪されてしまうでしょう……聖天様より賜わった結界の力があってこそ何も感じないのです。ですので、一般人にあの「試行」は負荷以外の何ものでありません。一瞬で昏倒してしまいますよ」

「……理解した。では、それを何かの術で耐えきる事は？」

「かなり高度な術になりますが、不可能ではないです」

「では、この場を通過した二セモノも「居た」んだな？」

「はい」

今度は即座に答えが返ってくる。

「という事は……もうひとつ何か、私は試されるワケだ」

笑みを浮かべて言う晶貴に、神官達が頷く。

そして、しばらく沈黙を守っていた大神官の口が開いた。

「お察しの通りにございます。これより聖天神殿奥の間……聖壁と聖樹のある場所へと移動致します。移動の陣の使用をお許しいただけますか？」

「説明なしの上、時間短縮で進行……いや、違うか」

大神官の言葉にちよつとした厭味で返そうとして、晶貴は大神官がにこやかに微笑んでいるのに気付き、言葉を止めた。

少しだけ考え、すぐに口を開く。

「うん。転移陣での移動はイルフェラム国城内で聞いた理由と同じく人目に触れさせない為。でも、それ多分、表の理由だ……万が一を考えて城や神殿の内部構造を知られない為、だね？あと、説明を省いたのも、情報漏えいで対抗手段を考えさせない為ってのが表の理由。本音は……見た方が早いから、だ。違ってるか？」

「御推察通りにございます」

一を聞いて十を知る。

簡単な言葉だが、そういう人物は滅多にいない。

ひとつの事柄に対し、ひとつの面からでなく多種多様な面から物事を見つめ、見極める。

自分の目の前に居る人物は、出会った最初からそれをずつと行っている。

天性のものを持っていたとしても、技量と言うものは鍛え磨かなければ伸びない。

そして裏の裏まで見通そうとすると、汚いものも思慮に入れなければならぬ。

この域に達するまで、この自分の目の前の人物はどれ程の辛酸をなめたのだろうか。

その心の強さを、大神官は尊敬する。

「じゃ、行こうか。勿論、移動の陣で」

屈託なく笑う晶貴に、大神官は頷き、他の六名も頷いた。

床に浮かび上がる移送陣。

その場が光に包まれ、そして晶貴達は消える。

何度もこうして移動させられた所為か、流石に慣れてきたので光が消えるのとはほぼ同時に目蓋を開ける事が出来るようになってきた。目の前に広がる光景に、晶貴の口から声がこぼれおちる。

「すっげー……」

広い。

というか、でかい。

そういう印象がぴったりだろう。

一枚の壁、と聞いていたので、晶貴の脳内に浮かんできたのは、昔観た映画のモノリスの様なものだった。

それが広間か何かの中にどーんと立っているか、広間の奥の方に他の壁と隣接……或いは同化する様にあるのだろうと想像していたのだ。

『規模がちよっと違ってたか……』

予想と異なっていた事に苦笑する晶貴。

ここは、やや円形に近い広間。

出入り口なのであろう大扉のすぐ内の場所に晶貴達は転移してきていた。

見上げた天井までの高さは六階建てのマンション位か、もう少しあるかもしれない。

広間そのものも大きく、町によくある野球場と同じ位はゆうにある。

そして、先程までと同じ様な白を基調とした柱や壁の中、正面奥から左右にかけて漆黒の部分がかなり、あった。

左右の長さとして比較するなら、球場のホームランゾーンと同じくらいの幅。

高さは二階辺りかももう少し高くまであり、その壁の手前に壁に沿うように二段式の回廊が設えてあった。

回廊には数か所階段も付いており、上の回廊と下の回廊とを自由に行き来する事が出来るように、そして人が転落するのを防止する為か、外側には柵もつけてある。

今現在その黒壁の何箇所かが、ぽうつと白色や金色に光っている。その事で、それこそが聖壁なのだと判った。

「正面の漆黒の壁が、聖壁にございます」

「あの今光っているあれが、召喚とかの記録？」

「はい。白色が【召喚の儀】の記録、金色が【召喚物現出】の記録

にございます」

「すぐに書き写さなくても大丈夫なのか？」

「記録書という特殊な冊子に書き写し、その後その書をこの壁に当てない限り壁の文字は消えません」

大神官が喋っている間にも、またひとつ白色の光が壁に浮かぶ。

「今は人払いをしておりますので、この場には私どもだけですが、日頃は壁の書の任に就いている神官が沢山ここで動いております」
「私が来た事で職務を中断させてしまっているワケか。悪い事したね」

「とんでもございません……………たまには残業もよい試練でしょう」

含みのある笑みに晶貴も失笑する。

「そしてシンディン様。こちらが神の樹……………聖樹でございます」

大神官の言葉は、差し示した手の動作と共にある。

示されずとも、この大広間の中に樹と呼べるものは一つだけ。

大広間のど真ん中に、それはあった。

幹の太さは半畳ほどで、根らしきものは床に僅かしか見えない。高さは大体、四階の天井くらいだろうか。真っ直ぐな幹に沢山の枝がついている。

大ぶりな下方の枝、小ぶりな上方の枝を全体で表すなら傘の様な樹。

葉は殆どない。

まるで落葉した様な、枝だけに見える樹。

そして、樹と呼び名ではあるけれど、本来の樹にあるような樹皮はなく、まるで金属かガラスの様な光沢を持つ、金色に輝く樹だった。

その枝の中の一本。

下方の枝の中でも、沢山の中小枝を備えた特に大きな一枝だけが、緑の葉を芽吹かせていた。

「あの緑の葉を芽吹かせている大枝が、この度新生した枝にございます。そして同時に、神の一枝さま降臨を意味するものとなるのです」

大神官が、厳かに晶貴へと一礼する。

「ラキ・シンディン様。これが、最後の試しとなります。これより、

おひとりで聖樹へ赴き、その両の掌を聖樹の幹へと御当て下さいませ」

「……………それだけ？」

「はい。それだけでございます」

晶貴は再度聖樹を見る。

造り物のように見えるその樹からは、聖霊と同じく温かな感じを受けるだけで特に害意を感じない。

それに続く床も、ごくごく普通の石の床に見える。

大神官達は晶貴の背後から動こうとはしない。

周りを漂う聖霊たちも、変わらずにほわほわと浮いている。

その為、危険だと言う意識は全くなかった。

それどころか、あの樹に触りたくて仕方がなかった。
なので。

さくさくさくさくさくさく。

戸惑いすらない歩み。

それを見ていた大神官達の目は、その瞬間を見逃すまいとしつかりと見開かれている。

さくさくさくさく、ぴた。

聖樹のすぐ傍に立ち、晶貴はその金色に輝く樹を見上げる。
風もなく、葉すら殆どないのに、上方からは何故かシャラシャラ
という葉擦れの音が聞こえた。

そつと、両手を幹へと押し当てる。

思った通りのすべすべした手触り。

金属の様に輝き、磁器の様にしっとりとした触感、ガラスの様な
滑らかさ。

けれども、この樹は生きている。

掌から感じる脈動と、ほのかな温かさがそれを伝えてくる。

掌だけでは物足りなくなつた晶貴は、幹に顔を近づけ、その頬も
当てた。

心地好さが晶貴を包む。

そして。

【 】

誰かの声が、脳裏に届く。

まだ言葉の形にさえなっていない……けれども心に感じる優しい音。

晶貴は、その呼びかけの様な音を受け入れた。

金色の幹が、ひときわ大きく輝く。

第 11 話 天頂の夢 こいねがう」 2 「（後書き）

他の神官さんの名前出せなかったや……（´・ω・´）

感想やメッセージ等、次を書く意欲の元をありがとうございます

！（´・ω・´）／

読んでくれる人が居るって、ほんとに嬉しいなあ……VV

第 12 話 天頂の夢 こいねがう」 3 」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 12 話 天頂の夢 こいねがう」 3

音を受け入れた瞬間、周囲の様子が一変した。

触れている金色の聖樹は、そのまま目の前にある。
けれど周りにあった建造物や大神官達の姿はどこにも見えず、その存在も感じられない。

晶貴は聖樹に触れていた手を静かに離す。
それでも景色は戻らない。

足元には緑の草。

丈も形も茅に良く似ているけれど、硬さや鋭さがない。
それが生えている地面は結晶の様な白い粒状のものだった。
踏みしめれば、パリン、と氷を割る様な小さな音を立てて砕け、
光となる草。

そんな、見渡す限りの草原の中に晶貴は立っていた。

地平線に近い空は白色。

それから上空へと昇る程に水色、青色、群青……と濃くなり、天頂には色とりどりの星を伴った夜空が、脈打つように揺らめいている。

ここはどこなんだろう？ とか。

先程の声の様なものは何だったんだろう？ とか。

そう言った事が、どうでも良くなる程に美しい。
でも、とても静かな場所。

【……………い】

また、先程と同じものに、呼ばれた気がした。
その意志は天頂より感じる。

振り仰いだ晶貴の瞳に、一筋の光がうつる。
夜空の星がひとつ、流れ星の様にこの草原へと落ちてきた。

いや、落ちてきたのではなく、降り立ったというのが正しいのか
もしれない。
勢いや激しさ、そして熱量すらなく、その光は、静かに晶貴の正
面に存在した。

晶貴よりふた周りくらい大きな光の塊。
その光が、次第に収縮し人の様な形を取り始めた。

晶貴より頭三つ分は高い背丈。
二本の脚、二本の腕はその肢体と共に白っぽい肌。
少し癖のある金色の髪は足元までと長く、身体には薄絹の様な布

がその肢体を見え隠れさせる。
布が一部身体より浮いている為、昔本で読んだ天女の姿を思い出
す。

光が、その人物の身体の周囲だけをほんのり輝かせる程になって、
ようやく顔を見る事が出来た。

目鼻も顔立ちも美しく整っている。

高すぎず低すぎない鼻、桜色をした唇、はつきりと輝く金色の双
眼。

部品だけを見れば、普通の人間と変わらなく見えるのに、全体か
ら感じるのは神々しさという、不思議さ。

神聖で厳かに感じるのに、何故かとても温かく懐かしい……そんな
気持ちに戸惑いを覚える。

晶貴が声をかけようとする直前、相手の方が先に口を開いた。

【おかえりなさい】

笑顔で一言。

【ごめんなさい】

涙で一言。

金色の瞳から零れた涙は、頬を伝い落ちる。

肌から落ちた涙は、途端に結晶化して服を滑る様に地面へと落ち、他の結晶に混じってゆく。

この地面の小さな白いものは、全て目の前の人物の涙だというのだろうか。

もしもそうなのだとしたら。

こんな、遙か彼方まで覆い尽くす程の涙を、どれ程の時間をかけて流したのだろう。

自分でも良く解らない感情が、晶貴の心を揺さぶる。
何もせずにはいられない。

「どうしたの」

そう、一言。

「泣かないで」

そう、一言。

感じたままを口に上らせると、心がすっと晴れる。
晶貴は再び口を開く。

「私は、晶貴。新田晶貴。……貴方は？」

相手はゆっくりと口を動かす。

【わたしは、リ・ラ・リリウ……先程まであなたの居た、ラグドリユウスという世界を創り出したもの。あの世界では聖天と呼ばれたり、神と呼ばれたりする】

返答を聞きながら、晶貴は今聞こえた声が、その口元から発しているのではない事に気付く。

聖天は、晶貴がそれに気付いた事を即座に感じ取った。

晶貴は、自身のその思考に気付かれた事を苦笑した。

晶貴は、この感覚がようやく理解できた。

自分の心が読まれているわけではない。

かといって、自分が相手の心を読んでいるという訳でもない。

「心が読まれているわけじゃなくて……互いの心が共鳴共感してるのか……」

神の体現。

それがどういふものなのか、いまいち良く理解できてはいなかった。

だが、こういう共感があるのなら神の体現という言葉も理解でき

る。

晶貴の納得を感じたのか、聖天が言う。

【今、この場はわたしの世界の全て。そしてまた、わたしの世界の一部……】

「ここは貴方の心の中か何かで、会話がしやすいように互いの精神を実体化している状態、かな？」

聖天は頷き、そして少しだけ躊躇して言う。

【お願いが、あります】

「なに？」

【あなたに、触れても、いい……ですか？】

勇気を振り絞る様な、少し戸惑った声。

聖天のその感情を受けた晶貴の心が、また軋む。

「触れる事で、何か変わるのか？」

【わたしは変わらない……あなたが、変わるかどうかも解らない】

聖天はゆっくり左右に頭を振る。

【全てはわたしの罪。全てを受け止めないと、きつと許されない。何より、わたしがわたしを許せない。だから、あなたを……あなたに魂に刻まれた、これまでの人生を見せて欲しいのです】

「私に触れれば、貴方に私の過去全てが知られるという事？」

頷く聖天。

【そう。……そして、わたしの過去も、あなたに知られる】

まるで懺悔の様な、そんな感情が晶貴に伝わる。

聖霊から感じたあの温かさと、聖天から感じた温かさは同じ。何だが、とても懐かしくて……心地よくて。

聖天に触れたいという気持ちは、晶貴にもあるのだ。

晶貴は笑顔で頷く。

「私も、貴方に触れてみたい」

晶貴の言葉に、聖天が音もなく滑る様に近付いてくる。

ほんの数秒ほどで二人の間には人、一人分の空間しかなくなっていた。

ここまで来ても、聖天はまだ戸惑っている様に見受けられた。

けれども晶貴は戸惑わない。
自分からその一步を踏み出す。
パリン。

足元の草が、またひとつ光と散る。

聖天と晶貴の間は拳一つ程。

言葉はない。

ただ、視線だけで互いの意思をはかる。

二人の腕が、同時に動く。

晶貴の腕は聖天の腰を、聖天の腕は晶貴の頭を抱く。

二人の目蓋が閉じられた。

聖天の身体の周囲にあつた金色の光が、晶貴を包みさらに発光する。

どのくらいの時が流れたのだろう。

交感を終えたのか、発光が弱まり二人の目蓋が開かれる。

二人ともまだ、抱き合っている状態から離れようとはしない。
それでも、先に口を開いたのは聖天の方だった。

【わたしの我儘の所為で……辛くて厳しい人生を歩ませて……ごめんなさい】

晶貴は静かに頭を左右に振る。

「謝らなくていい……わかったから……全部、理解したから」

【許して……くれますか？】

「許すとか許さないとか、そういう感情は……ない」

晶貴の瞳から、一筋の涙が零れおちる。

その涙は、先程の聖天の様に途端に結晶化して地面へと落ち、他の結晶へと加わる。

それは、晶貴がこのラグドリュウスという異世界へ来て、初めての涙だった。

意識あるものとして、突然目覚めた。

リ・ラ・リリウ……それが自分。

そして、この次元に存在した時には、既に自分の力を理解していた。

生命を、世界を……様々なものを生み出す力を。

でも、自身の居る空間には生命あるものを生み出せなかった。

生命のあるものを創り出しても、この空間が持つ……自分が持つ力に耐えられるだけの魂の力が無かった。

何度試してみても、この場所に新たな生命は創り出せなかった。

絶望しかけた時。

この場、この空間で無ければ……可能かも、と。

その想いから、新たに空間を創り出した。
自分の吐息が感情と共に吐かれ、光と闇の聖霊が生まれる。

光と闇の聖霊は、絡み合いながらひとつの宇宙を創る。
星々を、大地を創る為の土の聖霊。

大地を活かし、暖かさを保つ為の火の聖霊。

生物に必要な数々の潤いを与える為の水の聖霊。

宇宙と星の境を、生物が生きる為の空間を、その全ての循環を支
持する為の風の聖霊。

小さな小さな生命の元を創り、様々な星へと降り注いだ。

その生命が根付き、ゆつくりと変化し、進化してゆくのを見るの
は楽しかった。

色々な星の、色々な生物。

些細な事で滅びてしまう生物もあれば、物事に対抗するかのよう
に適応進化する生物もあった。

自分の形態と同じ様な形の生物が発生した時は、それはそれは嬉
しかった。

この生物と語り合いたい、共に生きてみたい。
そんな想いが強く強く自身の心に湧く。

ただ、自分の吐息から生まれた聖霊たちでさえ、この生物には強すぎる力。

本当は自分自身がこの星に、大地に降り立ちたいけれど、そんな事をすれば星そのものが壊れてしまうだろう。

だから。

この自分によく似た生物たちが、いつか自分の居るこの空間まで辿り着けるよう、ほんの少しずつの手助けをしてゆこう。

そう想い、ずっとずっと生物たちを見守ってきた。

いつの頃からか、友でありたいと願っていたその生物達は「人」という枠を作り、自分を「神」という存在に置く様になった。魂の力はまだ弱く、この空間まで辿り着ける生命は、未だに居ない。

哀しかった。

この空間にずっと、たった一人で居るという事が、辛くて苦しくて寂しかった。

それならば、と。

最初からこの場に存在できるだけの魂を持った「人」を創り出そうとした。

まず自身の身体と魂を半分にして、その半身で「人」を創り、その中に半分にした自身の魂を入れてみた。

けれど、半分にしただけの魂は、自分の心と同じ心しか持っていないから。

喧嘩しても愛しても、鏡であるものがそれ以上の変化を見せる筈もない。

寂しさが増えるだけの結果に、生命育む力が暴走した。

自分の身体と魂を半分持った「人」が、砕けた。

砕けたけれど、力持つ魂は、砕けた欠片全てに宿り、新たな生命達を芽吹かせた。

生命達は自分の周りを舞い踊り、個々の意識を向けてくる。

新しい生命の誕生に歓喜したのは束の間だった。

新たな生命達は、リ・ラ・リリウの様々な力をその魂に宿した己の分身。

自身の力で満ちているこの空間に、同じだけの質量がもうひとつ増えた事で起こる歪み。

この空間に縛られない自由な生命達は。

幾体かをこの場に残し、その殆どが空間の外へと弾き出されていた。

リ・ラ・リリウの絶叫と共に、数多くの聖霊たちがその後を追う。

追い掛けて、決して離れないでいて。
その魂が消えない様に護ってあげて。
追い掛けきれずはぐれても、見つかるまで探して。

待っているから。

いつまでもいつまでも、待っているから。
いつの日か、ここへ。

わたしの傍へ帰ってきて。

どんなに遠くに居ても、忘れないから。
ずっとずっと、愛しているから。

他の空間にもきつと存在するだろう、自分と同じ様な存在に祈る。

わたしの我儘で生まれた生命たち。
出来る事なら、わたしがこの手で育てたかった生命たち。

彼らをどうか受け入れて。

リ・ラ・リリウの叫びが、その想いが……晶貴の心に染み入る。

そして。
リ・ラ・リリウと交感した晶貴は、一番知りたかった事を知る事が出来た。

魂に刻まれた記憶。

それは、母親の胎内に生命を芽吹かせた所から、鮮明なものとして存在していた。

彼女は不法労働者だった。

海外から連れてこられ、その身体を異性に売る仕事。

毎日つらい筈なのに、それでも生国の家族の事を思いやる、優しくて明るい人だった。

妊娠に気がついた時も、見つければ人工中絶させられてしまうから、と、周囲にずっと隠していた。

出産も、彼女がひとりで行った。

けれど、そこまでだった。

乳の出る女に、子供が居る事はすぐに露見する。
引き離され、売られようとしている我が子を連れ、彼女はそれまでの居場所から逃げ出した。

若い彼女が異国の地で、しかも乳児を連れての逃亡は、かなりの疲労を伴うものだった。

そして半年。

これまで稼いだ金があったとはいえ、追手から逃れ続けるのも限界が来ていた。

自分はもうすぐ捕まって、また自由を失ってしまうだろう。
せめて、我が子だけでも自由に生きて欲しかった。

「大好きよ、晶貴」

彼女は毛布にくるんだ我が子に、優しく声をかける。

「一緒に居てあげられなくてごめんね。ママの事は許さなくてもいいから……どうか、幸せになってね？　いつまでも、愛しているわ。晶貴……晶貴……ごめんね、晶貴」

涙を流しながら何度も頬にキスして、彼女は役所の前に我が子を

置く。

それが、晶貴の魂に刻まれていた……晶貴を生んだ母親の記憶。

着ているものは、確かに古着だったけれど。

「晶貴」というその名だけは、母親がつけたものだった。

要らない子ではなかった。

誰が父親かは判らないけど、それでも母親は墮胎などせず大切に育んでくれた。

産んだ後も、晶貴の事を必死で守ってくれていた。

何より……愛されていた。

その事が判っただけで、救われた。

晶貴の涙を、リ・ラ・リリウの指が拭う。

【別の世界で未来を夢見て一生懸命に生きていたあなたを、突然こちらの世界へと呼び戻してしまった……許してくれなくてもいい……憎んでくれてもいい】

リ・ラ・リリウの目から、ぼろりと涙が流される。

晶貴は、リ・ラ・リリウを見上げた。

「これまで起こった事の全てがあるから、今の私があるんだ。だから憎むとか許すとかは、ない」

涙はまだ止まらない。

「親なんて居ないと思っていたのに……いっぺんに母親がふたり出来たみたいだ。……私の魂を、創ってくれてありがとう……
リ・ラ・リリウ……おかあさん」

【――！】

晶貴の言葉に、リ・ラ・リリウの瞳からさらに大量の涙が零れおちる。

結晶化する前に辺りへと散り、黄金の光となる涙。
それは、歡喜の涙。

お互いを抱きしめる腕に、さらに力がこもる。

ただいま、おかあさん。

おかえりなさい、愛しい子。

【ここに、いつもいるから】

リ・ラ・リリウの、その言葉と共に、空間全体が黄金に輝く。
眩しくて、目を閉じる晶貴。

再び目蓋を開けた晶貴の目の前には金色の聖樹がある。
晶貴は、その聖樹の幹を抱きしめていた。
頬を流れていた涙は、もう止まっている。

幹から手を離し、聖樹を見上げる。

自分の枝だという大枝には緑の葉だけでなく、いくつかの金色の花が咲いていた。

枝から直接咲いているその花は、睡蓮の花に良く似ている。

それは、聖花。

この世界で自分が生きる限り、咲き増える事はあっても、枯れない花なのだという。

リ・ラ・リリウとの交感によって、色々な事を知った。

過去の神の一枝たちの事も、少しだけ解った。

自分が持つという力の使い方も、まるで初めから知っていたかのように心身に馴染んでいる。

ラグドリュウスというこの世界については、まだ判らない事が沢山あるけれど。

それは、これから知っていけばいいだけ。

聖樹の幹をもう一度だけ、そつと触る。

望めばいつでも、ここからあの空間へと繋がるのだと思うと、安心する。

『また、来るから』

晶貴は心の中でリ・ラ・リリウに言う。

金色の花たちは晶貴の安心感を感じたのか、呼応するように仄かに輝いている。

『えーと。神の一枝の最初の儀式というものはこれで終了の筈……だよな?』

そう思いながら後方に居る大神官達を振り返れば、七人ともが叩頭礼を成していた。

第 12 話

天頂の夢 こいねがう」

3 「(後書き)

評価が四ケタになっててびっくりしました……

応援ありがとうございます！(> < 。)

第 13 話

天頂の夢 こいねがう」 4」(前書き)

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 13 話 天頂の夢 こいねがう」 4 「

大神官達は、晶貴が躊躇もなく聖樹へ向かう姿を静観していた。

聖樹の周囲には見た目、障害になるようなものはない。
支障なく歩を進められて当然ではある。

けれども大神官達の視線は、真剣に晶貴の動きを見つめる。

聖樹の傍らに到着した晶貴が静かにその両手を幹へと当て、自身の頬まで押し当てている。

すると聖樹の金色の輝きが倍増した。

晶貴は瞳を閉じたまま動かない。

恐らくは神書にあるように聖天との交感が行われているのだろう。

聖樹の黄金の輝きは、何度も明滅を繰り返す。

やがて。

大神官達が待っていた現象が到来した。

聖樹の、その大枝に芽吹いていた緑の葉がさらに増え、そして…
…金色の蕾が生まれる。

この位置からでは正確な数は判らないが、判別できただけでも五、六はあるうか。

その蕾が、次々に花弁を開いてゆく。

その花冠は、聖天と神の一枝の意思が完全なる接触を終えた事を表す。

それは聖天の歡喜であり、神の一枝の歡喜でもある。

そして、花冠の数が多ければ多いほど、神の一枝の心が聖天に近いという事を示す。

目を凝らして大枝を見れば、まだ多くの金色の蕾が葉に隠れている様だ。

ひとつ、またひとつと花冠が増え、それと共に膨大な神気が湧き起こり、この場を包む。

「……………ッ！」

神職にその身を置き、日々精進し自らの神気を高め、その神気の高さゆえに神官長となった。

驕りなどは毛頭ないが、神官長としての威厳とそれ相応の自負はある。

その自負をも叩き潰さんばかりの重圧な神気を受け、神官長達が次々に膝をつく。

最後まで耐えていた大神官も、とうとうその場に膝をついた。

皆同様に頭を下げ、聖樹に向かい叩頭する。

この神気は、神の一枝が本来持つ力に目覚めた証。
けれど、その力を発現している訳ではない。

これは……この神気は聖天と神の一枝の、ただの感情の揺れなのだから。

この神気に耐えられないという事は、神の体現たる神の一枝を護る資格すらない事になる。

大神官達は自身の神気を祈りで高めつつ、その場の神気が落ち着くのを待つ。

これが、歴代の神の一枝降臨に伴い、神官長以上の者だけがその身に受ける「神の試練」であった。

服が、髪が、肌が。

神気の勢いによって、びりりびりりと震える。

祈りで自身の神気を補ってはいるが、少しでも気を抜けば間違はなく意識を持っていられるだろう。

神の一枝降臨というものは、只人の一生に一度有るか無しかの事だから、その存在は知っていても、その現出の世に居合わせる事自体が既に僥倖だといえよう。

こうして神職に就き、その神の一枝の最初の儀に参列を許された者である以上、この試練に打ち勝つ事は必然でなければならない。何より、聖天から託される神の一枝の前で、無様な姿を晒したくない。

各々の気概を心に乗せ、大神官達は祈りを続けた。

どれくらいの時間が過ぎたのか。
まるで、それまでの神気の勢いが嘘のように軽くなった。
神気はある。

けれども、その激しさが消え失せていた。

戸惑いながらも、叩頭礼のまま祈りを続ける。
そんな大神官達に声がかけられた。

「おい。次は何したらいい？」

大神官達の身体が一瞬硬直し、弛緩する。
ともすれば抜けそうになる気を必死に押しとどめ、大神官は床に座した姿のまま顔を上げた。

「枝の聖花をお一つ、こちらへお持ち下さいませ」
「あー……そーだったそーだった」

軽い返答の後、晶貴は枝へ向けて左の手のひらを差し出した。

『ひとつ、おいで』

たった、それだけの思考で聖花は自ら枝を離れ、晶貴の手のひらへと乗る。

さくさくさくさくさくさく。

晶貴は、聖樹へ向かった時と同じ様に、軽い足取りで大神官の元へ歩む。

『えーと。何て言うんだったっけ？……………んー』

聖天との交感によって、様々な知識と記憶が晶貴の意識下に埋まっている。

ただ慣れてないので、まだ上手く引つ張り出せずにいたが、僅かな間の後、すぐに思い出した。

大神官は四肢を床に付けたまま、静かに言葉を待っている。

晶貴は、言葉に神氣を乗せ、ゆっくりと言う。

「我が身より零れた欠片を、聖天神殿大神官モニティア・レグルへと預ける」

左手に乗せている聖花を大神官に向け、軽くふっ、と息を拭く。

聖花は、まるで生き物のように宙を飛び、大神官の胸の前で動きを止める。

大神官はその聖花を両手で押し戴いた。

「黄金の妙なる聖花。聖天神殿大神官モニティア・レグルが、確かに御預かり申し奉る」

聖花は枝にあった時と同じく、明滅を繰り返している。

大神官はその聖花を、自分の胸元にある飾りへと近付けた。すると、首から下げられていたその飾りの前に聖花が浮く。

飾りに直接くっついていては、訳ではなく、まるで磁力が何かで引き合っている様な感じだった。

それが終わると、大神官は改めて晶貴にゆっくりと頭を垂れる。

「聖天リ・ラ・リリウ様の体現にして、人に近し心持つ神の一枝様の御降臨、至極随喜にございます。降臨後より、この「接受の儀」迄の間の御無礼の数々、御容赦を賜わります様伏して御願ひ申し上げます候」

一度そこで言葉を切り、大神官は晶貴を見る。

「我、聖天神殿大神官モノティア・レグルの名に於いて、神の一枝ラキ・シンディン様を聖天樹彩主^{さいしゅ}として世界全土に公示する由、御允許頂けますや？」

「認めよう」

大神官の言葉に間髪いれずに返答する晶貴。

互いの言葉が神意を纏い、金色の二筋の帯が大神官の胸元の聖花に吸い込まれてゆく。

聖花は一度だけ青白く発光し、元の金色に戻った。

晶貴が「ふう」と軽く息を吐く。

「本日の儀礼、これで終了……あー、お疲れ様？」

何だか、えらく疲れているように見える大神官達に声をかける晶貴。

大神官達は無言のまま、ゆっくりと立ち上がった。

「大神官と、えーと。多分神官長さん達だと思うけど。貴方達にも許可するから、言葉も態度も少し……いや、思いつ切り碎けて。あと、名前とか判らないんで自己紹介もよろしく」

気軽な言葉だが、しっかりと神気が乗せられている。

その事に気が付いた神官達の顔に、それぞれ苦笑が浮かぶ。

「困りましたね、言霊縛られましたよ？」

「うわ……言葉がほんとに口から出せない」

「恭順の誓い、この後にしておこうと思ったのにー」

「良い判断をお持ちでいらっしゃる」

「ふふ。わたくし共の予定など、通用する筈もないでしょうに」

「面白い。こういう事を体験するとは」

あれこれ呟く神官達の傍で、大神官も笑みを浮かべて口を開いた。

「改めて、私からもう一度自己紹介を致しましょうか？」

「いや……大神官はもういいんじゃないの？ 何回も聞いたし、覚えちゃったよ」

「では、大神官ではなくてモノテア。あるいはモノ、と」

「はい？」

思わず首を傾げる晶貴に、笑顔のままの大神官が言う。

「齢も六十を超え、大神官と言う要職におりますもので。なかなか私を只のモノテア・レグルとして見てくれる者はありません。シンデイン様は私よりも上位の御方、私を敬称なしで呼べる唯一の御方なのです。……年寄りの我儘と思つて頂けませんか？」

じつと大神官の瞳を見、晶貴は「ふむ」と呟き、言葉を繋ぐ。

「『思い切り碎けて』位の「言霊縛り」じゃその程度か。イルフェラム城内で『緊張解いて、素の状態で、話』つてやった時は本当に言葉だけで態度が崩れなかったからね。態度ごと縛ったらどうなるのかを見知っておきたかったんだが」

大神官も「成る程」と頷く。

「先だって、この身に護りの結界をしているのだと御説明致しましたでしょう？ それでも、使われましたのが『完全にとっぱらつて』

対等を許す。

ただそれだけの事でも、不用意にそれを相手に与えてしてしまうと確かに大変な事になるだろう。

位の高い者が、ただの配慮として許したかもしれないそれを、自分がさも特別扱いされているのだと勘違いし「厚意を受けた」「懇意にしてもらっている」と考える者は少なくない。

そしてそれに欲得が絡み、懇意を受けている者からさらに懇意を得よう……と、砂糖菓子に群がる蟻のように奇妙な順列が出来てしまう素因ともなる。

そういったものが人物間、或いは集落間と大きくなってしまえば、やがては争いを引き起こすことにも繋がってしまう。

羨望や妬心からくるその想いが、国家間の戦にもなり得る事を晶貴は識っている。

それでも言葉だけなら、ある程度の対等も有りだろう。

けれど態度……行動まで対等を許すと色々困った事も湧き起こる。

先程の大神官が言った言葉がそれを物語る。

あの時……大神官に聖花を渡す「接受の儀」の前。

意識は自身の肉体へと戻ったけれど、聖天と交感した直後だったから、その神気の移香の様なものが自身を覆っていた。

その為、それまでには無かった神々しさが晶紀自身からかなり出ていた形になる。

大神官は最初から晶貴を……神の一枝を「性」の対象としては見ていない。

だからもし、神々しさを感じているあの時に今と同じ「言霊縛り」をしたとすると、それに対する畏怖や畏敬の感情だけが強く出る事になる。

その『生命も肉体も貴方様の思うままに』という感情を『下僕にして下さい』という言葉に置き換えたのは「対等」を求めた晶貴へ対しての、大神官の精一杯のお茶目だろう。

では、もし「性」というものを普通に感じる一般人を相手に、今回と同じ事をしてしまうとどうなるか。

さらりと想像してみた晶貴だったが、脳裏に浮かぶ結果にろくなものはない。

神力を持たない一般人が、言霊の力とはいえ「対等」を意識してしまえば、その強制力によって無意識にその命を貫こうとするだろう。

神の一枝という枠を外し、晶貴に対し、ひとりの人間として相対するようになる。

そこまではいい。

ただ、それも相手がその時の晶貴に特殊な想いを感じていないという条件が居る。

もし、晶貴を「性」の相手として夢想でもしていた者だったとしたら。

態度や、行動の制限も取り払われているとしたら。

感情の暴走は、行動の暴走へと向かう事が多い。

暴走の強弱も相手次第ではあるが、最悪、晶貴にとっては犯^やられるという、あまり好ましくない状態になるだけで済む。

勿論「性」に限らず、その感情が「嫌悪」や「怨嗟」であつても同じ。

晶貴を傷つけようと暴行に走る場合もあるだろう。

だが、晶紀自身はそのどちらをも自分の招いた事だからと許容してしまう可能性が高い。

晶貴の意思が聖天の意思である以上、周囲を説き伏せる事も可能だ。

問題は別の所にあつた。

問題は、傷害暴行であろうが性的暴行であろうが、それが大抵感情の暴走によるものだ……という事。

例え本能的なものが混ざっていたとしても、所詮暴走は暴走ではない。

狂人でもない限り、人が暴走し続けるという事は不可能に近い。つまり、いつかは正氣に戻るのだ。

感情の嵐が収まって、いつもの自分の意識が戻るにつれ、やがて自分のしでかした事を知る……知ってしまう。

信仰の深い者ほど、その心に受ける衝撃は大きいだろう。

聖天という唯一神の体現である神の一枝。

神と同格とされるその身を、犯し傷つけたという事実。

その重さに果たして耐えきれerのかどうか。

本人が耐えきれたとしても、その親族や友人、或いはその事を知った赤の他人が、果たしてその人物の行いを許し、擁護し続ける事ができるだろうか。

他者から見放されてしまえば、さんたん惨憺たる結末が待っているだけだ。

そこまで考え、晶貴はもう一度、大神官の言葉を噛み締める。

無暗に説得するわけでもなく、力任せに話を叩き折るわけでもない。

ただ、淡々とした説明と提案のみの言葉。

それだけなのに、心がふんわりと暖かくなる。

神の一枝と言う至高の存在だから、何をしてもいい。

けれど、神の一枝自身が傷つく事は、出来ればして欲しくない。

その、大神官の優しさと心配が伝わる。

晶貴は大神官をちらりと見、笑みを浮かべたまま床へ視線を落とす。

『何か、やっと理解出来た気がする』

父母というものが本当はどんなものなのか、実際晶貴は良く判っては居なかった。

これまでの人生で色々な家族を見てきたけれど、あくまでそれは他人の家族。

自分も養ってもらっては居たけれど、その中に父母と呼べる者はいなかったし、この身体では父にも母にもなれない。

養子を迎えたり結婚したりと、家族というものを作る事は出来る

だろうが、父母を知らない自分が、父母としての愛を子に与えられるだろうか？

誰かと結婚する事が出来たとして、相手の両親が自分を受け入れてくれ、実子の様に愛してくれる確率はどれくらいなのだろう？

そんな事をつらつらと考えていた時期もあった。

けれど、その思いは既に過去の事と割り切れる。

父の顔も名も知らなかった。
母の顔も名も知らなかった。

けれども、こちらの世界へと来て、母と言う存在をやっと知った。

実母の愛を知った。
魂の母の愛も知った。

『解ってしまえば簡単な事。あっちの世界で父が居なくて当たり前だよ……』

晶貴は軽く瞳を閉じ、笑みを強めた。

『こつちに、ちゃんと居たんだな……おとうさん』

幸せを、噛み締める。

晶貴の顔が上げられる。

「忠告をありがとう。言霊は選んで使う事にするよ……………モノ」
「…………意を汲んで頂き、ありがとうございます」

大神官の瞳が、喜びの感情を伴って細められた。
晶貴も嬉しそうに微笑み、視線を他の六人へと向ける。

「さて、こつちの話も終わった事だし。貴方達の自己紹介をよろしく。
あ、儀礼は最小限で」

神官達は晶貴の言葉に一度顔を見合わせ、再度晶貴へと顔を向けて頷いた。

予め順番を決めてあったのか、最初はやはりあの肩位までの白髪に赤髪の交じる女性だ。

一步前へ出、腰を折る。

少し癖のある髪が、ふんわりと揺れる。

「土の神官長に就いております、アムル・カントと申します。 齡は五十、神官長の中では一番年かさとなります」

正面から見て、初めてその瞳が薄い灰色だと知る。

晶貴は次を指名する代わりに頷いた。

次に進み出たのは、薄緑色の瞳に、白髪に金髪が交じる男性。
髪は長く、少しウエーブがかかっていて腰位まである。

「わたしは光の神官長を務めております、カッタード・モレスと申します。 齡三十の男にございます」

雰囲気と声質で男性だとは思っていたが、黙っていれば確かに判りにくい。

改めて男だと明言するあたり、女性に間違われる事が結構あるのだろう。

晶貴は軽く、頷く。

次に足を踏み出したのは、スポーツ刈りが少し伸びた様なツンツンした髪 of 男性。

白髪に交じるオレンジ色と真つ赤な瞳が印象的だ。

「自分は火の神官長に就いております、カルナ・サラと申します。歳は二十九、見ての通り無骨な男にございます」

服に隠れている為はつきりとは判らないが、無骨と言つその身体は、太くはないが鍛え上げられている様にも見える。

晶貴は頷いた。

次の者は、ふくらはぎの辺り迄はゆうにありそうな長い直毛の女性だった。

白髪に交じる紺色は、瞳と同色。

「わたくしは闇の神官長を拝名しております、キサラク・ニアと申します。歳は二十五、女性でございます」

物腰が優雅なのは生まれついてのものなのか、それとも生活によるものなのだろうか。

礼を成す度にさらさらと流れる髪が印象的だ。

晶貴は頷く。

次の者は、この場に居る中で一番背が高く、瞳はきらきらと輝く水色。

背の中ほどまである直毛は途中紐で結えられ、白髪にはつきりとした紫色が交じっている。

「俺は水の神官長の任を頂いている、ムステイーノ・トレファムと言います。二十二歳になったばかりの男です」

言霊が効いているのか、わりと碎けた物言いと、同い年という事に親近感が湧く。

少しだけ目を細め、晶貴は頷いた。

最後の者は、この中では一番若く見える。

肩よりも少し長めの、まるで静電気でも起きているのかの様にふわふわと揺れている髪には、濃い緑色が白髪に沢山交じっていた。

青色の瞳は大きく、辺りの物を反射させている。

「僕は風の神官長をしています、ヒューリヒ・ムントと言います。よく普通の神官や神女と間違えられますが、十八歳の男です」

確かに可愛い顔立ちをしているし、おまけに声が男性にしては結構高い。

間違うなという方が難しいかもしれない。

晶貴は納得も含めて頷き、皆を見渡す。

「自己紹介をありがとう。時折名前とか間違えるかもしれないので、その時はもう一度教えて欲しい」

そう言い、一度言葉を切り、再度口を開く。

「神の一枝としてここに居る、新田晶貴……こちらでは、ラキ・シンディン、かな？ 歳は二十二、両性具有者だ。これから、よろしく」

軽く頭を下げ、皆へ腰を折る。

一瞬、神官達の息を呑む音が聞こえた。

頭を上げ見渡すと、神官長達はそれぞれ驚いたような顔で晶貴を見つめている。

平静を保っているのは大神官だけだ。

そちらへ視線を向けると、大神官は苦笑を浮かべた。

「公では、お止め下さる様、お願い致します」

「承知している」

「ああ、それと……シンディン様、もうひとつ言い忘れていた事が」

「なに？」

勿体ぶった大神官の口調に、軽く問いかける。

大神官は、にこにこ笑みを振りまきながら晶貴へ言う。

「神職に就いている者とも、恋愛は自由です」

「は？」

「ここに居る者たちも、全て独り身でございます。御用の際はいつでもお声掛けくださいませ」

愉しそうな大神官の言葉に、晶貴は小さくぽそりと呟いた。

「乙ゲーとかギャルゲーじゃねえっての」

その言葉が聞こえているのか居ないのか。

「……何か、仰いましたか？」

おとうさん。

何か、笑いが黒くないですか？

「いや、何も」

父と思うのは心の中だけにしておこうと思う、晶貴だった。

第 13 話

天頂の夢 こいねがう」 4 「（後書き）

大神官、愉しそうです（笑）

晶貴さんがんばれw

第 14 話 天頂の夢 こいねがう」 5 」（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 14 話 天頂の夢 こいねがう」 5

互いの紹介を終え、「夜伽ならいつでもどうぞ」的な表情の神官長達の秋波を何事も無かったかのように受け流しつつ、晶貴は大神官へ言う。

「私の儀式、初日にする事はこれで終わりだね？」

晶貴は意識に刷り込まれた知識の中で、神の一枝が聖天神殿に着いてからの儀式は大まかに五つ程ある事を識っている。

神の一枝が聖天神殿に到着後、その体調等の様子を見ながら行われる、色々な儀式。

儀式とまではいかない種類の儀礼的なものも幾つかはあるが、神の一枝の意思によっては簡略したり行われなかったりするものもある。

初日に行うのが、聖樹に触れ聖天と交感する「聖接の儀」と、大神官に歓喜の花冠である聖花を預ける「接受の儀」の二つ。

二日目に行うのが、最初に行く国や場所、日時を決める「聖択の儀」と、聖天神殿の主塔上方にある露台バルコニーからのお披露目「高覧の儀」と「瑞光の儀」の三つ。

三日目以降は、神の一枝の体調を考え予備日となっている。

本日の大きな儀式はこれで終わりの筈だと確認をする晶貴に、大神官は頷いた。

「はい。シンディン様の行う儀式は「聖接の儀」と「接受の儀」の二つを持ちまして、本日は終了となります」

「大神官はこれから、それ使って公示をするんだっけ？」

晶貴は大神官の胸の前に浮く聖花を指しながら言う。

大神官は苦笑しながら頷く。

「はい。出来得る限り早く全土に公示をしませんと、後々やっかいな事になりますからな」

「あー、なるほど。神殿が神の一枝を独り占めしている、と」

「御意でございます」

どこにでもそういう思考回路を持つ人間が居るものだ……と、晶貴も苦笑する。

「んじゃ、ちゃっちゃとそれ済ませて、皆でお昼ごはん一緒に食べようか」

「御相伴のお誘いでございますか。それはまた重畳、有り難くお受

けいたします」

「他に用事がない様だったら、神官長たちも一緒にどう？」

晶貴の誘いに神官長達は「喜んで」と、笑顔で首肯する。

大神官達は主塔前面部にある大広間へと向かった。
天井は高く、外部の光が様々な色を伴って広間へと降り注いでいる。

広間の両端には幾つかの長椅子。

その間にある大きな広間そのものが、奥ある大きな祭壇へと続く通路であり祈りの場でもある。

祭壇は他の場所よりも、ひとときわ光に満ちていた。

花や緑が置かれている中、その中央にある神聖で清涼な気が満ちるその壇上には、透き通った聖花が安置されていた。

それは、晶貴の前に居たという、百五十年前の神の一枝の聖花。

神の一枝の存命中は金色に輝きを放ち続ける聖花だが、逝去の後はゆっくりとその色を喪い、およそひと月で透明な水晶の様な様相

へと変じる。

次代の神の一枝が降臨するまでの間、人々を見守っているのだと、そうまことしやかに語り継がれているこの透明な花冠には、くすみひとつない。

透けては居るが、聖霊たちの光を反射する様に輝くその花冠は、未だに力を持つている様にも見える。

その為か、この花冠に祈りを奉じる者も多い。

ここは申請すれば一般人でも入室できる場所だが、新しい神の一枝である晶貴の降臨によって、儀式が全て終わる迄その受付が停止されている。

他の人員も人払いされている為に、ここには現在晶貴を含めても八人しか居ない。

大神官は一人で静かに壇上へと歩を進めた。

透明な聖花の前に立ち、瞑目し頭を垂れる。

少しして頭を上げた大神官は、口を開き声に神氣を乗せた。

「預かり賜いし黄金の妙なる聖花をこの場に戴き、証とす。いと尊きその御名は『ラキ・シンディン』 聖天樹彩主。聖天リ・ラ・リリウ様より与えられしその御身体は御歳二十二にして両性。聡明なる新しき神の一枝さま降臨を、我、聖天神殿大神官モノティア・レグルの名に於いて公布する」

大神官の胸上に浮いていた晶貴の聖花がするりと移動し、壇上にあった透き通る聖花の上に滑る様に浮いた次の瞬間、透明な聖花は

光となって消える。

空座となったその場に、晶貴の聖花が新しく鎮座した途端、辺りから一斉に聖霊達が集まり、聖花の中へと飛び込んでゆく。

見えてはいたが、あまりにもその数が多すぎて。

どれ程の数の聖霊が動いているのかは判断できないが、時間にしてほんの半テシにも満たない筈。

けれども、膨大な神気がその場にあつた。

胎動するかのように聖花の内側が光る。

そして。

光の帯が、聖花より解き放たれた。

まるでレーザー光線が真っ直ぐにその光を飛ばすように、天井を抜け、塔をも抜け、天上へと伸びる大きな大きな光。

その光の帯から、幾筋もの光が飛び去る。

煌々と伸びていた光の帯が、音もなく消える。

壇上を見れば、黄金の聖花の光の胎動はそのままだが、大きな神気は聖霊と共に消えていた。

飛び去って行った光は各国にある神殿へと向かい、それぞれの神殿にある祭殿に、先程の大神官の言葉を古代語で刻みつけて行くだろう。

神官は再び腰を折り、聖花に向かい一礼し、そのまま晶貴達の居る場所へと戻ってきた。

「これで公示はお終い？」

「左様にございます」

少しだけ感じた疑問を大神官へ投げる晶貴。

「あれって、ずっとあそこに置いて盗まれたりしないのか？」

晶貴の指先は壇上の聖花を指している。

大神官は笑顔で頷いた。

「盗むどころか、触れる事も無理かと存じます。まあ、御覧になる方が早いでしょう……ヒューリヒ、祭壇へ」

「はい」

軽い足取りで祭壇へ向かう風の神官長を、晶貴はその目で追う。
順調に進んでいた足が、祭壇の一步手前で止まる。

「僕じゃ、ここまでで精一杯ですね」

振り返ったヒューリヒは苦笑している。

晶貴は不思議そうに言う。

「足が動かなくなるとか、そういうの？」

「いえ、そうじゃないんですー。ここに、こう………」

言葉を途中で切り、手を祭殿の方へ向かって振ると、ぺし、とい

う音がして手が宙で止まった。

「見えないけれど、こんな感じに壁があるんですよ」

「結界とか、そういうもののかな」

「神気による壁だから、結界とはまた少し違うんですよ」

再度、ぺしぺしと宙を叩くヒューリヒの姿に、パントマイムを見ている気分になる。

「大神官様あ、ついでに、僕に一番乗り下さい」

手を振り笑顔で言うヒューリヒに、大神官の顔にも笑みが浮かぶ。

「いいでしょう。……聖天神殿大神官モノティア・レグルの名に於いて、風の神官長ヒューリヒ・ムントに接見を許す」

大神官の言霊が神気を運び、聖霊と共に風の神官長へと向かう。

ヒューリヒはそれを逃げずに受け止めた。

一瞬だけ、彼の身体全体がほんのり光に包まれる。

「彩主さまー、見てて下さいね」

にこにこ笑みを振りまきながら、ヒューリヒはもう一度祭壇へと手を振る。

今度は壁が存在しない様だった。

ヒューリヒはそのまま移動し、壇上へと進む。

聖花のある場所まで行き、一度晶貴へ視線を向けた後、聖花に一礼し……触れようとす。

べち。

……何だか今度は嫌な音がした。

「痛たたたたた」

ヒューリヒは伸ばしていた手を引っ込め、苦笑しながらふるふると振り、ぼそりと呟く。

「本当に神書にある通りなんだね。びりびり来る」

「今の、聖花に触ったの？」

「いいえ。ほんの一グン（十センチ）手前に壁があるんです。こんな風に………痛てててて」

説明しつつ、もう一度聖花へと手を伸ばすヒューリヒ。

手を動かすたびに、べちべちびちびちと不思議な音がする

手の動いている位置から察するに、壇上に乗せられている聖花の周囲十センチを境に、ドームの様な何かが覆っている感じで障壁があるらしい。

「触れないのは判った。もうしなくていいから、こっちに戻ってきて」

「はい」

ヒューリヒは素直に戻ってくる。

大神官は愉しそくに微笑む。

「接見一番乗り、如何でしたか？」

「大変貴重な経験をさせて貰いました」

ヒューリヒは苦笑いで返す。

晶貴は先程の音が気になり、再びヒューリヒに訊く。

「凄い音がしてたけど、触れようとすると、どんな感じになるの？」
「そうですねー……空気が乾燥している時に、服や人に触れてぱちつと小さな雷のような音がしたり、びりつと痺れが来る事ありませんか？ あれの物凄く大きい感じです」
「！」

その言葉を聞いて、晶貴は視線をヒューリヒの手へ向ける。

こちらからは手の甲しか見えない。

ヒューリヒがこちらへと戻る際、不自然な動きをしていた事に今更ながら気付く。

手の甲しか見えない様に歩いていたその姿。

そして、先程のあの音が、静電気の大きなもののだとしたら。

そう考えた晶貴は聖霊を動かす。

入口から祭殿へと流れていた風の動きを、強制的に逆にする。

途端に感じた臭いに、晶貴は眉をひそめた。

風の神官長である彼は、恐らく自身の力で風の流れを変えていたのだろう。

「まいったなー」と呟く彼に、晶貴は命じる。

「手のひらを、見せろ」

「……………いや、その……………」

「二度、言わす気か？」

「……………はい」

仕方なく、といった感じで晶貴の目の前に手のひらを見せるヒューリヒ。

何かに感電した様な、焼け焦げたその手のひらを見て晶貴は盛大に溜息をついた。

そして。

「そのままにしてろ」

一言そう言い、晶貴は自分の手のひらをヒューリヒの手のひらへ押しつける。

「……………っ！……………うわぁ……………」

一瞬痛みが走ったが、後は感動しかなかった。

晶貴とヒューリヒの合わせられた手を中心に、聖霊が舞う。

あるものは包み込み、あるものは通り抜け、あるものは手のひらの隙間を埋める。

瞬きを二、三度という短い時間だった。

晶貴は自分の手を外し、ヒューリヒの手のひらを見る。

傷一つない、綺麗な手のひらだった。

「うん、よし」と、晶貴は満足してひとり頷く。

「痛みはあるか？」

一応、確認の為にヒューリヒへと訊く。

傷そのものが消えて無くなった今、痛みなどある筈も無いヒューリヒは言う。

「いいえ。痛みが無いどころか、日頃より円滑に指先が動きます」

両手の動きを見せる様に、にぎにぎするヒューリヒ。
その様子を見ていた大神官が晶貴に訊く。

「シンデイン様、いま行われたのは、どのような術式でございましたか？」

「術式は使ってない」

「では、どうやってあの者の治癒を？」

「……私の持つ力のひとつだ」

そう言うと、晶貴は大神官に自分の手のひらを見せる。

晶貴の手のひらは、先程のヒューリヒと同じ様に焼け焦げていた。その惨状に、大神官だけでなく神官長達も息を呑む。

「！……何て事を！　すぐに治癒を」

「心配無い。そろそろ治る頃合いだ」

各人が治癒の術式を構築する前に、聖霊達があっという間に晶貴

の傷を治していった。

元通りになった手のひらを、わきわきさせながら「な？」と軽く笑みを浮かべる晶貴。

大神官の目からは笑みが消えていた。

「御説明、お願いできますか？」

「だから私の力のひとつだって。説明ねえ、んー……盾の性質を変えたというか、それに付加したというか。概念で使うものだからなあ……どう説明すりゃいいのか」

「むー」と少しばかり唸り、晶貴は説明する。

「盾の表面を鏡にして必要なものだけを「移し取って」その後、神の一枝の力で「この傷を不必要なもの」として認識後に聖霊に治癒させる、つてのが先刻のヤツ」

晶貴の説明を聞き、少し考えていた大神官の口が開く。

「方法はおおよそ理解できました。ですが、何故「移し取った」すぐ後に「その傷を不必要なもの」として認識し治癒されなかったのでございますか？……まさか、御自身の御身体を痛めつける事が好きだとか仰いませんよね？」

「そういう趣味はない」

苦笑しながら晶貴は言う。

「私の持つ神の一枝としての力と、最強の盾の力は別物なんだが、それを扱う私の身体はひとつしかない。おまけにどちらの力もちよつと強すぎるんで、両方の力を同じ方面で同時に使う事なんてしたら自分の器ごと壊れちまう。でも神の一枝としての力は盾の力に共鳴して勝手に働こうとするし。それじゃあ身が持たないだろ?……だから、盾の力を使う際には「対価」という形で、神の一枝の力へ別に抑制をかけているんだ」

「対価、とは?」

「そのままだよ。行ふ事柄に対し、見合うだけの価値の現象をこの身に受ける……それが対価だ」

「先程の、あの者の酷い焼け爛れの怪我を、御身は同等と見なされた?」

「その通りだ」

「あの者の手当てならば、後ほど私共が行う予定。何もシンデイン様がその御身を傷つける必要性などございませんでしたのに」

そこまで大神官が言った時、空気が僅かに冷えた。

いや、神気によって冷涼になったというべきだろう。

「見損なうな」

晶貴の瞳の金色に、細い赤が燃える。

「手当てを予定していたと言う事は、大怪我をすると解っていてあの挙動をさせたという事。挙動後、神書にあるという事柄を呟いていたヒューリヒも、勿論それを知っていたという事。本人も怪我を覚悟の上での行動なのだから自己責任の範疇だと考えている……違

うか？ ヒューリヒ」

「はい。自分で選んだ事ですから、怪我してもそれは自分の責任だと」

「モノティアも、他の神官長達も同意見か？」

大神官達は、何故詰問されているかが判らない、という表情で晶貴の問いに首肯する。

神気を高めつつ晶貴は再度、問う。

「では、ヒューリヒのあの怪我を平然と、興味深げに見ていたのは何故だ？ ヒューリヒが、ついでに一番乗りをくれと、そう言ったのは、実は他にこの実験を行う者が居たからじゃないのか？ それも、私がこの現場に居ない状態で、だ」

「！……………」

「その表情じゃアタリか。全く……私が対価としてあの傷と痛みを受けたのは、たかが一テシ。ヒューリヒが手のひらを焼き焦がしながらも気丈に説明をし、この場へ戻るまで何テシ過ぎていると思う？ ……私の傷を見た時の、あの驚愕と痛ましげな表情。それは本来、彼に向けられるべきものの筈だ」

溜息をつく晶貴。

「私がああの傷を引き受けようと考えたのは、憐憫からではなく、あれが私の責任だからだ」

「何故にございますか？ あれを命じたのは私。でしたら責任は私に！」

「だからだよ、モノテイア」

晶貴は真剣に言う。

「私の問いかけに、説明で済むだけの事を、怪我を承知で実践させるなど以ての外。それはヒューリヒにも同じ事が言える」

突然自分に向けられた言葉にヒューリヒが目を瞠る。

「最初、祭壇の手前にあつた壁の様なものに手を触れた時はこちらに手のひらが見えていたし、単に何かを叩くだけの音にしか聞こえなかった。ヒューリヒとモノテイアの会話が気にはなつてはいたが、その前の壁を叩く雰囲気で、何かあつてもそれに類するものだろうと私は思っていた。けれど、そのまま聖花に手を触れれば、手のひらに傷を負う事が神官職の常識だとして。ヒューリヒはその上で何故、私の問いに行動で返した？ また、この問いが私からではなく、一般の者からの問いだとしても同じ事をしたのか。それを問いたい」

「え……？」

問われ、少しだけ戸惑い思案するヒューリヒ。

障壁に触って見事に焼け、ひどい痛みが襲った。

その後で神の一枝さまに問いかけられたのは、聖花に触ったのかどうか。

聖花には触れないのだと。

こつという風に障壁があるのだと言葉だけで説明する事は確かに出

来た。

それを、わざわざ見せつける様に自身をさらに傷つける行動に出た、その理由。

一般人が同じ問いかけをしたとしても、同じ行動には出ないであろう、その理由。

「確かに一般の方からでしたら、口頭での説明だけで終わってたでしょう。傷を負う事を解っていて行った、あの時の僕の心情は……神の一枝さまに説明をするという荣誉に舞い上がり、己の身など顧みず打ち捨てていましたから」

「だらうな」

晶貴は頷き、続ける。

「では、一般の者の問いに、先刻と同じような行動をして見せたらどうなる？ それを、少しでも考えたか？」

「！」

そんな事をすれば、神へ対しての心持ちが、怯えさせるだけの結果になる。

これにはヒューリヒだけではなく、大神官も他の神官長も唸るしかなかった。

晶貴は説明を続ける。

「本来この世界における神職は、神である聖天と人とを繋ぐものの

筈。そうだよな？ モノティア」

「御意にございます」

「相手に気付かれなければいいだろうという、その考えがまず氣に入らない。相手の気持ちを考えていない事も然り。そんな者達が聖天と人とを繋げるのかどうかを少し考えたくなるぞ？……滅多に現出しない神の一枝という存在と、その力。必要なのかどうかはさておいて、先刻あったような実体験を行いたいという事は理解できる。神書にあるという事柄を確認したいと云う探究心を否定するつもりはない。当事者である私も知りたい事柄が多いからな。……ただ、それらの力を試行実験したいのなら、前もって私にも相談してくれ。自分の力とか自分の所為で知らずに他者を傷つけるなんて……私が私を許せなくなるじゃないか」

金色の瞳に泳ぐ赤色は、憂いの灰色へと変じている。

「今回の件にしても、気付いていたら……知っていたら止めていたけれど一連の流れの中で、私自身も興味に高じて、あの行動の違和感に気付けなかった。モノが止めなかったのは結果を見たかった為というのもあるだろうけど、この結果を引き出したのは私の問いかけという一石が引き起こした事」

晶貴は大神官へ視線を向ける。

「モノティア」

「はい」

「大神官である貴方が責任を感じるのなら。貴方より上位にあるという私に、責が無いというのは有り得ないんだよ」

「！」

「だから、私なりに責任を取った……解るな？」

「……………はい。申し訳ございません」

己の不徳を感じながら、腰を折り晶貴へ礼を成す大神官。

ヒューリヒはヒューリヒで、再び自分の両手を眺めていた。

晶貴から施された手当てですっかり元通りになっているその両手には、まだたくさんの神気が残っている。

風の神官長ヒューリヒ・ムント、十八歳。

神官長として任じられたのは十七の歳である。

この年齢で神官長まで上り詰めた者は少ない。

さらに自分と同程度の力量を持つ者が少ないが故に、それは彼の自負となっていた。

現在は他の神官長たちと比べれば中ほどの力だけれど、これから高めていけば彼らの年齢に達する頃には必ず追い越しているだろう。いずれは大神官になれると、彼以外の者ですら本気で思うほどには濃い神気をもっていた。

けれど、その考えが間違っていた事に気付いた。

探究心からとはいえ自分の欲だけで動いてはならない。

慢心していた自分に、神の一枝さまはその事を思い出させてくれた。

他の者達より神気のある神官長とはいえ、祈りで練り上げないと神気は増さない。

だが、彼の方は感情を揺らすだけであの濃さの神気を生める。

聖性の違いだけではない、格が、心の器が違いすぎる。

格好いいところを見せようと無理をして怪我を負う所作をした。
が、痛む素振りなど見せてはいない。

演技は完璧だったはずだ。

それでも見破られた。

自身の浅はかさを指摘された。

でも、咎める事などせず傷を癒して下さった。

何という慈悲。

なんという心の広さだろうか。

ヒューリヒの心の芯が傾き、完全に折れる。

けれど消沈の様な感情が起こらない。

何故か、清々しいほどに周囲が見える様になる。

慢心という、心の中に作っていた一枚の壁が取り払われた事で自身の聖性が増したのだ。

突然、両手の神気が、彼の全身を覆う程に広がってゆく。

「!？」

自身の保つ神気が増した事で、自分の周囲に常に居た風の聖霊達の質が変化した。

中位程であった聖霊の力が、高位へと昇華してゆくのを目の当たりにして、ヒューリヒだけではなく他の神官長や大神官までもが驚愕の視線で見つめている。

唯一、平然としていたのは晶貴だけだ。

「おー。ようやく何か来たか。結構時間差があるもんなんだな」

晶貴はそう言つと、ヒューリヒへその笑みを向ける。

「先刻、直接怪我の手に触れたる？ あれ、痛かったよな」

「え……はい」

「あれな、ホントは触れなくても出来るんだけど、痛いのが解つてて触つたんだよね」

「……え？」

にんまりと笑う晶貴。

「榮譽だか何だか知らないけど、私の意思を度外視してああいう怪我をした罰のつもりで少しだけ痛い目にあつて貰つたんだ。でもその切欠を作つたのはこれまた私だから、その責任という事で傷は癒した。だが怪我をする事が解っているのに、あんな風に身体張つてまで説明してくれたという事に対しての礼を何もしないというのも何なんで、な」

愉しそつにヒューリヒへと微笑む晶貴。

「聖天に貰つた知識の中にあつたもんなんだけど。この世界へ来て、私が最初に触れた人間というヤツになつてもらつた。確か、それで榮譽なんじゃなかったっけ？」

「……」

「何か、色々と加護がついたり能力値があがったりするらしいな。何か、周りの聖霊が凄い事になつてゐるぞ？」

くすくすと笑う晶貴。

ヒューリヒの周囲に舞う聖霊達は嬉々として盛んに飛び回り、その緑の交じる髪をふわふわと弄んでいる。

神の一枝は、他の世界から聖天の意思によって降臨する者である。そういった者がこれまで生活していた地を離れ、見知らぬものばかりのこの地で、それも突然「神の体現という存在」などと言われ、何をどう信じればよいのか判らないのが当たり前である。

もちろん、聖霊に護られ、聖天との交感によってある程度の知識も入るので、多少はこの世界で馴染みやすくなるだろう。

けれど、それと「人を信じる」という事は別物だ。

晶貴がこの世界に現出した時、聖霊による護りの光で包まれていたのは、無意識に自己防衛をしていたからに他ならない。

確かにイルフェラム国で、この国の食物を初めて食す事をした。だが晶貴はそれを「接待」として認識しただけで、決して完全には信用してなかった筈だ。

それは、今現在まで誰も、この国の人間が晶貴に触れられないという事で判る。

神気が強すぎて近づけないという事もあるだろうが、それ以前に晶貴が自身に触れるのを許容しない限り、誰も晶貴に触れることなど出来ないのだから。

神の一枝が、自らの意思で初めてこの世界の他者に触れる事。

それはこの世界の人間を信じるに値する、と。

神の一枝が、この世界に居る人間を信じて良いと、そう許容した証。

それが、この最初の一人……「枝の初葉」はつはと呼ばれる者である。

神の一枝の降臨の状況やひとなり、あるいは感情によって、それが何時なされるのかは全く予測できない為、望んで得られるような榮譽では決してない。

それ故に「触れられる」という、ただそれだけの事が、誰にとってもこの上ない程の榮譽となり得る。

ヒューリヒは、自負こそ高かったが、それを驕る様な心根は無かった。

今回の降臨に際しても、神官長と言う役職で神の一枝に接見する機会はあるけれど、若輩である事は確かだからと、自身が率先して前に出る事はしなかった。

自己紹介等にしても、一応の年功序列として最後だったし、先程の聖花の一件にしても、自分がその説明に選ばれたのは神官長の中での力が、ほぼ中庸だったからと理解していた。

もし、他の神官長が選ばれていた場合に、どのような結果になったのかは想像できないが、今現在のこのような現実を受け入れるには、本当に幸運だったのだと思い込むしかない。

だが、それでも

ヒューリヒの心にわだかまる棘が、その歡喜を僅かに押し留める。

神の一枝である本人が考え、良しとした事柄だとしても。

自分の考えの浅はかさで、彼の方の身体に傷を負わせる事になったという事実は消えないから。

何より、神職に就いている自分も只人であると改めて認識した事で、畏敬がさらに深まり、栄誉だというその言葉さえ、自分にはおこがましいもののだと感じてしまう。

唯一の神である聖天に一番近い至高の御方。

自身がいくら焦がれても、手の届かない御方だと……そう思っていた。

その御方から直接、触れられた。

それも、傷を癒して下さっただけでなく、枝の初葉という稀なる僥倖を伴って。

それらの事を体感し理解したヒューリヒの歓喜は、自身の持つ自負を消し飛ばし、己の往く途を決意した。

未だに神気の消えないその身は、晶貴の行った言霊縛りをも凌駕する。

ヒューリヒは晶貴の正面で頭と両手両膝をつき、五体投地礼を取った。

「聖天リ・ラ・リリウ様の御許にて、我、聖天神殿風の神官長ヒューリヒ・ムントは、神の一枝であらせられるラキ・シンデイン様を唯一の我が師、我が主として驥尾きびに付す事を、この魂に誓う」

ヒューリヒの言葉に神気が乗り、光となって天へと昇る。

晶貴はその言葉に一瞬戸惑ったが、軽い溜息の後、口を開いた。

「今後、もっと良い師や主が現れるかもしれないよ？」

「貴方様のみが、その唯一でございます」

「我儘言うかもよ？」

「喜ばしく存じます」

「もし、不必要だと言ったら？」

「誓いは既に成しました。生死を含め、我が身はシンデイン様の道具。必要な時のみ御利用下さいませ」

「……………クーリングオフとか、ないのかよ」

ぼそりと誰にでもなく呟き、晶貴は再度溜息をつく。

ヒューリヒは真っ直ぐにそのキラキラとした青い瞳を晶貴へと向けている。

人が他者へ行う「契約」と違い、本人が本人にする「誓い」は防ぎようがない。

これからの先行きを思案しつつ晶貴は言う。

「誓いとはいえ、その気がなくなったらいつでも破棄してくれていいから。それで良ければ認めよう」

「至高の幸せにございます！」

晶貴の認可にヒューリヒの顔がほころぶ。

第 14 話

天頂の夢 こいねがう」

5 「（後書き）

晶貴に、忠僕が出来た（ちやつちやう〜）
ヒューリヒが白緑の髪 of 可愛いわんこに見えるよ（^。^；）

第 15 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 1」(前書き)

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 15 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 1」

カチャカチャという食器の音と香ばしい香りが室内を包んでいる。

「もう一杯お茶を如何ですか？」

「いや、もう結構」

晶貴達は現在、昼食後のお茶中である。

大神官による神の一枝公示の儀が無事に終了した後、怪我人が出たり、不本意ながら下僕ができたりと、まあこまごまとあつたが。何はともあれ晶貴の「お昼食べようよ」という言葉で場所を移動する事となる。

聖都ランカスの都市全体像は、その中央にある聖天神殿を中心にしてほぼ円を描く様な形となって広がっている。

聖天神殿全体も円に近い状態で建立されており、前半面部にある

主塔とその外縁部にある大小様々な建築物で囲まれた形となっていた。

上空から見れば建物の外部構造くらいは判るだろうが、街の方から眺めた場合、外縁部にある建物や門で隠される為、聖天神殿の内部については外界の者達には詳しく知られていない。

大神官に連れられ着いた場所は、外界からも神殿からも隔離された場所にあった。

位置としては主塔の後方にある広い庭園内の中央にある建物。本殿と同じく白を基調としているその建物が、この神殿内で神の一枝専用の住処となる居宮「彩宮」である。

隔離されているとはいっても、決して隠されている訳ではない。勿論、神殿内に居る者達だけでなく、一般の者にもその建物は見えるだろう。

ただそれは、あくまで見えるというだけの事にすぎない。幾重にも施されている結界や神気による術で、選ばれた者しか立ち入る事の出来ない宮、それが「彩宮」であった。

現在、この彩宮に立ち入る事を許されているのは、神の一枝でありこの彩宮の主となる晶貴。

大神官と六名の神官長。

そして、大神官と神官長達がそれぞれ選抜した神の一枝の世話役たち十名である。

彩宮内でその十人の出迎えがあつたが、大神官の「この者たちは後ほど紹介するとして、まずは食事を」という言葉で先に昼食を摂る事となつたのだ。

活動する時間である事を考慮してか、朝食よりも少し肉料理や野菜料理が多い。

見知つた料理ではなかったが、味付けは好みで、さっぱりとした飲み物と良く合う料理だった。

給仕を受け一時間^{タラン}ほどで食事を終える。

食後のお茶は「テムー」という名の種類で、イルフェラム国で飲んだのとは違うものだった。

烏龍茶と紅茶を合わせた様な香りのする、黄色に近い色のお茶。

この国でお茶といえばこれ、という程一般的に飲まれているお茶らしい。

晶貴がお茶を飲み終えるのに合わせて、大神官が世話役たちの説明を始める。

「シンディン様の護衛、および身のお世話役として、まずは男女五人ずつ選出いたしました。この彩宮内の維持管理もこの者たちが行います。全員神官職にありますが、同時に騎士の称号を持つ神官兵でもあります」

晶貴の前に整列した十人が無言で礼を成す。

大神官は説明を続ける。

「この者たちが当座、この彩宮に滞在中、シンディン様と生活を共にする者達となります。当座、と申しましたのは人数の増、或いは人員の変更の可能性を思慮しての事にございます」

「減らすとかは？」

「彩宮は広うございます。シンディン様の御滞在中、この宮の維持管理を行う最低限の人員数が十人であるとお考え下さいませ」

「判った。で、増員というのは判るけど、人員の変更というのは何？」

「この彩宮は聖天神殿に御来訪なされている間のシンディン様の「家」でございます。寛ぐ事の出来ない家は苦痛でしかありませんかな。簡単に言つと、その者達がシンディン様と気が合うかどうか、という事です。シンディン様の御心に適わない者は別の者を選出し交代いたします。勿論、選出された者がシンディン様とは生活してゆけないと感じた場合も、別の者を選出し交代という事になりますよ」

少し考え、晶貴が言う。

「……………仮に、人員を交代して貰った場合、その人物の評価が下がるとかいう事は？」

「陰口程度でしたら多少はあるでしょうな。ですが、陰口を叩く様な心根を持てば自身の神気が減少する事は周知です。また、交代されてしまった者も神の一枝様から嫌われた等の感情は持ちません。ただ、自分とは縁が無かったのだと、そう思うのみです」

「ま、その程度なら安心して変更できるか」

ひとり頷きながら納得する晶貴。

自分が気に入ったとしても、相手もそうとは限らない。

誰しも苦手な相手というのはあるものだ。

晶貴は、目の前に静かに並ぶ十人を見やり、大神官に言う。

「自己紹介は？」

「ございません」

「？　なんで？」

不思議そうに問う晶貴に大神官が応える。

「先程も申しましたように、この者たちはあくまで「当座」でございます。これより数日は「お試し期間」とでもお考え下さいませ。

その後、シンデイン様が御自身の傍に残すか残さないかを裁可され、認められた者のみが初めて名を明かすのが通例となっております」

「名前ないと、呼ぶのに不便なだけ」

「では、色でお呼び下さいませ。私も神官はその能力の方向性で、髪の色彩がこのように色とりどりに変化しております。見分けるには良い目印かと存じますが」

自分を指し周囲の者たち全てを指し示す大神官。

確かに皆、服も髪も白色を基調としているが、瞳の色と髪の一部が違う色となっている。

自身にある知識によれば、神官職は望めば誰でもなれるものなのだそうだ。

それまで神官を目指していた者も、それまで悪事を働いていた者も、平等に神官職に入る為の試練を受けられるという。

必要なのは神官になるという意思と、それに見合う神気のみ。神気も、多い少ないではなく、質なのだという。

神殿にて神官になるという意思を表明し、聖天へ祈りを捧げる。祈りが届けば、本来あった髪の色が、その場で真っ白なものへと変化するのだという。

だから、新米の神官の髪は誰しも純白で他の色は無い。個々人のそれからの鍛錬で自身に見合う能力の種類に応じて、髪に白以外の色が出始める。

一色だけでなく何色かの色が出る者も多い。

一色ではあるが、その色が別の色へと変わる者も居る。

けれどそれも、鍛錬精進してゆく中でそれぞれに見合った一色のみに落ち着く事が殆どだ。

また、色がなかなか現出しない者も居る。

色が現出したのに、それが消えて白へと戻る者も居る。

だがそれは、決して色付きの者と比較して劣っているという事ではない。

白は希望の色。

何色にでも変われる待機の色なのだから。

ちなみに。

神官だからと自己節制している者も居るが、禁欲という形の強制はされていない。

飲酒も恋愛も婚姻も、基本自由である。

ただ、それらの欲も度を超すと情の均衡が崩れてしまう。

一つのものだけを愛しすぎると、他のものが見えなくなってしまう。

一つのものだけに執着するようになると、他を大切には思えなくなる。

そういう事が重なり続け、それが神と人とを繋ぐ役割すらも忘れる程になってしまうと、神気が眼に見えて下がる事となる。

つまり、白かった髪が神気を無くし、生来持っていたその者の地色に戻ってしまうのだ。

勿論地色に戻った時点で神官としての位は無くなる。

還俗するか、それとも神官職の試練をもう一度受けるか……或いは地色のまま神殿で神官の下働きをするかを選ぶ事となるらしい。

目の前に居る世話役候補達の髪の色を眺め、晶貴はふと思う。

横文字を除けば、こちらの言葉も問題なく伝わっている様子だし、相手からの言葉も問題なく自分に伝わっている様に思う。

時間や距離などの感覚は刻まれた記憶で大体把握出来たので違和感なく使用していたけれど、色に関してはまだ確認していない事に気がついた。

『色の表現はどの辺りまでオツケーなんだろうな？』

晶貴は室内を一度眺め、再度神官達を見まわし、大神官へ言う。

「色の呼称を確認したいんで、指差し呼称してもいいか？ 私の言葉が通じない時は、その色の呼称を教えて欲しい」
「承知致しました」

物や人を指しながら色を確認してゆく晶貴。

金銀白黒赤青緑灰紫茶。

水色や空色という、この辺りまでは同じだった。

問題はこれからだ。

「藍色」

「……ガイ色、でございます。服などをこの色に染める際に使う植物の名となります」

「群青」

「海色、でございますな」

「レモン色」

「ソラン色、と申します」

「あ、昨日の夜出てきた酸味のある果実か」

「左様です」

「オレンジ色」

「ララ色、ですな。甘酸っぱい果実でございます」

「ピンク色」

「カリデ色、でございます」

「甘いとか説明のあった、あの飲み物の？」

「はい。この位の大きさの実が十前後集まる様に実っていて水分が多くございます」

「でかつ！」

大神官の示した大きさは両手の人差し指と親指を円の形にしたものだったが、指と指の隙間が開けられていて直径にしておよそ十五センチ程はあるものだった。

それが十前後集まっている様子を想像してはみるが、なかなか難しい。

『そのうち実物が生っている所を見てみたいもんだ』

笑みを浮かべながら晶貴はさらに幾つかの色を問い、最後に聖霊を指差した。

「聖霊の様な感じに光る虫とか魚は居るの？」

「魚は良くは存じませんが、南方に居る虫の中にハツクンと呼ばれるものが存在します。長い二本の触角の先が聖霊の様に光り明滅していて、人の魂の破片が宿っているとも言われています」

「へえー……似た様なの居るのか」

光る部分は違うが、蛭と似た様な言い伝えに晶貴の顔が綻ぶ。

「うん。大体の色は聞いたし、分からない時はまた訊く事にするよ」

一応の質問を終え、晶貴は世話役候補達の方へと近付く。

「白、黒、灰、茶、赤、青、緑、紫、金、海……で、いいかな？」

一人一人を指差しながら言う晶貴に、全員が無言で頷く。

晶貴はにつこりと笑みを浮かべ、言う。

「余所余所しいのは好きじゃない。力に媚びる者も好きじゃない。おだてや褒め殺しも、真平ゴメンだ……言葉や態度がある程度丁寧なのは仕方ないので許す。だが意見はしっかりと口にしろ。相手が私であるうと、間違ってたら叱れ。それが出来る者だけしか要らない」

神気の乗っている言葉をいきなりぶつけられた世話役候補の者たちの身体は、一瞬ぐらりと揺れた様に見えたがすぐに持ち直した。

大神官や神官長達は余裕の笑みを浮かべる。

晶貴も「ほう」という表情を浮かべた。

大神官が笑いのまま言う。

「御安心下さいませ。その程度の神気で倒れる様な者は世話役の候補にも上げません」

「それはそうだろうな」

晶貴も笑みを浮かべた。

その様子に、大神官が問う。

「……御知りになりたい事は確認できましたか？」

「ん。ま、今のところは全員合格圏内って事で」

「御意に」

勿論、あの程度の神気で彼らが倒れないだろう事は晶貴とて承知の上。

知りたかったのは、彼らの表情^{かお}。

表面をどれ程繕っていても不意打ちをくらえば、僅かでもその者の素が現れる。

物品などに含まれる神気や神官達自身の放つ神気には慣れていても、神の一枝本人から放たれた神気など生まれて初めて味わうのだから尚更だ。

神気を受け、繕っていた表面が剥がれ落ちた世話役候補たちのその素の表情……それまでの無表情な瞳ではなく意思と感情の見える瞳を……晶貴は好ましく感じた。

第 15 話

祈りのこころ 正邪を問わず」 1 「（後書き）

とりあえず、仕上がっている部分までをup。

体調も何とか回復してきているので、次週からはもう少し執筆速度が戻るかと思っています。

感想場やメッセージへの返答は週明けてから致しますです。

応援有難うございますm（　　）m

第 16 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 2」(前書き)

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 16 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 2」

「それでは、また明朝に参ります。ですが私どもに何か御用がございましたら、何時なりと呼びつけ下さいます様お願い申し上げます」

大神官の言葉に晶貴は頷く。

世話役候補に神気を放ってから後、時間にして二十分ほど明日についての説明を受けた晶貴は、大神官達にはこれから明日以降の細々とした準備があるらしい事を聞いて退室を促したのだ。

「はいはい……何かあったら呼ぶから。大神官達も、寝不足とかにならない様にな？」

「御気遣い、有り難く頂戴いたします。シンディン様もごゆっくり御寛ぎ下さいませ」

大神官の言葉と共に、彩宮より退出してゆく大神官たち。

彼らの姿が部屋から見えなくなり、彩宮からもその気配がなくなると、晶貴は両腕を上げて「むー」と伸びをした。

部屋に控えている世話役候補の十人とは明日の朝まで一つ屋根の下で暮らす事になる。

思う所も考えたい事も山ほどあったが、まずは一つだけ残っている本日の仕事を済ませないとままならない。

実際、晶貴が本日しなくてはならない儀礼事はもう全て終わって

いる。

特に何もしなくてもいい状態ではあるのだけれど、リ・ラ・リリウとの交感で得た色々な知識が晶貴の怠慢しようとする心を邪魔する。

何より、早めにこなしておかないと自分も相手も双方に困るだろうという、明日の儀礼で使用する服の選定をまだ終えていないのだから。

『めんどくさー……でも、儀礼とかでは必要だからなあ……』

軽く息を吐いて晶貴は世話役候補達に言う。

「先に服、選ぶわ。場所はどこかな？」

「はい！　こちらです」

元気な声は紫髪の男からだった。

先程の神気に乗せた言霊の所為か、それとも本来のものなのか。世話役候補たちにあつた、ぎしぎしとした雰囲気が消え柔らかなものへと変じている。

晶貴は軽く首肯して彼らに付いて行つた。

先程まで居た部屋から出、廊下を別室三つ分ほど進んだ先の部屋へと入る。

かなり広い、鏡台や立ち鏡だけでなく壁にも大鏡のある部屋だった。

晶貴は勧められるまま、柔らかな絨毯の上の長椅子へと座る。

紫髪の男は茶の髪の女と共に何やら指輪をつけ、晶貴の正面に位

置する壁へ手をついた。

「うはー……………」

呆れとも感動ともいえる声が晶貴の口から零れ出る。

魔術の一つなのか、突然壁が目の前から消えたのだ。

指輪が多分開閉の鍵となっているのだろうが、流石に驚く。

消えた壁の奥には、かなり大きな空間が存在している様に見える。正確な広さは判別できないが、今現在晶貴の居る部屋の倍以上はあるだろう。

そこには各種類の服と靴や帽子といった、およそ服飾関係の全てのもものが所狭しと置かれていた。

世話役候補たちは皆、その中へと入って行き、紫男と茶女だけが晶貴の近くへ戻り、言う。

「本日お決め頂くのは明日の儀礼での御正装となります。その後お疲れでない様でしたら、こちらの宮でお使いになる夜着や普段着などを御選び頂ければ、と思います」

「んー」

軽く返答して晶貴は衣装の群れを眺める。

只人には身分や地位、儀式等に応じての正装が色々と決まっているが、神の一枝に限り、予め決まった正装というものはない。

色も形も基本自由で、その場その時で別の衣装という事も出来る。

神の一枝における正装とは、神の一枝本人が正装として認識し、服に本人が神気を乗せれば出来上がりという至極簡単なものだから

だ。

ただ、このラグドリユウスという世界に於いて「色」というものは、神の一枝を象徴する金色や、神官達的能力に応じて変化する髪の色などが現す様に、結構大きな意味合いを持つ事が多い。

例えば、哀しみに涙する者たちの前で、喜びの歓声を上げたりはしない様に。

例えば、ようやく掴んだ和平を誓う席で、改めて開戦を宣言などしない様に。

ほんのささやかな意図の食い違いだとしても、それが大きな波紋にならない様に。

特に儀礼としての正装になると、それなりに考えないとならない。位の高い者ほど、それらの意味合いは深くなってしまうものなのだから。

晶貴はしばらく思案して、口を開く。

「基本は白。光沢のある薄衣が重なっている様な仕立ての物はあるか？」

「ございます。……緑！ その辺りに二着ないですか？ 灰の所にも一着」

衣裳部屋内部を把握しているらしい紫男の指示で、三着の服が晶貴の前へと並べられた。

どれも白い生地で柄や模様などはない。

「どれも極薄のサツカル織物です。光源に応じて様々な色合いの輝きが出ます」

成る程、手にとってみれば光の当たり具合で虹の様な輝きが見える。

触り心地は絹織物に良く似ている。

軽くて着心地は良さそうだ。

晶貴は三着の中で一番動きやすそうな一着を選ぶ。

「この辺りかな？ 自分で服脱ぐんで、着付けは頼めるか？」

「はい！」

晶貴は服を脱ぎ始め、カッターのボタンを外しながら思い出した様に言う。

「ついでに普段使う肌着と下履き、あと普段着を適当に見繕ってくれるか？ 肌着類の色は何でもいいが、基本男物で頼む。普段着は動きやすいものがいい、華美なのやキラキラしたのはやめてくれ」

「承知しました。茶、任せるよ」

「はい！」

急ぎ足で茶女が衣装場へと飛び込んでゆく。
辺りが賑やかに動き始める。

意図を察したのか、晶貴が下着のみになった時点でもう肌着類が揃えられていた。

床に敷いてある絨毯のおかげで、裸足でも冷たさは感じない。

晶貴は、そのままさっくりと自分の下着を脱ぎ素裸となる。

世話役候補たちの視線は晶貴に集中しているが、顔を赤らめる者はいない。

かといって変なものを見る様な感情も見受けられない。

神の一枝が両性であるという事実を己が目で見確認した、というただそれだけのもの。

好奇心な視線を受ける事が多かった晶貴にとって、この扱いは新鮮だった。

大神官の言っていた「そういうものと認識されるだけ」という言葉が何となく理解できる。

一般人は判らないが、この世話役候補達の反応は晶貴にとっては心地好い。

用意された肌着を身に着け、さらに心地好さが増す。

下履きは男性用だったが、上の肌着は胸の膨らみがきちんと考慮されているものだった。

晶貴がこの世界に来て、まだ二日程度。

いくら神の一枝の性別が「無性」と「両性」の二つだけだとしても、年齢や身長、体型などは個々人違うのだからすぐに衣装が揃う方がおかしい。

「良くこんな短時間で衣装を揃えられたな？」

疑問を口にした晶貴に、紫男が笑顔で答える。

「神の一枝様の、おおその背丈と体型は大神官様より連絡がありましたので、それに見合う衣装の置かれている部屋へご案内した次第でございます」

「という事は、他の寸法の衣装が置いてある部屋があるってことか」

「はい。衣装部屋は、十五部屋ございます」

「その部屋は、私は使わないんだよね？」

「はい。特に必要のない限り封印されております」

「勿体ねー」

「ええ。ですから封印されているのですよ」

紫男の説明によると、何でも虫に食われたり風化したりしない為に、術をかけ封印するのだという。

神の一枝がこの世界に居ない時期、厳選された衣装類は年に一度各種新しいものが納められる。

通常封印されているそれらの部屋が開かれるのは年一回その時のみで、その後はまた封印されるのだそうだ。

神の一枝降臨後は、身体に見合った適切な部屋を選別。

降臨中はその部屋だけを使用し、衣装もその用途や神の一枝の希望で増減する。

そしてその神の一枝が逝去した後は、使用した着衣類は正式に譲渡されたものを除いて、全て破棄……灰すら残らない様に術で焼尽されるのだという。

その後、またその寸法の衣装が作られ部屋へ納められるのだとか。時間も手間も金も、しっかりとかがつていそうな内容だった。

ただ、神の一枝は突然降臨する。

なので、体型や年齢がどのようなものであれ即座に対応する為に、このような仕組みになった事は仕方のない事かもしれない。

説明を終えた紫男が晶貴の前に膝をつく。

「採寸も含め、御身に触れる事となります。御許可頂けますでしょうか？」

晶貴は紫男の瞳を見つめた。

水色に灰色の交じる落ち着いた瞳には、異性に触れるとか興味だとかそういう思いはなく、ただ嬉しいな感情のみが感じられる。

そう認識した晶貴の答えは一つだった。

「構わないよ」

「有難うございます。では、御身足より拝見いたします」

紫男の両手が晶貴の右足を包むように触れる。

ほんの一瞬。

晶貴の足の指先がぴくりと動く。

その微かな動きに紫男の手も止まる。

少し不安げな表情で、足へと向けていた瞳を晶貴の顔へと上げれば、そこには苦笑があった。

「悪い。大丈夫だから続けてくれ」

「……はい」

晶貴の言葉に紫男はそのまま、ゆっくりと足の甲や踵へとその手を滑らせてゆく。

その後、ひも状の物差しで寸法を取り用意してあった紙へと寸法を書き記している様だ。

近くに居た黒い髪の人に履物の寸法と場所を伝えた後、ふくらはぎ、腿、腰というように、晶貴に確認しながら淡々と寸法をとる紫男。

『自分から他人に触るのは随分平気になったけど、他人から触られるのはまだまだ慣れないなあ……』

小さな頃からの事なので、裸体を見られる事にはさらさら慣れたが、不用意に触られるのだけはどうしても慣れる事が出来なかった。

投薬や検査という名目で色々な仕打ちを受けていた晶貴がその唯一抵抗できた心で、嫌悪を相手に振り撒きながら受容するしかない動作。

それが晶貴にとっての「触れられる」というものだったから。

独り立ち後、出会った幾人かの相手……気心も知れ、身体を繋ぐような仲になっても、こればかりは中々馴染めないものだった。

触れられる事を意識していても、最初の一瞬、どうしても身が竦む。

晶貴にとっては早く無くしてしまいたい身体反応のひとつだった。

指先から頭まで、ひと通りの寸法を取り終えた紫男に、晶貴は言う。

「折角測ってもらったけど、胸囲は一定ではないんだが」

「……どの程度でございますか？」

「もう少し大きくなる事もあるし、男性と変わらないほどに平らな時もある」

「では、現在の寸法を中心に、何時でも調整がきく様な仕立てに致

しましょう」

「そうしてもらえると助かる」

「御胸の方はその様に致しますが、御腰周りの方は如何致します？」

「あー、下は普通の男性と変わらないと思ってくれていい」

「承知致しました。……御寒くはございませんか？」

「大丈夫、寒くない」

「採寸はこれで終わりですので、これより着付けに入らせていただきます。まずはこちらの下履きから……きつくはございませんか？」

「ん。丁度いい」

「では肌掛けの上に、こちらの上着を……あ、その部分は結ぶのではなくこちらの脇へ通して前で留める作りになっております」

説明を受けつつ肌着の上に一枚ほど着衣し、先程選んだ白い服を着せ付けて貰う。

用意された履物も服に合わせているのか白色の物だった。

革の様な素材で、膝下丈のブーツに良く似ている。

結構足にぴったりなサイズだが、足の甲辺りから上部へと組まれている紐である程度の調整がきくので、きつさのない履き心地である。

「裾と袖の長さは如何でしょうか？」

「んー……」

両腕を上げ軽く回す様に動かしたり、数歩歩いてみたり腰を落としてみたり。

ひと通りの動きをして負荷を確認した晶貴は頷いた。

「袖の方はこのままでいい。裾は履物を履いた状態で床に付かない様に、もう少し短くできるか？」

「承知致しました」

「で、肩飾りがあるけど、ここには何か付けるの？」

「バルムをつける様になっていますが……金！ その辺りにある白のサツカル織物を一枚こちらへ」

持つてこられた布地は現在着ている物よりも厚い仕立てにしてあった。

広げられたそれを見た晶貴は呟く。

「あー、マント……外套かあ」

「はい。不要でしたら肩飾りも外しますが」

「……いや、いい。このまま使おう」

肩飾りへマントバルムを付けてもらい、鏡に映る自分の姿をひと通り眺めて晶貴は言う。

「うん。これで明日の正装は決定。………脱いでいい？」

「はい、お手伝いしましょう。あと、こちらに普段着を幾種類か御用意致しましたが、そちらに御着替えなさりますか？」

「そうしよう。……その濃い緑の上着と黒の下……これは何て呼ぶんだ？」

「タルプでございます」

「タルプパンツね、覚えた。んじゃ、その上下で」

「畏まりました」

紫男は手際良く晶貴から服を脱がせ、指示された普段着を着せ付けた。

履物は足首が隠れる程度の黒っぽい皮物で、ゆったりとしたもので紐なしのショートブーツに似ている。

「うん、丁度いい」

動きやすい服に笑みを浮かべ、晶貴は紫男に言う。

「先刻まで着ていた服を仕舞えるような蓋つきの箱、あるかな？」
「はい」

すぐに用意された箱に、晶貴はそれまで着ていた元の世界の服や携帯電話を含む小物を全て収める。

そして聖霊を使い肌着を含む服だけを洗淨し、蓋を閉め自分以外誰にも開封できない様に封印をかけ、紫男に他の服と同じように収納を頼む。

自分の持ち物が知らないうちに他者の手に渡り、崇められたりしても困るが、まあ、この部屋の封印と箱の封印という二つがあれば、滅多な事では紛失などないだろう。

沢山の衣装の中へ運ばれる箱を見ながら晶貴は「ふうっ」と一息つき、言う。

「仕上げの神気のせは仕立て直しが終わってからにするつもりだけど、明日の午前中に間に合うかな？ 無理そうなら手直しするのは

裾だけでもいいよ」

儀式用の衣装を別の箱へと収めていた紫男が笑顔で答える。

「お気づかい有難うございます。本日中に私が仕立て直し致しますので、ご安心下さいませ」

晶貴の瞳が少しだけ丸くなる。

「……縫物、得意なの？」

「はい。神職に就くまでは針仕事を生業にしておりましたから」

「へー、凄いな。私はそういうの、あまり得意じゃなかったから尊敬するよ」

「勿体ないお言葉……望外でございます」

本当に嬉しそうに笑みこぼす紫男。

第 16 話

祈りのこころ 正邪を問わず」 2」(後書き)

よろよろながらも復帰。詳しくは活動報告にて。

久しぶりの執筆。キー打つのが遅っ！(指が動かないよ／苦笑)
そしてちよつと短め。

続き頑張るぞー、おー。

第 17 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 3」(前書き)

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。

また「性」に対する免疫がない方、あるいは「性」の苦手な方はご注意ください。

第 17 話 祈りのこころ 正邪を問わず」 3」

翌日の衣装も決まり、衣装部屋を後にした晶貴は世話役である神官たちに彩宮を案内してもらっていた。

自分用の居室や寝室、浴場等を教えて貰った後で「それ以外の場所も全てな」と案内を頼むと、少しでも世話役達に躊躇が見られた。聞けば、世話役達の居室や浴場も、この彩宮内にあるのだという。下僕たる者たちの生活の場までご覧頂くのは目の毒ではないかとの金女の言葉に、晶貴はにんまりと笑って訊いた。

「ここは、私の【家】なんだよな？」

「はい。勿論でございます」

「じゃあ、貴方達は自分自身の【家】に知らない場所があって平気か？」

「……それもそうでございますね」

苦笑しつつ金女も他の世話役も頷き、再び彩宮の案内が続けられる。

思った以上に敷地が広い。

そう感じるだけの大きさが彩宮という建物にはあった。

自分専用の部屋以外にも数多くの空き部屋がある事を不思議に思い訊くと、それらの部屋は予備なのだそうだ。

彩主の希望で趣向の違う複数の居間や寝室を作る事もあるのだという事。

また、彩主が寵愛する者たちの居室になることもあるのだという事。

「神官以外の一般人でも彩宮に住めるって事？」

「はい。彩主様の御意向と許可がございましたら、どなたでも何人でもこちらに居住できます。お部屋が足らなくなったら彩宮を増築いたしますので、人数制限等の御心配は必要ございません」

「あー、なるほど。それで空部屋の大きさとかまちまちなのかー」

「歴代の彩主様の中には、百人という大所帯もあったそうですよ」
「うわー凄いなそれ」

あちらこちらと案内され、世話役達の居室もしつかりと教えて貰い、最後に案内されたのが厨房だった。

「ほー……」

零れ出る言葉と共に、晶貴の瞳がきらきらと興味に輝く。

中世っぽいだろう予想はしていたが、やはりそういう雰囲気厨房だった。

沢山のかまど。大鍋小鍋。水場や調理台。

壁にある大きな食器棚の中には、様々な種類の食器がきれいに並んでいる。

奥の方には色とりどりの野菜らしき姿も見える。けれど、厨房という場所の割に臭気が少ない。

『聖霊達を使って浄化でもしてるのかな？』

そんな事を考えながら辺りを見渡すと、一つの扉が目にとまった。ごみなどを捨てるための外部へ出る扉とは違い、壁に当たる場所にある扉。

その扉周りに聖霊が沢山居るのが見える。

「あの扉は？」

「生ものや傷みやすいものを保存しておく氷室になります。少し寒いですが、ご覧になりますか？」

「見る見る」

白女が扉を開け中へ入り、その後を付いてゆく晶貴。

『おー。まさに冷凍冷蔵庫』

氷室の中は乾燥した冷気に満ちていた。

だが予想に反して、室内を冷やすための大きな氷塊などはその場にはない。

どうやら、水の聖霊と風の聖霊とが冷気を作り上げ、冷蔵温度と

冷凍温度を使い分けている様子。

何より、場所によって冷凍と冷蔵を分けているのではなく、品物に応じて温度が使い分けられていることに興味をひかれる。

聖霊がそれぞれに温度の壁を作り上げているので、冷凍物の隣に冷蔵物を置いても凍らないという便利さに、再度感心した。

「へー。水と風でこういう使い方出来るんだー」

「はい。聖霊を一か所に期限付きで留め置くという術を使用しております」

「なるほど」

晶貴は頷きながら辺りの品物を見渡す。

ここにこうして保存してあるからには食材なのだろう、もの。けれど、畜肉っぽいものや魚類っぽいものに見えるそれらの生来の姿はおろか、名すらまだ知らない。

『ああ……本当に。見知らぬ世界、なんだな……』

興味が先走っている今、必要以上に高速で思考が巡る。

今、考えないとならない事。

今だから、考えたい事。

今はまだ、考えたくない事。

それらがぐるぐると渦を巻く。

『ダメダメダメ！ 落ち着け！ 順番……順番！ 一つずつ』

一呼吸の間で、もう一度心を「今すべきこと」に戻す。

視線を氷室の保存物から世話人達に戻し、笑みを浮かべながら晶貴は訊く。

「この厨房で彩宮の案内は一通り終了かな？」

「はい」

金女の返答に、氷室を出た晶貴は厨房の壁に設えてある時刻板に視線を向け「ふむ」と呟き再度訊く。

「晩御飯の時間って決まってるの？」

「特に決まりはございません。彩主様の御要望で時刻の変更を行います。本日は概ね、十九タラン辺りを夕餉の目安としておりますが、ご希望の時刻などございますでしょうか？」

「いや、その時刻のままでもいい。食事はどこでするのかな？」

「昼餉をなさいました食堂にご用意したいと考えてはおりますが、彩主様の居間や寝室にお持ちする事もできます。如何なさいますか？」

「んー。今からちょっと居間に籠るから、居間に持ってきて貰っていい？ あと、品数は昼みたいになくなくていいから」

「畏まりました」

厨房を出、自分の居間へと着いた晶貴は世話役達に言う。

「これからちよつと考え事をするから、暫く一人になりたい。食事の用意が出来た頃に声をかけてくれる？」

「承知いたしました。ですが、緊急の御用など無いとも限りませんので、扉の外に一人だけ置いていても構いませんでしょうか？」

「……分かった」

「有り難うございます。では、食事のご用意が整いましたら扉の外に居る、この「赤」より先触れでお知らせをさせる事でよろしいでしょうか？」

「うん、それでいい」

世話役達が一礼をし居間の外へと姿を消した後、晶貴は長椅子にどっかりと腰を下ろした。

考えないとならない事は多い。

まずは明日の「聖祝の儀」だが、これはもう晶貴の心ではイルフェラム国と決めているので問題はないだろう。

過去の神の一枝の降臨に際しても、現出した国に最初に訪れるという事が多い。

イルフェラム国王も、そのつもりで迎える準備を進めているだろ

うから。

披露目にあたる「高覧の儀」も、露台バルコニーに無言で立っていれば良いだけなので、特に問題ない。

悩みどころは、その後の「瑞光の儀」だった。

聖天リ・ラ・リリウの体現者、神の一枝。

聖天の吐息であり、力持つ聖霊をその感情ひとつで自由自在に使用できる存在。

その神の一枝の放つ、最初の心。

それが「瑞光の儀」と呼ばれるものだ。

リ・ラ・リリウと交感した際に得た記憶の中で、過去の神の一枝達も色々な形で「瑞光の儀」を行っていた。

聖都ランカスに集った民衆全ての病を治癒した神の一枝や、その地に砂金を降らせた神の一枝。

自分の降臨した地にだけ祝福を与えた神の一枝や、山ひとつ破壊してしまった神の一枝。

行った内容は知る事が出来る。

けれど、それらを行った過去の神の一枝の心もちは、その本人にしか正しい事は分かり得ない。

知らない事ばかりのこの世界。

そして世界を滅ぼしてしまうことすら出来るだろう、強大な自分の力。

何をしても良いと、創造主聖天リ・ラ・リリウにすら認められている存在。

晶貴もまた、考える。

この世界に対する己の心を。

ゆっくりと思考を巡らし、晶貴は意識を周りの聖霊達に向ける。

『この世界の歴史。出来るだけ正確に伝えて』

神の一枝の命に、聖霊は即座に従った。

一方、彩宮から聖天神殿上位議会場へと移動した大神官と神官長達は様々な事柄の決議を行っていた。

彩主の世話役の増員があつた場合の人員選定。

彩主の希望があつた場合の彩宮内の家具や内装などの改装や新規納入についての示唆。

明日の式典に際しての警備体制や人員配置等の再検討。
等々。

決議しなくてはならない事が多々あり、それらに対してきばきと指示をしている大神官が、次なる議題を神官長達へと振る。

「次に「聖摂の儀」後の他国来訪に際して。これまでの状況を図るに、シンディン様は恐らくイルフェラム国を選択される可能性が高い。当初の予定では同行傍付神官はカルナ・サラ、アムル・カントの両名としていたが、それにヒューリヒ・ムントを加え、三名とする」

大神官の言葉に光の神官長が問う。

「先だつての議に於いて。傍付神官の役は、ヒューリヒにはまだ早いとの仰せではございませんでしたか？」

「状況が変わった。「枝の初葉」をその身に受け力量も傍付神官の位に遜色ない。何よりヒューリヒがシンディン様に対して誓いをし、それをシンディン様も許容なさっている。今この時点でヒューリヒをシンディン様から離れた状況に置く方が、やや困った事態になる可能性を防ぐものと判断した」

「困った事態とはどういったものでしょう？」

「「枝の初葉」を受けた事で、ヒューリヒの加護たる風の聖霊はシンディン様の御傍にある聖霊達と現在連動している状態が続いている。さらにこの者がシンディン様に対して道具としての誓いを立てている今、シンディン様の望む事柄次第ではそれを感じた聖霊達によって、突然ヒューリヒがその御傍へと召喚されてしまうという事態も起こり得る。ヒューリヒが何がしかこちらで神技を行っている

る最中に、もしそのような事態が起こればどのような事になるか、そなた達であれば想像がつこう」

「……………後始末が大変そうですね」

ぼそりと呟く光の神官。

聖霊の力を人が使う、その方法は大きく分けて術式と神技の二通りとなる。

術式というものは聖霊に手助けを乞うものなので、民間の導師や術師でも行える。

もちろんきちんとした順序法則があるのだが、聖霊をまとめ上げる力……拘束力がさほど強くないものが多い。

だから例え術式に失敗しても、拘束力を失った聖霊達が霧散する事が殆どなので被害はそうない。

それとは違い、神気で聖霊を束ね様々な事象を起こす神技となると、聖霊に対する拘束力が強い為に神技を途中で放棄してしまう等の失態を犯した場合、聖霊はそのまま暴走してしまう。

防護策なども取られてはいるが、神技の種類によっては宮ひとつくらい軽く破壊してくれるだろう事は明白である。

ましてや、神官長位に在する者の振るう神技が途中で放棄されるにあたっての被害は、あまり想像したくない規模となりそうだった。しかも原因となった本人が不在のまま、残された他の者達がその処理と尻拭いをする破目になるなど考えたくもない。

「納得いたしました。ヒューリヒの同行、賛同いたします」

「他に意のある者は？」

大神官の言葉に、光の神官以下、同じ心持ちだった様で頷きで同意を示す。

「では、彩主他国来訪同行傍付神官はカルナ・サラ、アムル・カント、ヒューリヒ・ムントの三名で決議とする」

淡々と、ひとつの決議を終える大神官。

「次に、明日の「瑞光の儀」に際して。主塔、展望の間隣室に医師団の配置を命ず」

「現在の彩主様の体調に懸念は感じられませんでしたでしたが……」

土の神官長の言葉に大神官は厳しく言う。

「では、訊こう。そなたが、この生まれ育ったこの世界より突然、見も知らぬ世界へと移動させられ、いきなり牢へ放り込まれたにも関わらず、その後突然に「尊い御方」として持ち上げられる。説明も出来得る限りされ、それら全てが真実だと知らされたとしても、本当に心から納得できるものであるか？」

「それは……その世界の状況と、その現場の相手への信頼によって変わるものかと」

「シンディン様がこの世界へ降臨されて、まだたかだか二日程しか

経過していないという、その現状を真に理解した上で、その信頼は築けるものと判断できるか？」

「……………私がその立場であれば、とても無理ですね。勿論、私が彩主様から完全なる信頼を戴けていると過信もしておりません」
「その無理を。辛さと共にシンデイン様は隠しておられるのだと、私は考える。シンデイン様は、聡明で伶俐な御方ではある。けれどもそれは、此度の神の一枝様が理知的であるというだけのことです、シンデイン様の側面……………一部分でしか有り得ない」

大神官はゆつくりと言う。

「神の一枝様の特徴でもある金の瞳は、この世界中でもシンデイン様御一人のみで、他に仲間と言える者達はおられない。何より全く違う世界からこちらの世界へと御降臨なされたのだ、知り合い一人居るはずもない。しかも、元の世界には戻れない。悲しむ事が、寂しがる事が、憤る事が当然なのだ。我らがどれほど心を尽くしても罵られて当然の事であるのに、そういった行動や言動がない。想像だけで言っているわけではないのだ。シンデイン様に色々と御説明をしている最中、虹彩が一切の光を失くし闇に染まるのを二度も見た。あの絶望に近い感情は御自身の御心を切り裂く刃になるもの。それでも、すぐに通常に戻られたのは物事を諦めるという事を、これまで数多く経験されているのだと考える。……………シンデイン様には、今はまだ神の一枝様として「成さねばならない事」がある。その事を御自身の精神の支えにしておられる可能性が捨てられない。「瑞光の儀」で、どのような御心を表にお出しになるのかは予想も出来ないが、これまで拝見したシンデイン様の御性格から方向性が二種類に絞れる。御力を少なめに出すか、多く出すか、だ。少なめなら問題はあるまいが、多く出す事は例え創生神の多大なる加護があ

る一枝様でも、体力精神力共に削られてしまう。何事もなければそれで良い。が、万が一を考えてのことだ」

大神官の説明に、土の神官長は他の神官長を見、彼らの頷きを同意と取り厳かに言う。

「理解いたしました。明日の「瑞光の儀」に際して。主塔、展望の間隣室に医師団の配置を早々に手配いたします」
「では、それで決議とする」

その後も次々と必要な決議をし、本日の会議は終結した。

会議の終結を述べた後、大神官は闇の神官長に声をかける。

「キサラク。改めて訊くようだが、シンデイン様の世話役は海男で本当に大丈夫なのだな？」

「疑念は尤もでございますが「彩主様の御世話役を」という要職に、闇の神官の中で現在一番適任者は？ といえば、彼しかそれに見合

「う者はおりません」

「血縁者としての情は皆無だと？」

「いえ、情は含んでおります」

口元だけはにつこりと。

けれども冷徹な瞳を大神官に向けながら言う闇の神官長。

「もしも「国」が彼に何か示唆し、彼がそれに従い行動を起こすようなら。血縁の者として、わたくし自らが容赦なく彼に引導を渡す事でしょう」

「……真意であるな？」

「勿論でございます。」「国」の様な些少なものに心を動かされたのは過去の己。ここで生涯を終えると決めた時から、わたくしの心は創生神の御心にのみ沿い従う所存にございます」

「あい分かった。そなたを信じよう」

無言で首を垂れる闇の神官長。

その応答を眺め、火の神官長が光の神官長に問う。

「ニアどのは確か北国ヒラディアナの……」

「ええ。元王族ですが、王位継承権を捨てて神殿に來られた方ですよ」

「あの闇の神官……海男は確かに技量が高い。」「国」がらみで無いのであれば、好く働いてくれる事だろう」

「確かにな。ただ、大神官様が心配なされているのは、多分別事だと思いますよ」

「別事、とは？」

火の神官長への答えは、会話に割り込んだ土の神官長からもたらされる。

「闇の神官達の一番得意な作業は「癒し」ですもの。精神的な癒しも肉体的な癒しも、どちらをも相手に与える事の出来る、その技量を大神官様は御懸念なさっておいでなのよ。ま、親バカに近いものでしょうけど」

くす、と笑みを浮かべる土の神官長に、大神官は真面目な表情のまま言う。

「親バカで結構。彩主様の……シンデイン様の御身体にも御心にも一筋も傷を与えたくない。そう思ってた何が悪い」

「……親バカはお認めになるんですね……」

「神の一枝様の新しき生活の場となるこの世界で。かの方の肉親や友人の代わりを努めるようにと、そう創生神様より御心を託されたのが我ら神官。だが、責務からだけでは心が相手に伝わらぬ事は明白。自分自身が心から惹かれる、その様な御方に出会う事が出来たこの僥倖。この時代に生まれ、神官であつた事を私は心より感謝している。皆も、同じ心持ちである筈であらうに……」

土の神官長以下、頷きながら笑みがかんでいた。

第 17 話

祈りのこころ 正邪を問わず」 3 「（後書き）

かなりな期間お休みしてましたが、ようやく再開しました。

気長に辛抱強くお待ち下さっていた読者の方々に心からお礼申し上げます。

お知らせ

ほぼ一年ぶりとなります。漣です。

こちらを見ている方がどれほどいらっしゃるか見当もつきませんが、連載が止まったままで済みません。

ようやく、こうして動けるほどに身体が回復しましたので、とりあえずご挨拶です。

相変わらず薬漬けなのは変わってませんが、まだ何とか心臓動いてます。

で。

神の一枝ですが。

連載の一時中断を、もう少しだけさせて頂きます。

続きを書く気はありますので、お待ちくださいとしか言えません。

言い訳そのいち。

活動報告に有りました去年のPC故障での新品購入。

何とデジタル放送開始から僅かひと月でHD暴走につき、新品入れ替えとなりました。

今回はある程度他にデータ移してたけど……なめてんのかNOC！

言い訳そのに。

暫く小説とか書いてなかったんで、書き方忘れてました。

神の一枝の続き書こうとしたら言葉が下りてこないって……泣きそうでしたよ。

なので。

リハビリのつもりで、これまで書いたことのない書き方をしてみようかなと。

……違う話こそ書いてたら連載になりそうだったので、そちらを先に書いてみようかと。

もう一つのお話が少し落ち着いたら、神の一枝の執筆に入ります。

もう少し先で、交互に連載できたらいいな、と思います。

また。

お待ちいただく間、お暇つぶしに新しい連載をお読みになって下さると嬉しいです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300j/>

神の一枝

2011年11月6日07時41分発行